

# 宮崎石棺墓群

—確認調査報告書—

1990

宮崎石棺墓群調査団



## 発刊を喜ぶ

棚底地区のほぼ中央に位置する宮崎の丘陵地は、通称ジクササマ（十五社宮様）と呼ばれ、地区住民の憩いの場として親しまれています。また、樹木うっそうと繁り、昼なお薄暗く、古代の墳墓が点在する様は何かしら靈験が感じられ、近寄りがたい崇高な雰囲気をも併せ持っている場所でもあります。

現在町では、ふるさと創生資金を起爆剤に、各種補助事業を活用しながら中央公民館に隣接するこの好地一帯を町民公園として整備し、併せて歴史民俗資料館を建設し、町民の憩いの場、ふれあいの場、教養の場となすための長期的な計画を立案中です。

それら事業の基本資料として、また文化財保護の立場からも宮崎石棺群の学術調査は避けては通れないものでした。

通称宮崎古墳と呼ばれてきた古代墓は相当古いものという認識はあっても、その年代あるいはその歴史的価値は専門家の調査なしでは解明しえないものであります。この度、弥生時代、特に東アジアの考古学では日本の権威である熊本大学の甲元真之先生のお力を借りることができましたことは何よりも増して幸運なことでした。

申すまでもなく、過去なくしては現在も未来もなく、私たち祖先の偉業なくしては今日の倉岳町はありません。先人の足跡を正しく認識し、それを後世に継承することは現在の私たちの責務であります。

今回の確認調査を機会に我が町の古代、歴史への関心が高まり、郷土を愛する心が芽生えてくることを願って止みません。さらに、この宮崎遺跡より数千年も遡るいわゆる縄文時代の遺物も町内から多数発見されていると聞き及んでいます。この調査報告書は今後倉岳全体の歴史を大観するための第一歩として位置される記念すべきものになったわけです。

貴重な時間を我が倉岳町のために費やしていただいた甲元先生始め熊大考古学研究室の皆様、調査発掘に心よくご同意いただいた地権者の皆様、また関係された皆様のご理解ご協力に厚くお礼を申し上げ、発刊の喜びといたします。

平成2年3月 日

熊本県倉岳町長 稲津俊徳



## 発刊に寄せて

天草最高峰倉岳の麓に広がる倉岳町は、昭和47年の大水害やその後の耕地整理等で、地表の様相がかなり変わっております。しかし、古来の地表が残っているところからは、各所から縄文時代の石器や土器、弥生時代の土器等の遺物が町の考古学マニヤ達により多数発見され、太古より居住していた祖先を偲ばせてくれます。

宮崎箱式石棺群は水害とは無縁の丘陵に位置しておりまして、昭和35年、平岡勝昭先生が調査報告され、その後坂本経堯先生の調査では箱式石棺20基と支石墓6基が存在すると推定されております。しかしながら地権者の皆様のご努力で遺跡全体の保護はなされつつも、個々を見ますと乱掘等で完膚なきまでに破壊されているという状況であります。

町では、従来宮崎石棺群を整備し、公園化しようという計画があったものの遂に実現できないまま今日に至ったのであります。この度のふるさと創生を機にその実現が図られつつあり、町執行部や議会のご理解ある配慮で第一段階として学術調査をしていただることになり、先人の文化遺産保護の立場から誠に喜ばしいことであります。

調査を熊本大学文学部の甲元真之先生に依頼しましたところ、心よくお引き受けくださいされ、熊本大学考古学研究室の皆様と共に、蚊やブトに悩まされながら精力的に作業を進めてくださいました。また、倉岳町郷土史の会の皆さんも多数自発的に参加協力をいただいております。

調査結果は、一部熊日新聞等で報道されましたが、その詳細な報告書が刊行されることになったのであります。本格的な学術調査は倉岳町では初めてのことであり、報告書は町の貴重な財産となることでしょう。

公務ご多忙の中、整理執筆していただいた甲元先生はじめ熊大考古学研究室の皆様、深いご理解とご協力を賜った地権者の皆様、ご参加ご協力いただきました関係各位に對し、厚く感謝とお礼を申し上げまして発刊の序といたします。

平成2年3月 日

熊本県倉岳町教育委員会 教育長 歳川 喜幸

## 例　　言

1. 本書は倉岳町役場の委託を受けて宮崎石棺墓群調査団(代表、甲元眞之)が行った宮崎石棺墓群確認調査の報告書である。
2. 確認調査は1989年10月28日から11月5日まで行い、整理作業は1989年11月10日から1月21日まで行った。
3. 本調査に関する資料及び出土遺物は、倉岳町教育委員会に保管されている。
4. 本書の編集は甲元の助言を得て岩崎充宏が行った。執筆者については、各文末に記名した。

## 本文目次

### 序 文

I 調査に至る経過	1
II 確認調査の経過	5
III 発掘調査	9
1 石棺の分布	9
2 1号石棺	10
3 7号石棺	13
4 11号石棺	15
5 16号石棺	17
6 20号石棺	19
IV その他の石棺	26
V まとめ	34
付編 1 倉岳町の遺跡	37
付編 2 支石墓分布一覧表	42
付編 3 箱式石棺墓分布一覧表	47
付編 4 免田式土器分布一覧表	62

## 挿図目次

第1図 地形及び石棺配置図	7
第2図 1号石棺実測図	11
第3図 7号石棺実測図	14
第4図 11号石棺実測図	16
第5図 16号石棺実測図	18
第6図 20号石棺実測図	21
第7図 出土土器実測図	23
第8図 出土鉄器実測図	24

第9図 石棺実測図(1) .....	27
第10図 石棺実測図(2) .....	29
第11図 石棺実測図(3) .....	31
第12図 石棺実測図(4) .....	33
第13図 町内出土石器実測図 .....	37
第14図 下塔尾遺跡採集石器実測図 .....	38
第15図 支石墓分布図 .....	43
第16図 箱式石棺分布図(1) .....	48
第17図 箱式石棺分布図(2) .....	49
第18図 免田式土器分布図 .....	63
付 図 倉岳町遺跡分布図	

## 図 版 目 次

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 図版1－上：宮崎石棺墓群遠景（北西より）   | 図版9－上：11号石棺掘り上げ後（東より）  |
| 1－下：宮崎石棺墓群近景（南より）      | 9－下：11号石棺掘り上げ後（北より）    |
| 図版2－上：1号石棺現状（北西より）     | 図版10－上：16号石棺現状（北より）    |
| 2－下：1号石棺掘り上げ後（北西より）    | 10－下：16号石棺現状（西より）      |
| 図版3－上：7号石棺蓋石現状（南より）    | 図版11－上：16号石棺排土後（北より）   |
| 3－下：7号石棺蓋石撤去後          | 11－下：16号石棺排土後（西より）     |
| 図版4－上：7号石棺現状（南より）      | 図版12－上：20号石棺現状（北より）    |
| 4－下：7号石棺鉄製釣針出土状況       | 12－下：20号石棺半截状況（南より）    |
| 図版5－上：7号石棺掘り上げ後（南より）   | 図版13－上：20号石棺遺物出土状況     |
| 5－下：7号石棺掘り上げ後（東より）     | 13－下：20号石棺遺物出土状況       |
| 図版6－上：7号石棺掘り上げ後（東より）   | 図版14－上：20号石棺排土後（北より）   |
| 6－下：7号石棺掘り上げ後（東より）     | 14－下：20号石棺排土後（東より）     |
| 図版7－上：11号石棺現状（東より）     | 図版15－上：20号石棺掘り上げ後（北より） |
| 7－下：11号石棺遺物出土状況（東より）   | 15－下：20号石棺掘り上げ後（東より）   |
| 図版8－上：11号石棺遺物出土状況（東より） | 図版16－上：20号石棺基部の状況      |
| 8－下：11号石棺遺物出土状況（東より）   | 16－下：20号石棺基部の状況        |

- 図版17－上左：7、11号石棺出土土器（ $\frac{1}{2}$ ）  
17－上右：7号石棺出土鉄製釣針（実大）  
17－下：11号石棺出土鉄器（ $\frac{1}{2}$ ）
- 図版18－上：11号石棺出土土器（ $\frac{1}{2}$ ）  
18－下：20号石棺出土土器・鉄器（ $\frac{1}{2}$ ）
- 図版19－上：2号石棺現状（北より）  
19－下：3号石棺現状（西より）
- 図版20－上：4号石棺現状（北西より）  
20－下：6号石棺現状（南より）
- 図版21－上：5号石棺現状（西より）  
21－下：5号石棺現状 石棺材（南より）
- 図版22－上：8号石棺現状（東より）  
22－下：9、10号石棺現状（南東より）
- 図版23－上：12号石棺現状（西より）  
23－下：13号石棺現状（南より）
- 図版24－上：14号石棺現状（東より）  
24－下：15号石棺現状（南より）
- 図版25－上：17号石棺現状（東より）  
25－下：18号石棺現状（南より）
- 図版26－上：19号石棺現状（北より）  
26－下：19号石棺現状（東より）
- 図版27－上：21号石棺現状（西より）  
27－下：22号石棺現状（西より）
- 図版28－上：境目古墳近景  
28－下：境目古墳現状
- 図版29－上：境目古墳現状  
29－下：境目古墳現状
- 図版30－上：下塔尾遺跡近景  
30－下：塔尾遺跡近景
- 図版31－上：小崎遺跡近景  
31－下：曙遺跡近景
- 図版32－上：浦川遺跡近景  
32－下：曙遺跡出土石器



## I 調査に至る経過

熊本県天草郡倉岳町は天草上島の南端にあり、海拔標高が682mの倉岳を背に八代海に接する際に所在する。天草の他地域の例にもれず、ここ倉岳町も矢筈嶽、倉岳、念珠岳などの山塊から南にのびるスロープがそのまま海に没する地形が多く。このため極めて屈曲に富む海岸線を形成している。倉岳町のほぼ中央に位置する棚底一帯にわずかに、ゆるやかに広がる扇状地はみられるものの、殆んどの地域では広い沖積地をみることはできない。今日見ることのできる浦一帯の水田地帯は、近世以降の干拓によるものであり、古代においては名桐あたりにまで入江が及んでいたと考えられる。

棚底川の南に広がる扇状地の南端には、東西約180m、南北約60mほどで、比高差が20mほどの小丘が、あたかも島状に存在し、一端は海と接している(図版1)。この小丘の西南部には十五社宮が鎮座しており、ために付近一帯は宮崎(ミヤノサキの意味)と呼称されている。砂岩や頁岩を基盤とするこの丘には、尾根ぞいに箱式石棺が存在していることが、昭和30年代から学界に知られるようになり、爾後多くの研究者が訪れている。昭和35年当時、倉岳町の浦小学校に勤務していた平岡勝昭氏は、6月に小規模の調査を行い、古式土師器が副葬されていたことを報告している。<sup>注(1)</sup> またこの時の調査で支石墓らしい遺構が存在すると指摘は、島原半島の原山支石墓群との関連で注目をあび、昭和37年坂本經堯氏により支石墓の存在が確認された。この坂本氏の調査では、この小丘の「東の丘に箱式石棺十基、西の丘に支石墓六基と箱式石棺十基」があったとされ、「未発見、破壊消滅したものを加えると三十余基の墓群となる」ことが想定されている。<sup>注(2)</sup> この坂本氏の踏査以降、「宮崎支石墓群」としてこの遺跡が知られるようになってきた。<sup>注(3)</sup>

爾来30年近く経過して石棺の破壊が進み、石棺の棺材が小丘上やその斜面に散在する状況を呈するようになり、一部では水路の蓋石に転用される破目にもなってきている。また小丘上の雑木がない所では土砂の流出が激しく、一部の石棺はその基盤が削りとられるまでに至っている。こうした破壊が進行することを懸念した倉岳町当局では、この宮崎石棺墓群を史跡公園として整備する計画をたて、甲元にその考古学的調査を依頼した。8月以降数回にわたる折衝の結果、箱式石棺の基數の確認とその分布

状態を把握すること、うち数基の石棺の調査を行って、石棺の構造（支石墓か否かの検討を含めて）とその大体の構築年代を知る手懸りをえることを主眼とする確認調査を実施することとなった。このため10月下旬に倉岳町稻津町長と熊本大学甲元との間で以下のような契約書をとりかわし、調査のはこびとなった。

## 契 約 書

倉岳町長稻津俊徳を甲とし、熊本大学文学部助教授甲元眞之を乙とし当事者間に業務を委託することについて次のとおり契約を締結する。

(委託業務の名称及び委託金額等)

第1条 甲は乙に対して次のとおり委託する。

- (1) 委託の名称 宮崎石棺墓群確認調査
- (2) 委託金額 2,000,000円
- (3) 委託の内容 別紙要綱のとおり
- (4) 委託期間 平成元年10月23日から平成2年3月20日まで

(指示事項の遵守)

第2条

1. 甲は当該業務に必要な事項を乙に指示し、乙は甲の指示にしたがってこの契約に定める期間内に完了しなければならない。

2. 乙は業務上知った甲の秘密を他にもらしてはならない。

(委託業務にもとづく権利業務の譲渡の禁止)

第3条 乙はこの契約によって生ずる権利または業務を第三者に譲渡し、または継承させてはならない。

(委託業務の検査等)

第3条 甲は必要と認めたときは隨時乙の委託業務の処理状況について検査し、または報告を求めることができる。

(委託業務の変更)

第5条 甲は必要あるときは委託業務の内容を変更することができる。この場合、委託金額を変更する必要が生じたときは甲乙協議して決定する。

(調査報告)

第6条 乙は業務が完成したときは、すみやかに甲へ調査報告書を提出しなければならぬ。

(委託金の支払い)

第7条 委託金は契約締結後30日以内に1,500,000円を支払い、残り500,000円は調査報告書の提出後乙の適法な請求書にもとづき支払うものとする。

(甲の契約解除権)

第8条

1. 甲は乙が次の各号の一つに該当するときは、契約を解除することができる。
  - (1) 乙の責任に帰すべき理由により委託業務を完成する見込みがないと明らかに認められるとき。
  - (2) 正当な理由がなく委託業務に着手しないとき、または遅延したとき。
  - (3) 前各号のほかこの契約事項に違反したとき。
2. 前項の規定により契約を解除したことにより、甲が損害を受けたときは、乙はその損害を倍償しなければならない。ただし、倍償額は甲乙協議して定める。

(その他必要事項)

第9条 この契約に定めのない事項については、その都度甲乙協議の上決定する。

この契約の証するため契約書を2通作成し、当時者が記名押印の上、各自1通保有する。

平成元年10月21日

甲 熊本県天草郡倉岳町大字棚底1919番地

倉岳町長 稲津 俊徳 印

乙 熊本市黒髪2-40-1

熊本大学文学部考古学研究室

助教授 甲元 真之 印

## 宮崎石棺墓群確認調査要綱

### 1. 調査の目的

倉岳町では箱式石棺が点在する宮崎地区（通称＝十五社宮様）を町民の憩いの場としての町民公園、また貴重な文化遺産を保護するための遺跡公園としての整備を計画している。ただ、この石棺群は正式な調査がなされていない上に、盗掘などを受けて放置状態である。そこで今回遺跡の実態を明らかにするため学術的な確認調査を実施しようとするものである。

### 2. 調査の内容

倉岳町大字棚底宮崎地区の丘陵地（主に山林）に点在する石棺墓群の確認調査を行う。

### 3. 確認調査の実施方法

- (1) この調査は、熊本大学文学部考古学研究室甲元真之助教授を代表とする宮崎石棺墓群調査団に委託する。
- (2) 委託期間は、平成元年10月23日から平成2年3月20日までとし、現地における確認調査は平成元年11月10日までに完了するものとする。

- (3) 委託者は、現地調査の作業結果をまとめ、倉岳町長に対して報告書を提出しなければならない。提出部数は300部とする。

#### 4. その他

- (1) 受託者は、この調査の結果による出土品の全てを報告書提出後倉岳町に引き渡すものとする。
- (2) 受託者は調査にあたって、周辺住民に迷惑をおよぼさないよう十分配慮するものとする。
- (3) 受託者は現地における調査中、作業日誌を作成するものとする。

宮崎石棺墓群確認調査団の構成は次の通りである。

調査組織 宮崎石棺墓群調査団

代表 甲元 真之（熊本大学文学部）

調査主任 甲元 真之

調査委員 岩崎 充宏（熊本大学文学部助手）

調査員 坂本 純子、新谷 晶子、松村真紀子

村上智恵子、渡辺 弘美（以上熊本大学文学部学生）

調査協力者 白木原和美（熊本大学教授）、松本 健郎、西住欣一郎、

吉内 素子（熊本県文化課）、網田 龍生（熊本市文化課）

以上の他調査を逐行するにあたっては、稻津俊徳（倉岳町長）、歳川喜幸、溝口哲雄、稻津千秋（倉岳町教育委員会）、岩下巖、歳川喜三生（倉岳町企画開発課）、高田尊徳（倉岳町文化財保護委員長）、倉岳町郷土史の会（岩本繁、蓮田普子、砂田サチ子、古野筆光、馬田哲明、堀川鼎）の方々に大変御世話になった。また整理報告の段階では、平岡勝昭、東光彦、西住欣一郎、網田龍生各氏をはじめ、熊本大学考古学研究室の諸君の多大の協力をえた。御礼を申しあげたい。(甲元)

注(1) 平岡勝昭「土師器を出土した箱式石棺の一例」（『天草史談会報』第2号）、昭和35年。

(2) 坂本経堯・坂本経昌『天草の古代』、昭和46年。

(3) 坂本経堯「弥生文化」（『熊本県史総説篇』）、昭和40年、桑原憲彰「熊本県の支石墓」（『考古学ジャーナル』161号）、昭和54年。

## II 確認調査の経過

今回の調査は確認調査という性格上、発掘を行う石棺は数基に限定される。従って、発掘調査に先立って、分布調査・測量調査を行い、石棺の数・分布・タイプを確認し、その所見に従って発掘を行う石棺を選定することとした。

分布調査・測量調査は1989年9月2日から9月4日にかけて、発掘調査は1989年10月28日から11月5日にかけて実施した。以下にその経過の概要を記す。

9月2日 午前11時30分頃倉岳町に到着。午後から降雨の中、石棺の分布調査を行い、石棺の分布は宮崎丘陵の尾根上に限られることを確認する。

9月3日 測量調査を開始。測量範囲は丘陵の尾根筋を中心とし、同時に石棺の数と位置をボーリングステッキで確認していく。

9月4日 測量調査終了。確実なものとして20基の石棺を確認する。分布上、東西の大きく2群に分けられること、西側石棺群は丘陵頂部を囲むように位置すること、石棺の長軸方向に大きく2方向がありそうなことが判明する。これらのデータを基に10月からの本調査に備えることとし、帰学する。

10月28日 午前10時30分頃倉岳町に到着する。調査開始に先立って地鎮祭を行う。午後から発掘調査を開始する。まず、東端にある1号、支石墓の可能性が指摘されている7号、西端にあり最大の規模をもつ20号の3基の発掘にとりかかる。

10月29日 1号石棺は床面まで到達する。7号は大板石の写真撮影、実測後、それをチェーンブロックで移動。大板石の下には支石ではなく、箱式石棺が検出されて、7号は支石墓ではなく、大板石は石棺の蓋石であることが判明する。

10月30日 7号石棺の墓壙の検出作業中に鉄製釣針が出土。20号石棺からは龍泉窯の青磁片、白磁片が出土し、中世に再利用された可能性があることが判明する。また、本日から発掘を行わない石棺の露出作業を始める。

10月31日 1号石棺の調査が終了し、新たに西側石棺群中の11号石棺の発掘を開始する。7号石棺の掘り上げ完了。20号石棺は輪郭を完全に検出。発掘を行わない石棺の実測を始める。

11月1日 11号石棺から土器片、鉄器がかなり出土する。7号・20号石棺では実測

を始める。また、並行して他の石棺の実測を行う。午後、倉岳町の遺跡の分布調査を行う。

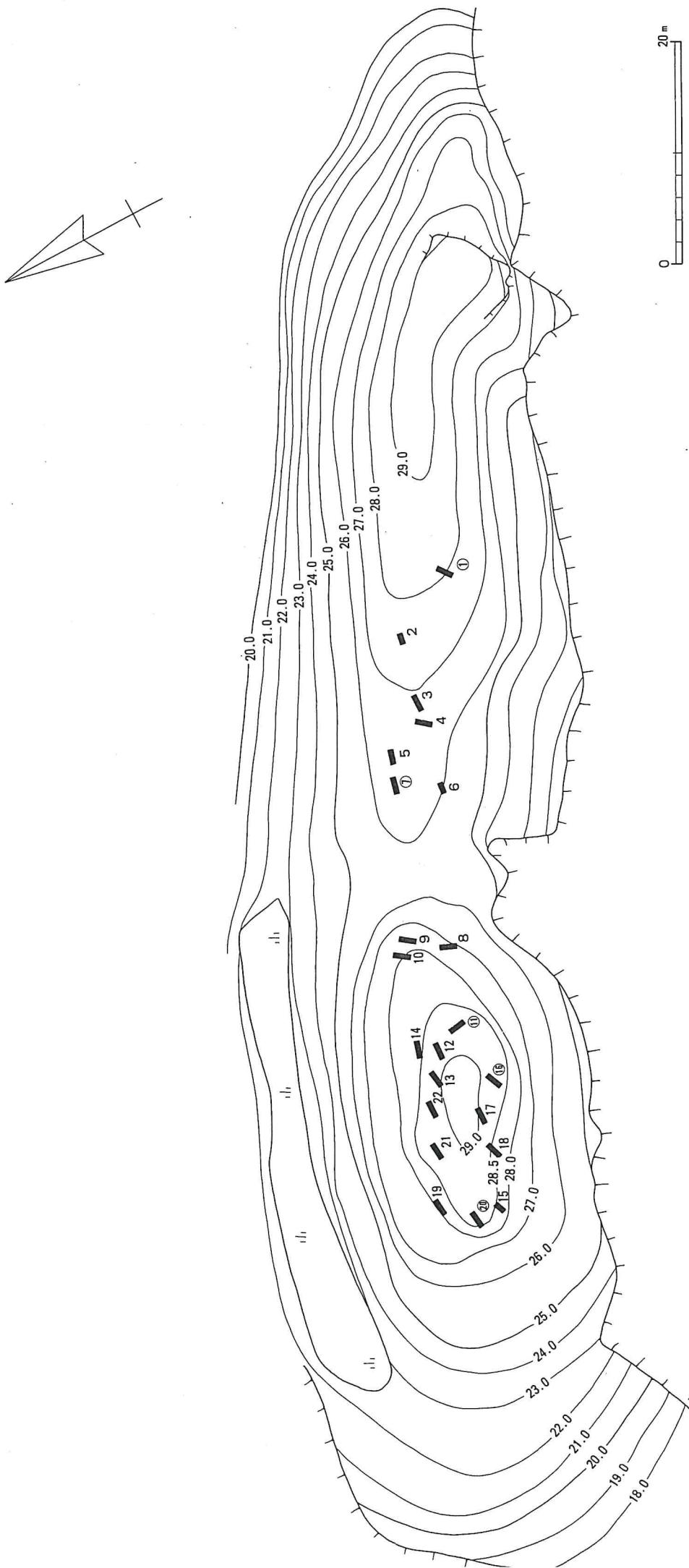
11月 2 日 昨日の作業を引き続き行う。夜、本日までの知見を基に、現地説明会の資料を作成。

11月 3 日 7号石棺の実測終了。11号石棺の掘り上げを完了し、床面まで搅乱が及んでいることを確認。本日から、16号石棺の発掘を始める。20号石棺は実測を継続。午後1時より現地説明会を行い、町内外から30数名の参加を得る。

11月 4 日 11号石棺の実測終了。16号石棺は棺内への石材の落ち込み状況を記録し、調査終了とする。20号石棺も実測終了。他の石棺の実測とその位置の測量図への記入を行う。また、遺跡の遠景写真を撮影。

11月 5 日 発掘を行わなかった石棺の写真撮影を行って、本調査を終了。機材を撤収し、帰学する。

(岩崎)



第1図 地形及び石棺配置図



### III 発掘調査

#### 1. 石棺の分布

宮崎石棺墓群は、岬状に海へ張り出した宮崎丘陵の尾根上に位置する箱式石棺墓群である。この丘陵は双丘状を呈しているが、土を盛られた痕跡はなく、自然地形のままである。尾根からは、付近一体の平野や入江を一望することができる。

丘陵は、中央の鞍部を境として東側丘陵と西側丘陵の2つの高まりに分けられる。東側丘陵はその最頂部が丘陵東側にあり、西側に等高線が大きく流れるかたちで緩やかな斜面を形成している。その南側は、1号石棺のあたりからガケまでは全く木が生えていないため、降雨時には鉄砲水が起こる。長年にわたって地表は削り取られたためか、砂岩の岩盤は露出しており、降雨のたびにわずかずつではあるが地形に変化が生じる。北側はガケとまではいかないが傾斜はかなり急であり、木がうっそうと生い茂っているため、割合と地形は保たれている。

西側丘陵はその平坦な頂部を丘陵中央部にもち、それを中心として等高線はほぼ橢円形に近い形で回帰する。丘陵北側には、かつては畠であったテラス状の平坦な土地が、幅約2m×長さ20mにわたって、今では荒れ地として広がっている。西側のガケは、丘陵下の田を造成する際に、丘陵の一部が削り取られて生じたものと思われる。

宮崎丘陵には、半壊したものも含めて東側の尾根に7基、西側の尾根に15基の計22基の箱式石棺が立地している。この他にも、11号石棺、16号石棺、18号石棺のそれぞれの南側に石材が確認されたが、ここにかつて石棺が存在していたかどうかは不明である。丘陵の尾根以外のところは、ボーリングステッキによる踏査を行ったが、結局石棺を確認することはできなかった。石材は各所に散在していたが、これは尾根上に立地する石棺の一部が流れて来たものであろう。原則として石棺は、尾根以外の所には分布しない様である。

『天草の古代』には「宮崎支石墓群」として紹介されており、「東の丘に箱式石棺十基、西の丘に支石墓六基と箱式石棺十基を数える。雑木草地には、更に数基が存在するらしい。」と記述されている。実際のところ支石墓は存在しないのだが、石棺の蓋石である大きな石材を支石墓の擇石と考えられた様である。

次に石棺の主軸方向についてであるが、きれいに2つに分けられる。主軸を東西にとるものと南北にとるものである。数から言えば圧倒的に東西にとる石棺の方が多い。今回11号石棺と20号石棺という主軸の異なった石棺を調査したところ、ほぼ同時期に築造されたものであることが認められた。よって東西に主軸をとる石棺と南北に主軸をとる石棺は共存していたという事が言えよう。また、主軸を東西にとるものは頭位が西であり、南北にとるものは北である。これは頭位方向の短側壁が一方の短側壁よりも幅がわずかに広くなることから理解できることであり、既にこの地域のこの時点においては、西枕、北枕の概念が存在していたと考えることができる。また、東側、西側の各石棺群内における配置状況であるが、東側石棺群には、前述の通り7基が存在する。1号石棺は外れているが他の6基は2列に平行に配置されている。5号石棺と7号石棺は主軸の方向が全く同じであり、何らかの関係があると思われる。

西側石棺群には、15基が存在しているが、配置状態から2つのグループに分けることができる。1つは標高28~29mの等高線に沿って楕円形に配置されているグループである。配置の状態や主軸の方向などから、このグループの石棺はほぼ同時期に築造されたものか、或いは被葬者間に何らかの関係があったのではないかと推定される。もう一つのグループは西側石棺群の東端で、前述のグループとは少し離れた鞍部近くの標高27.5m付近に立地している3基から成るグループである。立地している場所や主軸の方向などから、明らかにもう1つのグループから独立して、1グループを形成している。

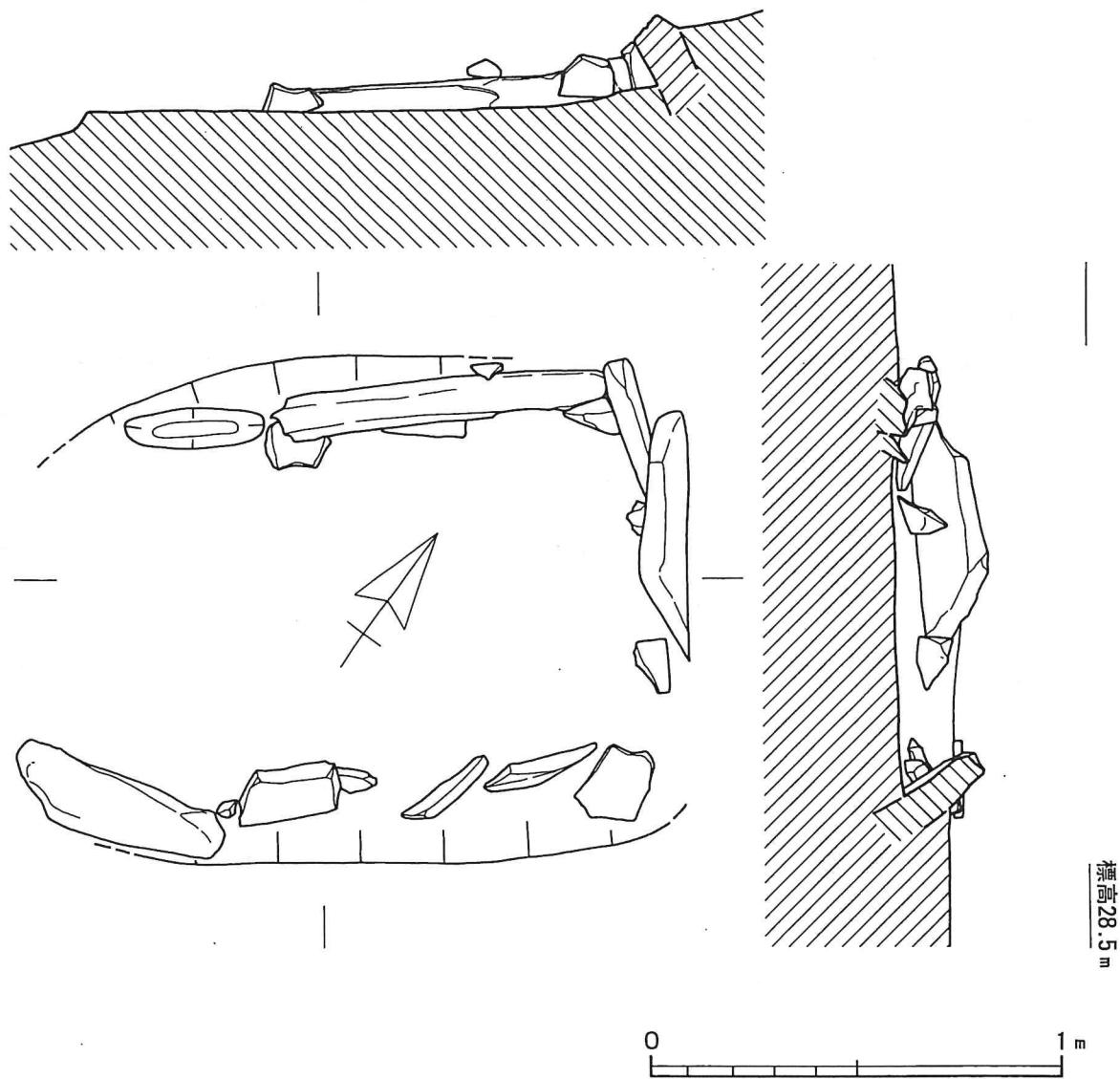
最後に石棺の形態についてであるが、旧状をとどめている石棺が少ない中ではあるが、大きく次の3形態に分類することができる。①厚さ7cm程度の薄手の板石を横長に配置し長側壁とするもの。②厚さ10cm程度の厚手の板石を横長に配置し長側壁とするもの。③板石を縦長に何枚か組み合わせて配置し長側壁とするもの、である。この中で最も多い形態は1であり、2、3と続く。

(新谷)

## 2. 1号石棺(第2図、図版2)

1号石棺は丘陵の東側頂部からやや西へ降った所に位置しており、宮崎石棺群の東端にあたる。宮崎丘陵の南側斜面は全体的に土壌の流出が激しく、崖状を呈する部分

標高28.5m



第2図 1号石棺実測図

もある。それは丘陵東側において特に顯著であり、1号石棺の周辺も砂岩質の地山が露呈しており、石棺の南側はすぐにかなりの傾斜をもった斜面となっている。

1号石棺は長軸をN-56°-Eにとる。規模は西南側短側壁が残存していないため明確ではないが、床面での内法の長さは約140cm、幅は約80cmであり、長さに対して幅広である。高さは、蓋石が消失しており、側壁の残りも悪いため不明である。

石棺の側壁で原位置を留めているのは、東北側短側壁と西北側長側壁の石材のみである。この2壁についても、いずれも完全には遺存しておらず、西北側長側壁には石の抜けた痕跡がみられる。東南側長側壁にはいくつかの石材が遺存しているが、いずれも原位置はとどめていない。また西南側短側壁は石材を全く消失している。なお、使用石材はいずれも砂岩である。石棺の壁体は、厚さ5~10cm、長さは最長80cmと比較的大型の板石を横向きに置き、その内側には、厚さ3~10cm、幅20cm程度小型の石材を支えとするとように配して構築されている。短側壁、長側壁ともにやや内傾する。また、2壁の隅については、隅角を消すように板石が配されている。側壁の高さは床面から最大でも25cmしかなく、更に上部まで伸びていた可能性が高いが、それがどのような構造であったかは不明である。

石棺の床面は、地山をほぼ平坦に整形して作られており、他に特別な構造はなく地山をそのまま利用していたと思われる。

石棺は墓壙内に構築されている。墓壙については発掘していないために全形は確認できず、両長側壁部分で検出できただけである。幅は約120cmであるが、深さについては周囲の地山自体がかなり流失しているようなので、現在は約20cmしか確認できない。墓壙の掘り方のすぐ内側に石棺側壁は構築されており、裏込め石は見られない。墓壙内埋土は掘りあげた地山をそのまま充填しているようである。

1号石棺の残存状態が良くなかった理由については、人為的な搅乱によるものなのか、それとも周辺の土壤の流失によるもののかは判別できず、恐らくはその両者によるものと思われる。

遺物は、石棺内の流入土中から土器片が1点出土した。微細な破片であるので図示はしなかったが、内器面にはハケ目をナデ消した痕が見られる。小形丸底壺の胴下半部にあたるものであろう。  
(岩崎)

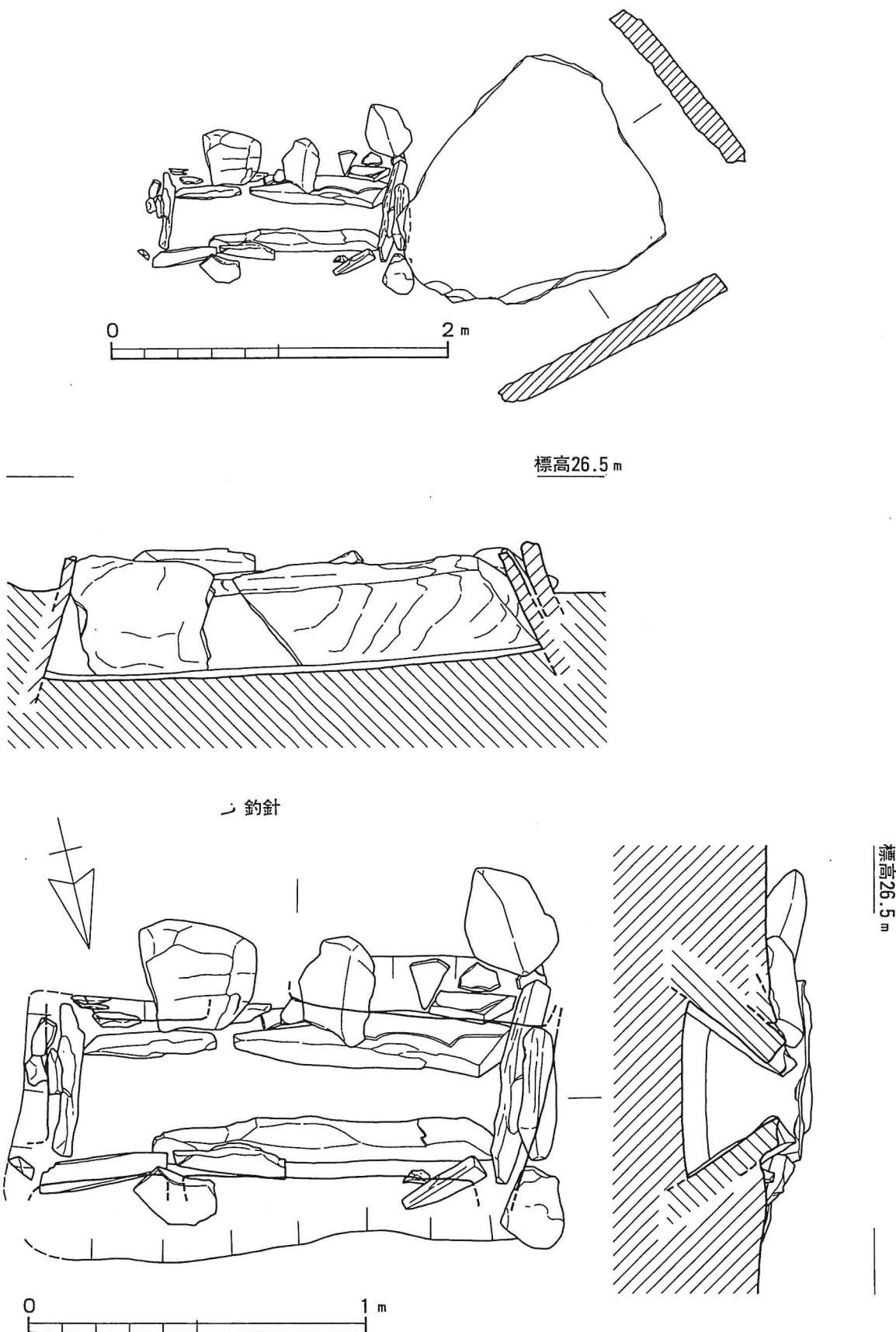
### 3. 7号石棺（第3図、図版3～6）

東側丘陵が緩やかにのびる尾根の西端近くにある。現状では地表面は厚く腐植土に覆われ、それに半ば埋まって蓋石が露出していた。蓋石を移動させた後、腐植土を取り除き精査したが、蓋石直下部では埋葬主体は検出されず南東にずれた位置で石棺が発見された。このように蓋石は原位置から動かされており、石棺内は一部床面まで搅乱を受けていた。石棺内の流入土中からは少量の土器片が検出された。また、石棺外ではあるが、南側に約70cm離れた位置で地山直上から先端部を欠いた鉄製釣針が発見された。石棺周囲の北側と東側そして南側の一部で墓壙の掘り方が検出されているが、将来の保存のため掘り下げを行っていない。

蓋石は砂岩で、ほぼ三角形を呈し、最大長1.5m、厚さ14cmを測る。石棺は地山に掘り込まれた土壙に据えられている。この石棺では四壁が残っていて、いずれの側石も多少内傾しているが原位置をとどめている。内法は長さ1.5m、幅0.5mを測り長方形を呈する。主軸は東西方向。石材はすべて砂岩である。西側の短側壁では2枚の板石が重なっているが、そのうち1枚は裏込めであると思われる。この内側に接して両方の長側石が据えられている。長側壁は両方ともそれぞれ2枚の板石からなり、最も長さをもつ石材は1mを測る。東側の短側壁では1枚の板石が北側長側壁の内側に接し、南側長側壁の外側にくるように据えられている。四壁の外周上部には裏込めとして大小の石や礫が置かれている。

石棺内は搅乱を受けているため旧状をとどめていないが、少量の土器片が発見された。床面は東側では地山（砂岩の岩盤）まで搅乱を受けて残っていないが、西側では赤味を帯びた土が床面近くから確認されており、さらに東側に比べると西側は広くなっている。以上からおそらく頭部は西側であったと考えられる。

石棺内から出土した土器片はいずれも小片であるが、重弧文をもつ壺の胴部が出土している。明るい赤褐色を呈し、胎土は緻密である。胴部の屈曲した部分であり、屈曲部のすぐ上位に横の沈線が1本確認できたが、やや欠損しているため正確な沈線の本数は不明である。この沈線の上にやはり沈線で上弦と下弦の重弧文が見られ、おそらくこれが交互に配されているものと思われる。以上から、この土器は免田式土器である（第7図1、図版17-左上）。その他の土器片はほぼ明るい黄褐色を呈し器壁は薄



第3図 7号石棺実測図

い。磨耗が激しく詳細は不明である。

石棺外から鉄製釣針が出土している(第8図4、図版17-右上)。長さ5cm、幅は一部欠けているためはつきりしないが約3.5cmと推定される。軸は直線的にのび、断面形はほぼ円形を呈する。

(村上)

#### 4. 11号石棺(第4図、図版7~9)

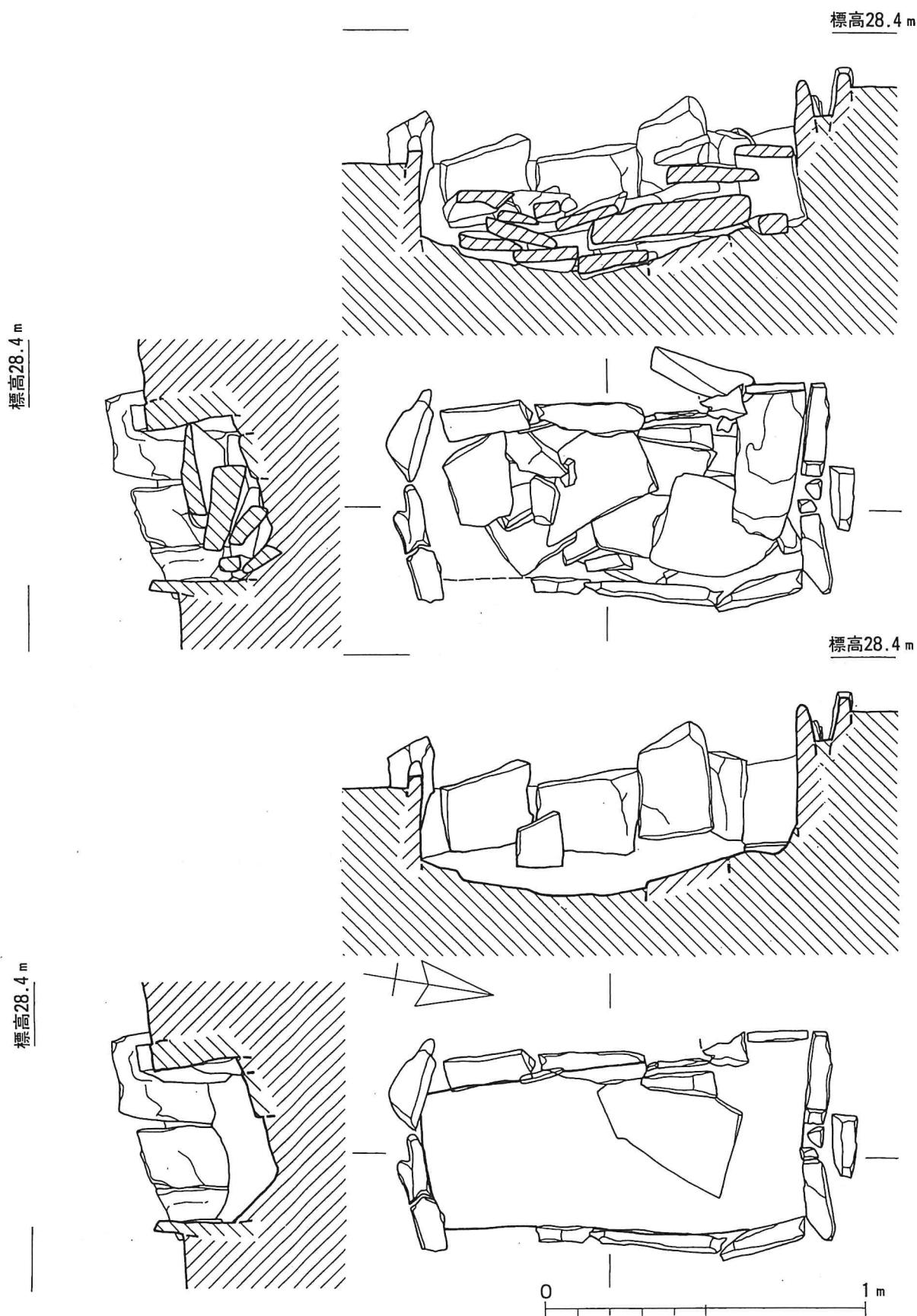
11号石棺は丘陵の西側頂部からやや東南側に降った所に位置している。宮崎石棺群の西側石棺群中に属する。調査以前には、側壁のごく一部が地上に露出していただけであり、厚く堆積していた腐植土を取り除いた後に発掘を開始した。既に蓋石を消失しており、棺内に大量の石材が落ち込んでいること、遺物は全て棺内流入土中から検出されるなど、激しい人為的な攪乱を受けていた。

11号石棺はN-12°-Wを長軸としており、これは西側石棺群の大勢とは異なるものである。規模は床面での内法の長さ115cm、幅は北側短側壁部で53cm、南側短側壁部41cmであり、今回調査したものの中では最も小型である。石棺の高さについては、蓋石を失っていること、床面まで攪乱が及んでいることから明らかでないが、側壁の石材の大きさからみて50cm前後である可能性が高い。

石棺の側壁は、東側長側壁の1部を欠き、西側長側壁の内1枚の石材が倒れているが、比較的残りは良い。厚さ5~10cm、幅20~40cm、長さ30~45cm程のやや小型の板石を、短側壁で2~3枚、長側壁で4~5枚を縦長になるように用いて構築されている。両短側壁はほぼ垂直であるが、両長側壁にはやや内傾している部分があり、これは元来のものではなく、周囲からの土圧によって傾いたものと思われる。棺材はいずれも砂岩であり、面取りなどの細かい加工は特にみられない。

石棺の床面の構造は攪乱が床面まで達しているために明らかではない。しかし、棺内に落ち込んでいる石材の量が、蓋石や側壁の1部だけと考えるには多過ぎ、そのほとんどが板石であること、また、攪乱壙に従ってやや傾いてはいるが、本来床面であったと思われる深さの所に板石が1枚残存していることから、床面には敷石が施されていた可能性が高い。

石棺は墓壙内に構築されていると思われるが、今回は確認できなかった。ただ、裏



第4図 11号石棺実測図

込め石は存在しないようである。

遺物は土器と鉄器が出土した。しかし、すべて棺内流入土中からの出土であり、原位置で確認できたものはない。

土器は土師器片42点が出土したが、小破片がほとんどで、器形を知り得るものは少ない。第7図-2～4・6は高壺である。いずれも胎土は軟質で細砂粒を多量に含む。風化が激しく、器面調整は4の内器面にヘラ磨きが確認できるだけである。5は壺の胴部片である。外器面の胴部最大径の部分に1条の貼り付け突帯を有し、その上に刻みが施されている。内器面には斜位のハケ目が見られる。図示しなかった小破片には、内器面にハケ目が施されているものと、ヘラ磨きが施されているものがある。

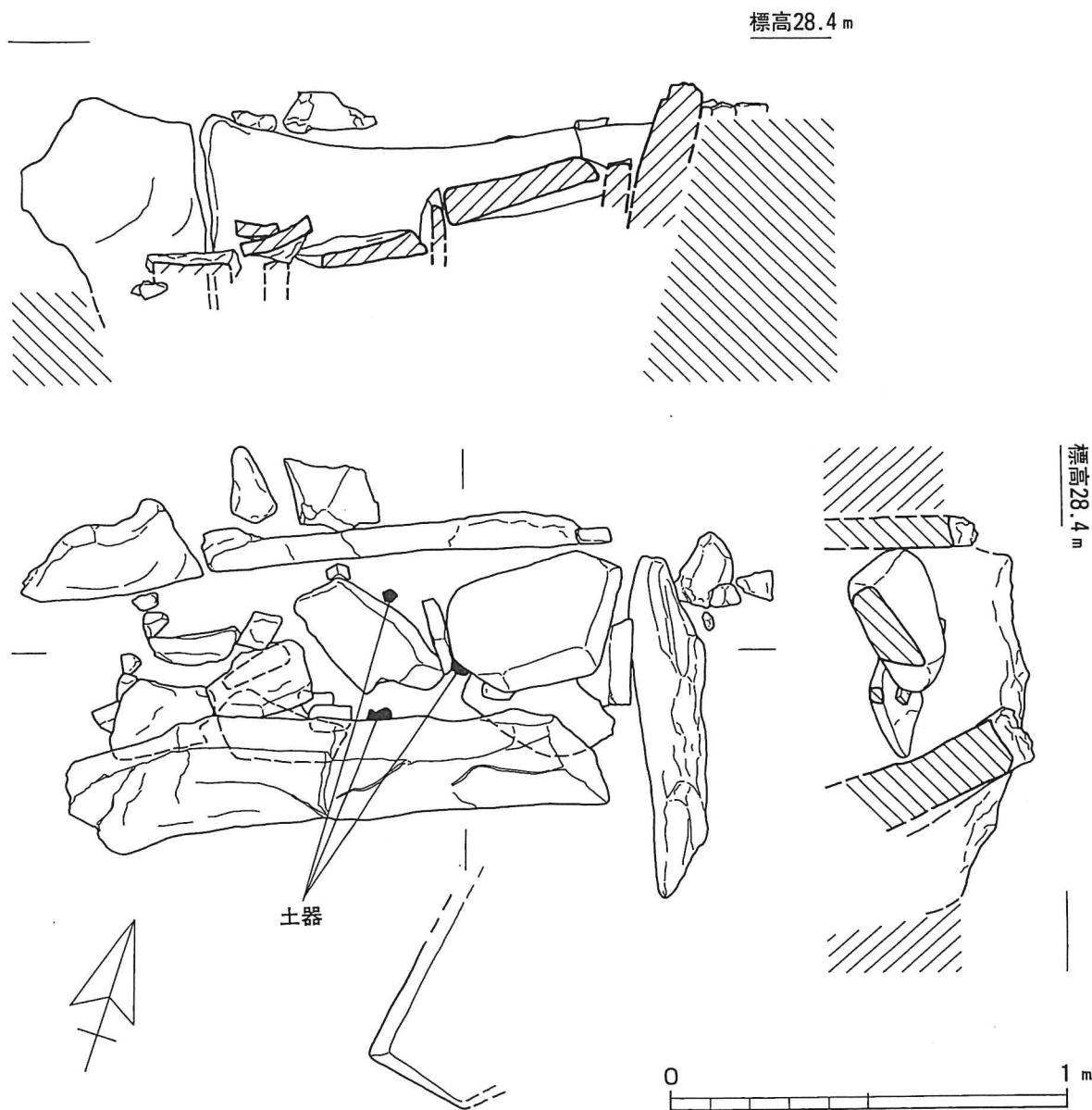
鉄器には、鉄劍の破片が4点、鉄鎌が4点他に不明鉄器3点が出土した。第8図-8～11は鉄劍である。完形品はない。11は残存長20.9cmで、長さ3.7cmの茎を有する。目釘穴は見られない。8～10もほぼ同型式と思われる。第8図-1・2・5・6は鉄鎌である。完形品はない。いずれも圭頭斧箭式である。5は残存長6.5cm、6は残存長6.3cmで、明確な闊があり、長さ3.4cmの茎を有する。

(岩崎)

### 5. 16号石棺（第5図、図版10・11）

西側丘頂近くの南斜面上にあり、主軸をほぼ東西にとる。東側の妻石と両長側壁が残存している。石棺の大きさは内法で幅約60cm、長さは、西側の妻石が消失しているため不明だが、長側石の長さより、少なくとも140cmはあったと思われる。南側の長側石は厚さ約10cm、長さ約130cmの大きな板石を用いており、かなり内傾している。北側の長側石を構成する2枚の石材のうち、東側の石材も厚さ約8cm、長さ約90cmと大きく、この石はほぼ垂直に立っており、原位置を保っている。また、石棺の南側約30cmのところに蓋石と思われる大きな板石が埋まっていた。東側妻石と北側長側壁の外側にある数個の石は裏込め石の可能性がある。石材はすべて砂岩である。

石棺の覆土はしまりがなく、赤褐色を呈する風化のすんだ石が混入していた。地表から10cmほど掘り下げたところで大小多くの石材が検出されはじめ、約40cmの深さにまで入り込んでいた。大きな石材は蓋石、小さな石材は裏込め石が落ち込んだ可能性がある。なお、時間に余裕がなかったため、床面の検出は成しえなかった。



第5図 16号石棺実測図

遺物は石棺内の石の間から土器片が少量出土した。(第7図7・8、図版17-上左下)  
 7は高壺の脚部である。黄褐灰色を呈する。胎土は緻密で、微細な鉱物を少量含む。  
 器形は裾の方にいくにつれて大きく開く。調整は磨滅がひどく内外器面とも不明。8  
 は短頸壺である。灰褐色を呈する。胎土は緻密で、微細な鉱物を少量含む。器壁は薄  
 く、口縁は外反する。調整は丁寧に施されていたようだが、磨滅のため内外器面とも  
 に不明。図版17-上左下のものは壺の口縁部、大きく外反する部分である。黄褐灰色  
 を呈する。胎土はやや粗く、微細な鉱物を多量に含む。調整は非常に丁寧に施されて

いたようだが、磨滅のため不明。他はあまりにも小片のため、器形が判別できなかつた。

(坂本)

## 6. 20号石棺（第6図、図版12～16）

20号石棺は西側石棺群の最も西端に位置する。この辺りは、石棺が構築された当時はなだらかに傾斜する丘陵の突端部であったと思われるが、今日では雨による土砂の流出が激しく、20号石棺も北側と西側の土が削り取られ、かろうじて倒壊を免れている状態である。また周囲には木が生い茂り、20号石棺は直径10cmにもなる木の根による撓乱も受けている。

発掘当初、石棺の周辺は落ち葉の腐植土で厚く覆われており、表面に現れていたのは土砂の流出が特に激しい西側の短側石と、北側に1枚、南側に2枚の長側石だけであった（図版12上）。そこで表面の腐植土を取り除き、土の堆積状態を見るために東西の主軸にそって半載して、まず棺内を南側から発掘した。棺内にも腐植土が約3cmの厚さで堆積しており、その下に棺内に流れ込んだ褐色の土が見られた。ここで土層は腐植土をI層とし、褐色土をII層とした。II層は床面に近づくにつれて色調が明るくなつたが、明確な分層はできなかった（図版12下）。

棺内には多量の板石や礫が落ち込んでおり、棺内東側では蓋石の一部と思われる、長さ50cm、幅80cm、厚さ20cm程の石材が検出された。また西側に落ち込んでいた長さ30cm、幅40cm、厚さ8cm程の石材は、南側長側壁の石材が抜けている部分に立てられていたものと思われる。全体として、上層では不定形の礫が多く見られたが、下層では厚さ2～3cmの板石の破片が目立った（第6図左、図版14）。

遺物も、落ち込んだ石材の上面からは白磁片、鎧連弁をもつ龍泉窯の青磁の碗の破片（第7図13、図版13上）、天目の碗の破片、土器の小片（図版13下）が出土し、鉄器や壺、高壺などの土器の大きい破片は床面近くから出土している。

側石は石棺長側壁が南北共に2枚、短側壁では東側に1枚、西側に2枚残っており、西側の短側壁以外は原位置を保っている。石材はすべて砂岩で、厚さは約10cmを測り縦位に用いられているが、東側の短側石と北側の長側石の内1枚は、他の側石に比べて薄く、丈の低い石材を使用している。石材と石材の合わせ目は、北側の長側壁では

小さな石材で埋めているが、南側の長側壁では大きめの板石を当てて補っているものと思われる。西側の短側壁でも2枚の石材の合わせ目と北西の隅で、側壁の外側に倒れた板石が見られたが、これも同じように側壁の隙間を埋めるように立てられていたものと考えられる。石棺の内部でも側石の下方、特に石材の合わせ目の下部に礫が据えられており、側石の支え石となっているようである（図版15）。

石棺の底は東から西へわずかに傾斜しており、赤い粒の混じる褐色土が数cmの厚さで堆積していた。盗掘による搅乱が地山まで達していて屍床面は確認できなかつたが、前述した棺内下層に集中する厚さ2～3cmの板石の破片が、ほぼ一定のレベルで並んでいたことから、20号石棺は板石敷きの屍床を伴っていたと思われる。

石棺の大きさは内法で長さ150cm、幅90cm、側壁は最も高い西側短側壁で棺底より65cmを測る。20号石棺は宮崎石棺群の中では最も規模が大きく、他に比べて石棺の幅がかなり広いため、合葬墓としての使用が考えられる。

墓壙の掘り方は、当石棺群が将来史跡公園として整備されるために破壊を恐れて確認しなかつたが、山寄りの東側短側壁では石棺に接するほどの狭い掘り方が検出された（第6図右、図版16）。

副葬品として、土器には甕、壺、高坏の3器種（第7図9～12・14）が見られ、鉄剣、鉄鎌（第8図3・7）も伴う（図版18）。

甕は外器面にタタキ痕のある胴部片が多数出土しているが、同一固体をなすものと思われる。小破片のため図示することができない。

9は複合口縁壺の口縁部片で、口縁部に2条の波状文が廻るものである。胎土は砂礫を多く含むがしまりは良好。調整は器表面の磨滅が激しく明確ではないが、内器面は横方向のナデが施され、外器面の頸部には粗い縦方向のハケ調整がみられる。外器面には赤色顔料が塗布されている。

12は小型の複合口縁壺の口縁部片で、内器面の段が明瞭でないタイプである。

14は丸底の底部で、内器面にはわずかな盛り上がりが見られる。胎土は小石、砂粒を多く含んで粗いが、堅緻である。器面調整は磨滅がひどく不明である。焼成は良好で、色調は薄い橙褐色を呈す。胎土、色調、大きさなどから、9と同一固体と思われる。

標高28m

標高28m

標高28m

標高28m

標高28m

標高28m

標高28m

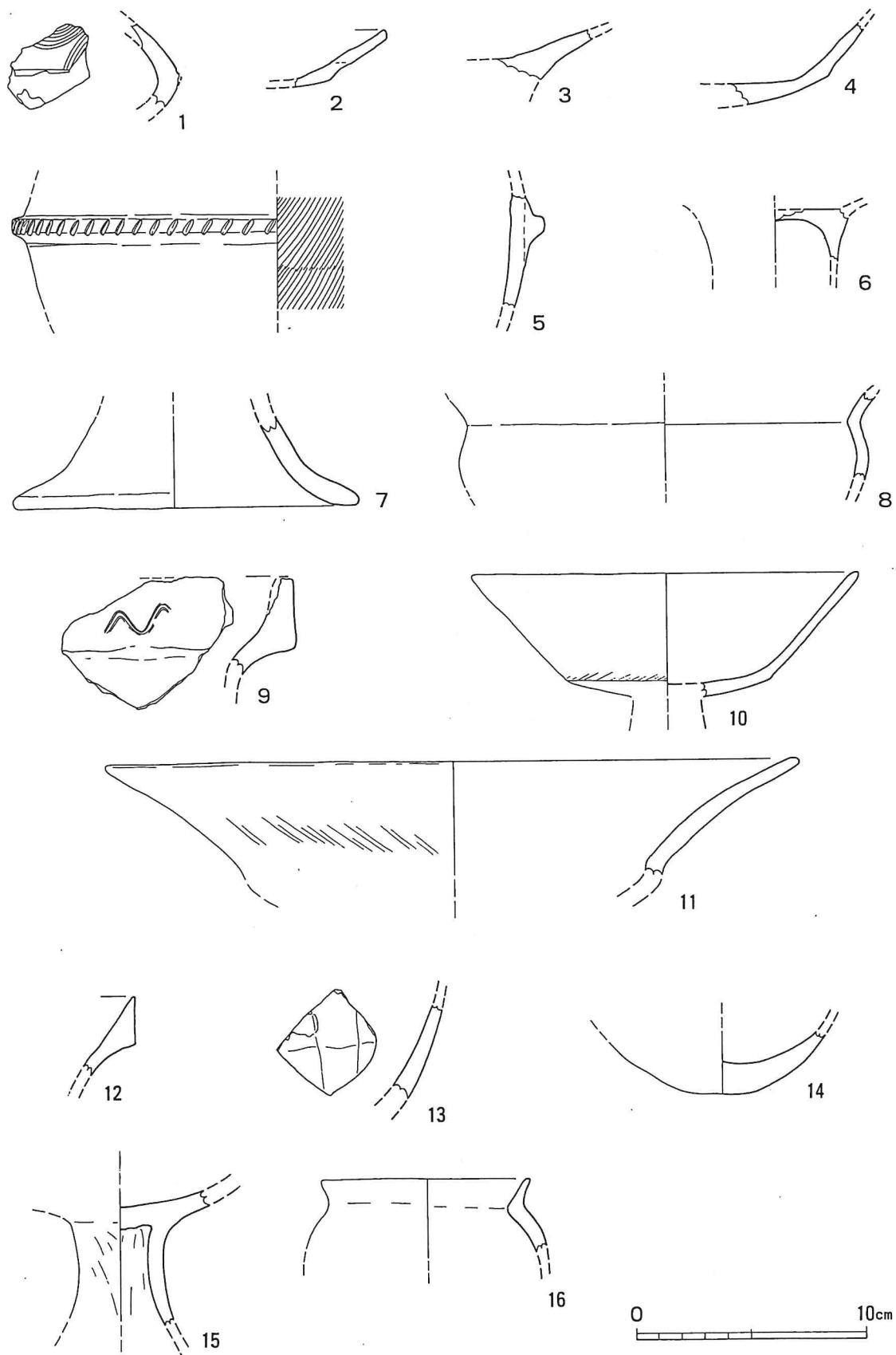
標高28m

1m

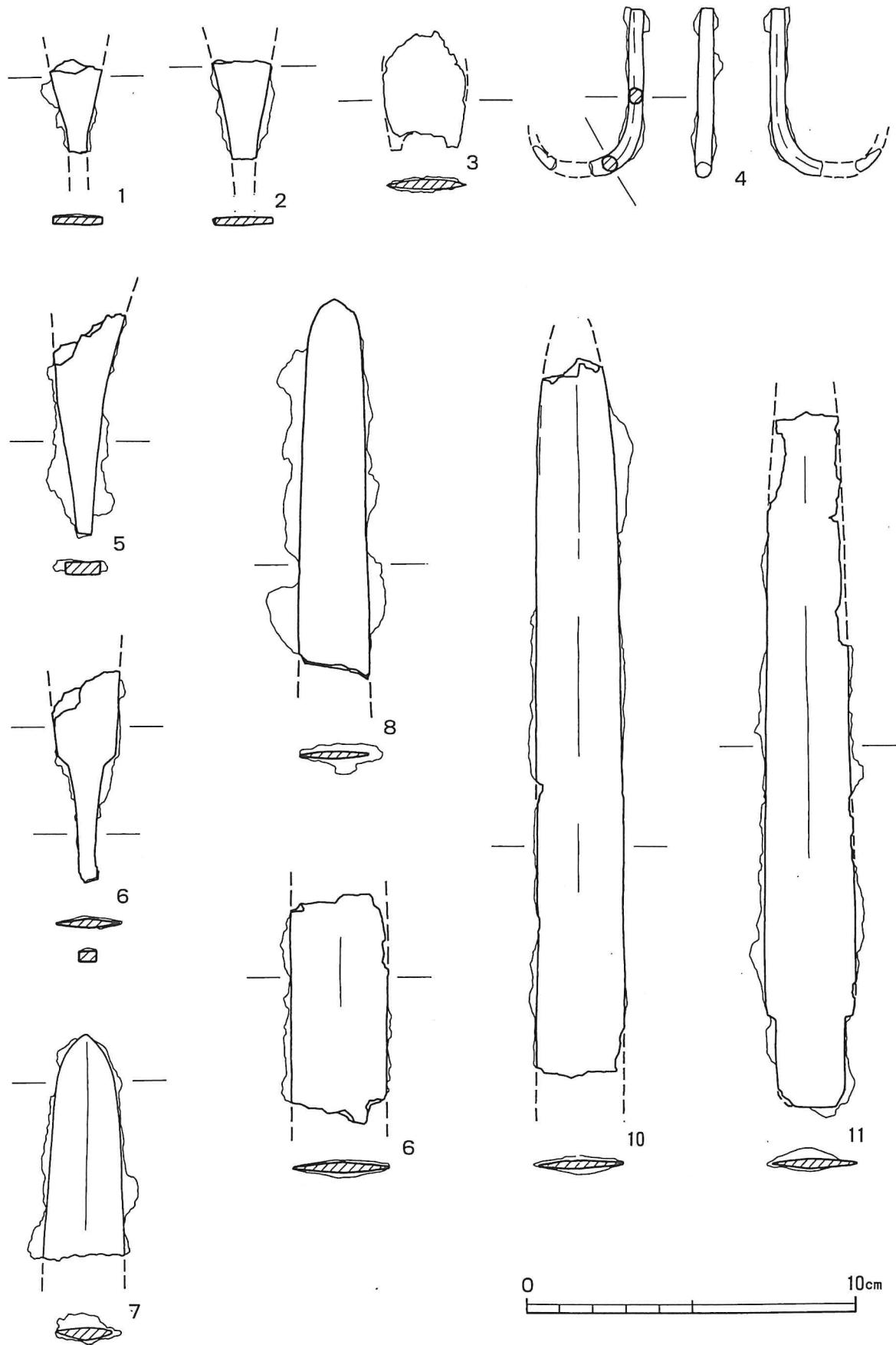
土器  
青磁

第6図 20号石棺実測図





第7図 出土土器実測図 (1: 7号石棺、2~6: 11号石棺、7, 8: 16号石棺、  
9~14: 20号石棺、15, 16平岡氏採集土器)



第8図 出土鉄器実測図 (3,7:20号石棺、4:7号石棺、他は11号石棺)

10は壺部の段がさほど明瞭ではなく、立ち上がりが逆「ハ」の字に長く伸びるタイプである。口径は約17cmで、脚部の形状は欠損しているため不明である。器壁は薄く、ハケ状工具による斜方向の調整の後に、丁寧なヘラ磨きが施されていたようである。色調は橙褐色を呈す。

11は立ち上がりが「く」の字に外反しながら伸び、壺部は10に比べて深く、丸みを帯びるタイプと思われ、口径は約30cmを測る。外器面調整はハケ状工具による斜方向の調整である。胎土は緻密で朱色の砂粒を含む。焼成は良好で、外器面には赤色顔料が塗布されている。

7は切っ先より約6cmの部分が出土している。中央に鎬が入り、断面は一方が尖り、一方はレンズ状を呈す。

3は凹基式の弥生系統の鉄鎌と思われる。下山西遺跡に類品が見られるが、小片であるため詳細は不明である。<sup>注(1)</sup>

注(1)『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集 熊本県教育委員会 1987

#### 昭和35年出土土器（第7図15・16）

昭和35年6月に平岡勝昭氏の調査時に出土した遺物は、今日熊本市立博物館に収蔵されている。

15は高壺の破片で、壺部と脚裾部を欠損しているため器形は不明である。外器面はヘラ状工具による縦方向のナデが施されており、内器面はヘラ状工具による削りの後、下半部は横方向のナデ調整が行われている。胎土は混入物をほとんど含まず、緻密である。焼成は良好で、色調は褐色を呈す。

16は短い頸をもつ小型壺の口縁部片である。口径は9cmで、底部は丸底を呈すと思われる。器表面の摩滅が激しく細部は不明であるが、頸部には横方向のナデが施されている。胎土は緻密で、橙褐色を呈す。

これらの土器はその調整方法や器形などから、古墳時代初期のものと思われる。

(松村)

## IV その他の石棺

### 2号石棺（第9図1、図版19－上）

東側丘陵の西へ緩やかに傾斜する斜面上にあり、主軸をほぼ東西にとる。東側の妻石とその南側に1個ずつ両側石の石材が残存している。流土が激しいため、他の部分については全く不明である。妻石の大きさからすると、石棺の大きさは、幅約50cmと推定できる。石材はすべて砂岩である。  
(坂本)

### 3号石棺（第9図2、図版19－下）

東側丘陵の西へ緩やかに傾斜する斜面上で、2号石棺の西約4mのところにある。東側の妻石、西側の妻石の一部、北側の長側壁東隅の一部が残存している。東側の妻石は2枚の薄い板石からなり、そのうち北側の石材は原位置を保っていると思われる。石材はすべて砂岩である。石棺の内法は長さ約130cm、幅約60cmと推定できる。

(坂本)

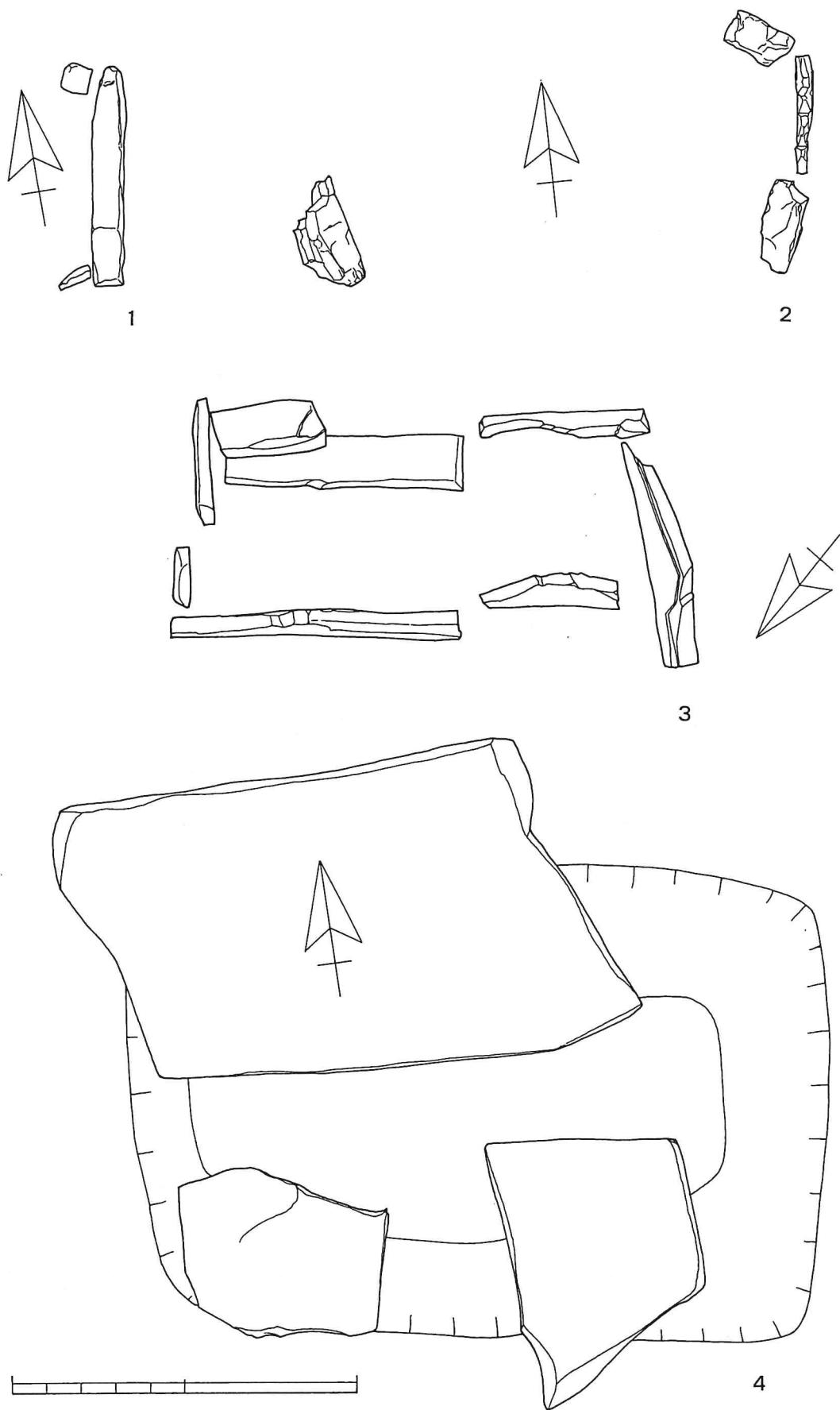
### 4号石棺（第9図3、図版20－上）

東側丘陵上、3号石棺の西約1mのところにあり、主軸を北東から南西にとる。石棺は四壁とも残存している。北東側の妻石は2枚、南西側の妻石は1枚、長側壁は2枚もしくは3枚のいずれも薄い石材で構成される。長側壁は両側とも内傾しており、また妻石も両側とも南西側に傾いていることより、いずれの石材も若干原位置を動いていると思われる。石材はすべて砂岩。石棺の内法は長さ約130cm、幅約40cmである。

(坂本)

### 5号石棺（第9図4、図版21）

東側丘陵の西側、7号石棺のすぐ東に位置する。石棺を据えるための掘り込みが確認され、長さ約2m、幅約1.4mのほぼ長方形を呈し、長軸は東西方向である。掘り込み内にある3枚の石はいずれも原位置をとどめていない。北側と南東側の大型の石は同一固体であり、復元すると長さ1.9m、幅0.9mの長方形になる。おそらくこの石が蓋石であると考えられる。もう1枚の石は引き抜かれた側石である。石材はすべて砂岩。



第9図 石棺実測図(1) (1-2号・2-3号・3-4号・4-5号)

また、この掘り込みの東側に散乱している板石は(図版21一下)、当石棺の棺材である可能性が大きい。

(村上)

### 6号石棺 (第10図1、図版20一下)

東側丘陵の西側、7号石棺から南へやや下った位置にある。棺材は散乱していてほとんど旧状をとどめていないが、2枚の長側石が残っている。そのうち北側の石材は引き抜かれ移動している。南側の石材は倒れてはいるが原位置を保っていると思われ、これより主軸は東西方向と推定される。他の石は裏込めの石である。石材には砂岩、花崗岩、頁岩が使われている。

(村上)

### 8号石棺 (第10図2、図版22上)

8号石棺は西側石棺群の中にある、宮崎丘陵のくびれ部から西側丘陵への昇り口に位置する。

側石は北東の短側石が残っているだけで、北西の長側壁側に並ぶ石材は、長側石を補強するための裏込め石と思われる。この裏込め石は端の1枚を除いてほぼ原位置を保っており、主軸は北東一南西にとると考えられる。石材はすべて砂岩であり、残っている短側石の隣の石材には朱が塗られていた。周囲には広範囲に渡って板石が散乱しており、8号石棺から抜き取られた石材と思われる。

(松村)

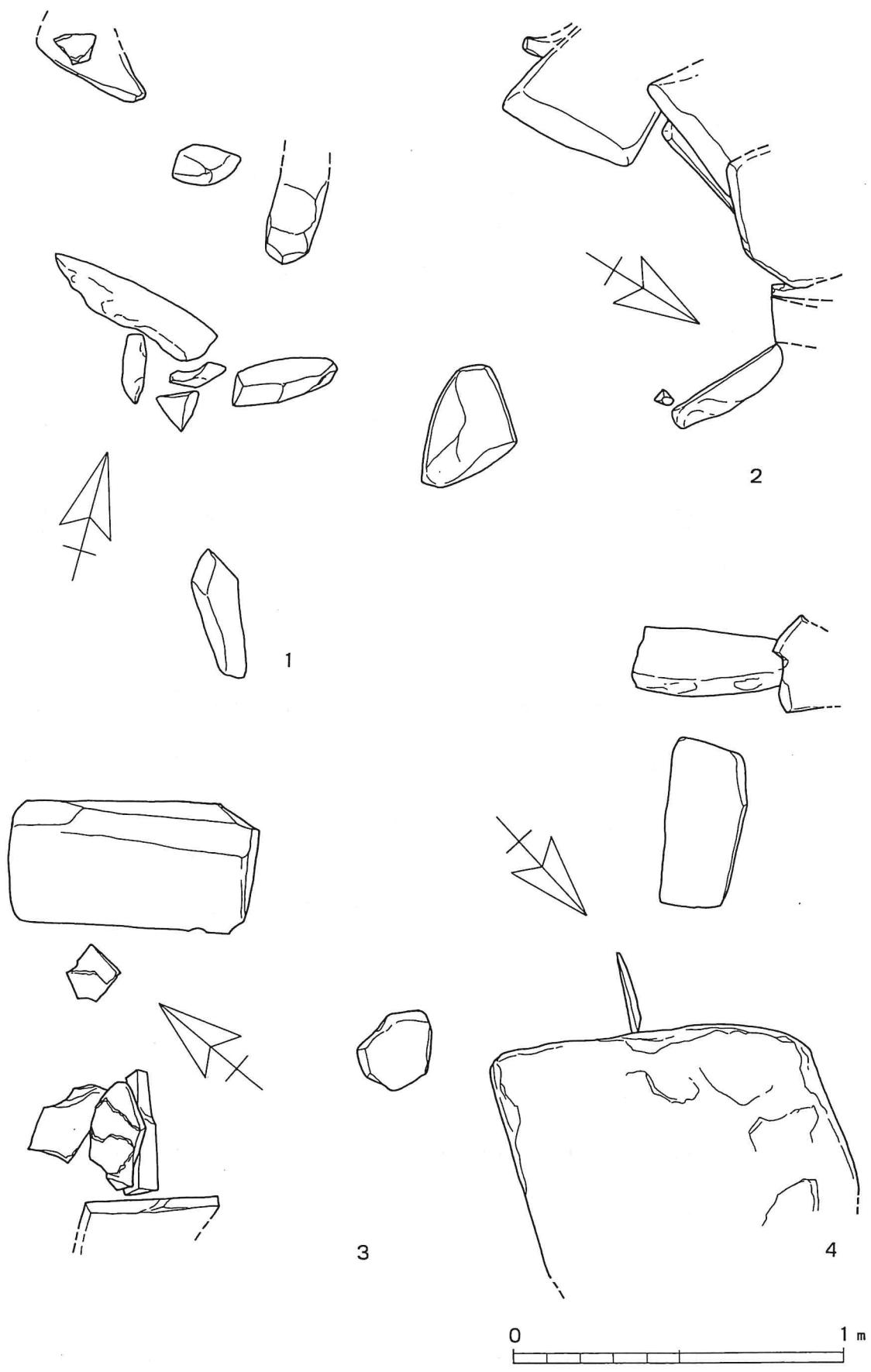
### 9号石棺 (第10図3、図版22下)

9号石棺は西側石棺群にあり、8号石棺の北東約3mの所に、10号石棺と並んで位置する。

南東に向って傾く斜面に、傾斜に対しほぼ垂直に構築されている。側石と蓋石の一部が残るが、南西側の短側石と南東側の長側石が原位置を保っており、主軸を北東一南西にとる。石棺の構造は、数枚の板石からなる側石の上部を内傾させ、側石に比べてやや厚めの板石を横に並べて蓋石としたものと思われる。

石材はすべて砂岩である。

(松村)



第10図 石棺実測図(2) (1-6号・2-8号・3-9号・4-10号)

### 10号石棺（第10図4、図版22一下）

西側石棺群の東側に、やや独立した状態で立地している3基（8・9・10号石棺）の中の最も北側に位置している石棺である。石材の残りは悪く、ほとんど旧状をとどめていないが、おそらく南西側の石材は短側石でありその北西の石材は長側石の一部であると考えられる。この石棺は短側壁が長側壁の中へ入り込む形態となり、主軸方向はほぼ南北である。図中央部の石は、長側石であったと考えられるが、浮いているため断定はできない。北東側には蓋石らしき石材が確認され、その南東側には小型の石材が位置しているが、この石材は9号石棺に近接しているため、どちらの石棺に属するものかは不明である。

短側石と思われる石の大きさから推定して石棺の幅は60cmぐらいであったと考えられる。石材はすべて砂岩である。  
(新谷)

### 12号石棺（第11図1、図版23ー上）

西側丘陵の頂上部近くに位置する。東西の短側壁、北側の長側壁とその裏込めの石が残存しているが、南側にはまったく棺材が見られない。両短側壁はそれぞれ1枚の板石であり、北側の長側壁には少なくとも2枚の板石が使われていたと思われる。東側の石材はやや移動しているが、西側と北側では石材が外傾していながらも原位置を保っており、このことから石棺は長さ約1m、幅約0.5mの長方形を呈すると推定される。主軸は東西方向。石材はすべて砂岩である。  
(村上)

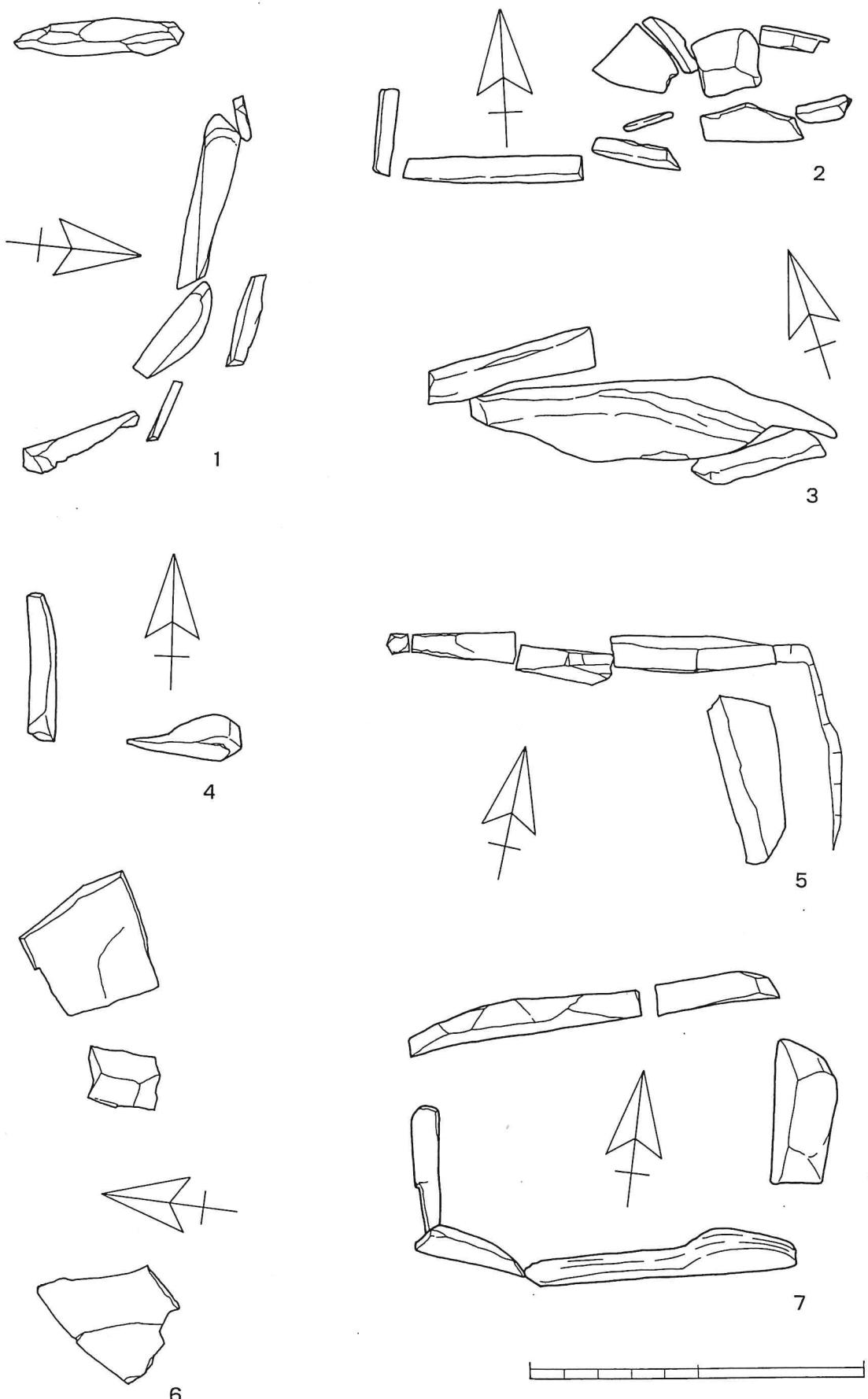
### 13号石棺（第11図2、図版23下）

13号石棺は西側石棺群の中心近くに位置する。

西側の短側壁と両長側壁を構成する数枚の石材が残っている。この中で原位置を保っているのは短側石だけで、他はすべて動いているが、主軸はほぼ東西方向と思われる。石材はすべて砂岩である。  
(松村)

### 14号石棺（第11図3、図版24ー上）

12号石棺の北約2mにあって、1枚の長側石の両側に2枚の短い板石が接する状況



第11図 石棺実測図(3)  
(1-12号・2-13号・3-14号・4-17号・5-18号・6-21号・7-19号)

にある。長側石の長さ110cm、幅20cmで、この石が原位置にあるとすると、主軸はほぼ東西になる。石材は砂岩。

(渡辺)

#### 15号石棺（図版24－下）

西側石棺群の南西端に位置する。主軸方向は東西を示していたと考えられるが、墳頂部方向から土砂が石棺を覆うかたちで流出し、その堆積土に木が根を張り、石棺は倒壊したと推定される。

『天草の古代』には支石墓として紹介されているが、その中で擇石とみなされている石材は、恐らく長側石が倒れ込んだものであろう。

(新谷)

#### 17号石棺（第11図4、図版25－上）

西側石棺群のほぼ中央に位置する。主軸方向は東西である。石棺は短側石1枚、北側に倒れかかった長側石1枚のわずか2枚しか残っておらず、周囲にも石材は見出せない。石材は7cm程度の厚さの板石が使用されている。

(新谷)

#### 18号石棺（第11図5、図版25－下）

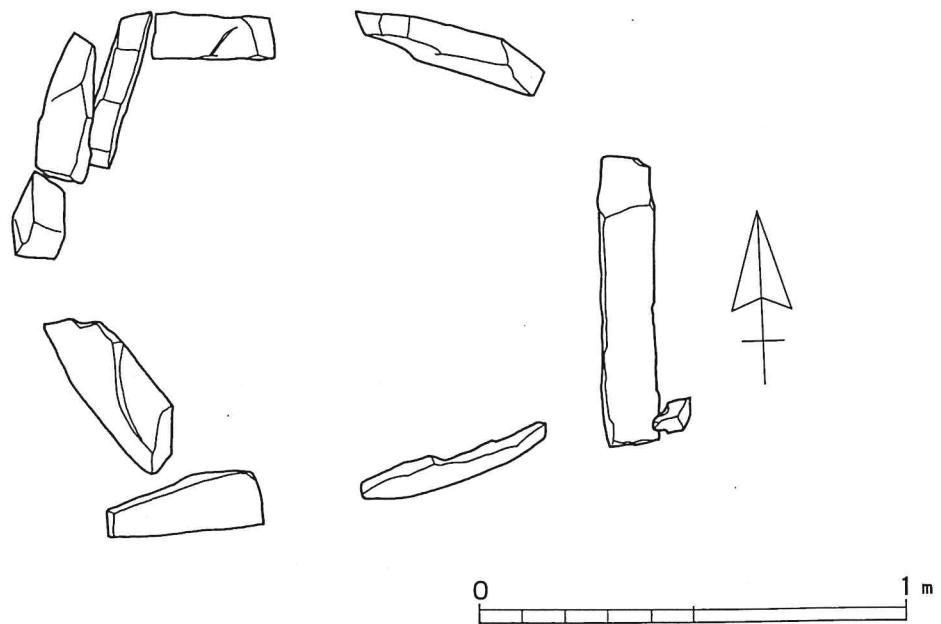
17号石棺の西約2mにあり、主軸を東西にとる。北側の側石は薄い板石を3枚並べ、東側妻石はやや内側に倒れかかった状態にある。石材はいずれも砂岩。

(渡辺)

#### 19号石棺（第11図7、図版26）

西側石棺群の西北端に位置する。主軸はほぼ東西を示すが、これは西側石棺群における大多数の石棺の主軸方向と同一である。石棺は、短側石が各1枚、長側石が各2枚の計6枚から成り、短側石が長側石の中へ入り込んでいるかたちで旧状をよくとどめていると言えるが、緩斜面に立地しているため、わずかに北側へ傾いている。大きさは内法で約100×70cmの長方形を呈している。石材は東側の短側石と南側の長側壁の西寄りの石材を除き、すべて10cm程度の厚さの砂岩の板石が使用されている。

(新谷)



第12図 石棺実測図 (4) (22号)

#### 21号石棺 (第11図 6、図版27ー上)

西側の小丘最北端にある19号石棺と、中央近くにある22号石棺のほぼ中間にあって、小丘の傾斜にそういうように主軸は東西になると思われる。3枚の薄い板石が残るのみで、形状は詳しくは知りえない。石材は砂岩。

(渡辺)

#### 22号石棺 (第12図、図版27ー下)

13号石棺と21号石棺のほぼ中間にあり、東西の妻石と、北側の長側石の一部が残る。南側の側石は3枚みられるものの、いずれも原位置をはずれている。東側の妻石は厚さ13cm長さ68cmで深く土中に入り込んでいて、原位置を保っていると考えられる。西側の妻石は3枚の薄い板石で構成される。石材はいずれも砂岩である。石棺の内法は推定で $1.2m \times 0.6m$ である。

(渡辺)

## V ま　と　め

宮崎石棺墓群は、22基の箱式石棺墓が海拔26mのコンタで区切られる二つの小丘上にあって、東西に離れて分布している。昭和37年坂本経堯氏が踏査された折には、「東の丘に箱式石棺十基、西の丘に支石墓六基と箱式石棺十基」が存在していたとされるが、<sup>注(1)</sup>今日では東の丘に7基、西の丘に15基の箱式石棺が確認されるにすぎない。しかし、東の丘では1号棺と3号棺の間、4号棺と6号棺の間、西の丘では8～10号棺のグループと他のまとまりの間、11号棺と16号棺、16号棺と18号棺の間などでは分布の空白がある。とりわけ8号棺から16号棺の間と16号棺から18号棺の間では、墓壙状の掘り込みがあって石棺材と思われる板石片が散在していることからみて、本来的には坂本氏が推定されたように、30基前後の石棺墓地が形成されていたものと推定しうる。

坂本氏によれば、西の丘に6基の支石墓があるとされ、その一部が写真に納められている。このものは今回の調査では15号石棺としたもので、これは石棺の長側石が一方にたおれて重なったもので、支石墓とは考え難い。また平岡氏が支石墓の可能性を示唆された東の丘の2基（5号棺と7号棺）も、発掘の結果、石棺の蓋石の大きいものと認定されるので、宮崎には支石墓は存在しなかったものと考えうる。

このことは今日までに知られている支石墓全体からも支持されよう。分布上では島原半島の原山支石墓群と熊本県八反田、麻生原、ハッカ割支石墓などが西南端であり（付篇2参照）、ここは分布域からはずれている。また時代的には縄文時代終末から弥生前期にかけての支石墓の下部構造は木棺や箱式石棺で構成されるが、弥生中期以降のものは甕棺や土壙墓となってゆくのであり、箱式石棺墓は皆無である。さらに支石墓の構築年代が最も新しいものは、藤尾支石墓群の弥生中期後半であり、免田式土器を伴う支石墓はこれまで確認されていない。このように支石墓の分布、構造、年代のどの面からみても、宮崎の場合は支石墓に該当しないものであり、この石棺墓群には支石墓は存在しなかったとみるのが妥当である。

宮崎石棺墓22基のうち、今回発掘調査をしたものは5基で、うち16号棺は時間不足のため中途で終わっている。此度びは保存を前提としての確認調査であったために、

石棺の掘り方を完全に検出するまでは至らなかつたが、ほぼ石棺の構造は把握できた。また発掘を行わない石棺については、15号棺を除いて石棺側石上部の実測を行い、相互の位置関係の確定につとめた。これら21基の石棺墓を構造上からみると、①薄い板石を横に並べて棺をつくるもの(7号等)、②厚い板石を横に並べて側壁をつくるもの(16号棺)、③薄い板石を数枚縦に並べて側壁をつくるもの(11号棺、20号棺)の3つに分類することができるが、分布上の特質は不明のままであった。

石棺の分布をみると、石棺群のほぼ中央にある鞍部を境として、東西二つの小丘上に離れて分布している。それら石棺の長軸の方向をみると、各々のグループ中に、東西にとるものと南北にとるものとが並存している。それら石棺の内訳をみると、いずれも西と北方向が広いために、西枕と北枕の二方向配置が守られていたことが分る。こうした頭位の方向に意味があったことを単的に示すのは、西丘の石棺内に於いて、東寄りの4基は北枕、その他西側のものは西枕と完全に方向を異にする石棺が同一集団の中でさらに小さなグループとして分布上のまとまりをみせることである。後述するように、頭位を異にする11号棺と20号棺で出土した土器から、これらはほぼ同時に存在したことが知られるので、何故こうした頭位の異りが併存するのか問題を残している。もし保存が完全で、人骨の出土が得られたならば、血族関係の分析を通して社会構造のあり方まで追求することができるのであるが、今回は頭位の異りのあるグループが有意味に併存していたことだけの指摘にとどめたい。

石棺に副葬された遺物の品目としては、土器と鉄器がある。いずれの石棺も盜掘を受けたり、破壊を受けていて小破片となってその数量は確定できないが、11号棺では壺1点、高杯1点、鉄剣3本、鉄鎌4本が出土し、20号石棺では壺2点、高杯2点、甕1点、鉄剣1本、鉄鎌1本がみられた。鉄鎌がやや少い点を除けばこの時期の石棺墓の副葬品の品目としては一般的なものとみなしうる。ただ副葬品は何ももたない石棺が多くみられることを強調すれば、逆に多くの副葬品をもつた特殊なものであるともいいう。この点7号石棺の副葬品とみられる鉄釣の出土は、この特異性を解く一つの鍵を提供してくれるものかもしれない。副葬品として出土した鉄剣や凹基鎌はいずれも、弥生時代中期後半以降にみられる形態をとどめるものであり、石棺や鉄器をみる限り、弥生時代の流れを汲むものとすることができよう。

石棺墓に副葬された土器からみると、最も溯上するとみられるのは、7号棺より出土した免田式土器である。但し器形の判る甕形土器がないために断定はできないが、従来の土器編年からいえば弥生時代の終末期にあたる。一方最も新しくなるものは平岡氏によって採集された土器で、類例としては、福岡県三雲石橋石棺墓出土土器をあげることができる。<sup>注(2)</sup> 11号棺や20号棺で出土した土器類は、田崎氏の有田段階にあたるものであり、このことからすれば、宮崎石棺墓群は弥生時代の終末期から古墳時代初頭にかけて（紀元3世紀～4世紀）の極く限られた時間帯に構築されたものとみなすことができる。

弥生時代から古墳時代初めにかけて、熊本県地方でみることのできる集団墓としては、白川以北の平野部では木棺墓と甕棺墓、宇土半島以南では土壙墓が主体となって構成されるのに対し、三角から天草にかけては箱式石棺墓がその主体となる。この点に於いて、宮崎石棺墓群は中九州の南部のこの期を代表するものといえよう。しかし天草地方では石棺墓の破壊が多く、宮崎石棺墓群にみられるような集団墓がそのまま保存されているのは大変珍らしいものであり、上述した成果と併せ熊本県のみならず、九州地方の弥生時代から古墳時代にかけての歴史を解明する折には不可欠の遺跡であると考えられる。終りにあたりこうした貴重な先祖の遺産を適切な形で保存活用されることを関係諸機関や地元住民の皆様に深くお願いする次第です。 (甲元)

注(1) 坂本経堯・坂本経昌『天草の古代』昭和46年

注(2) 柳田康雄「三、四世紀の土器と鏡」(『古文化論集』) 昭和57年

注(3) 田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」(『史淵』120号) 昭和58年

## 付篇1 倉岳町の遺跡

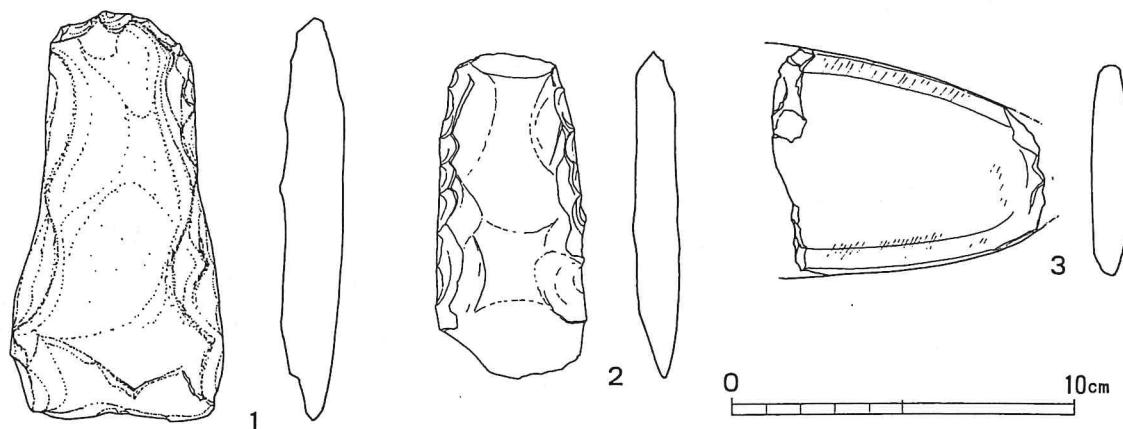
倉岳町の遺跡分布調査は、古く平岡勝昭氏や坂本経堯氏によって行われ、近くは高田尊徳氏や歳川喜三生氏によってなされている。うち昭和35年頃の平岡氏の踏査遺跡は『天草史談会報』に報告されており、採集された遺物は熊本市博物館に収蔵されている。市博物館にある石器は黒曜石の破片を除くと次の3点である（第13図）。

1は「肥後国天草郡倉岳村中浦」「昭和36.3.5」と注記された砂岩製。刃部に向って中ほどよりやや撥型に開く打製石斧である。表裏面とも腐植が激しく、明確な調整痕や使用痕は分らない。

2は「天草郡倉岳村宮田梅ノ木」「60100201」と注記されたもので、短柵型の局部磨研の打製石斧。チャート製、両端部は研磨して刃部を形成し、両長側片は大まかな剝離痕をそのままとどめる。

3は「倉岳村南平」「6003061」と注記されたもので、平岡氏の報文では「磨製石斧、緑泥岩半折現存する厚さ1.2釐、現在海水面下一米河口のため断定不能」とある。棚底川の河口で採集されたものである。頁岩製、扁平で両長側面に砥ぎ出し痕があって、端唇部は丸味をもつ。表裏面ともに擦痕が顕著、石斧ではなく擦切用の石鋸とも思えるが、断定はできない。

今回宮崎石棺墓群の確認調査時に、あわせて倉岳町内の遺跡分布調査も行ったので、ここでその概要を記す（付図参照）。



第13図 町内出土石器実測図（1：中浦、2：梅ノ木、3：南平）

### 1. 宮田境目平尾台遺跡

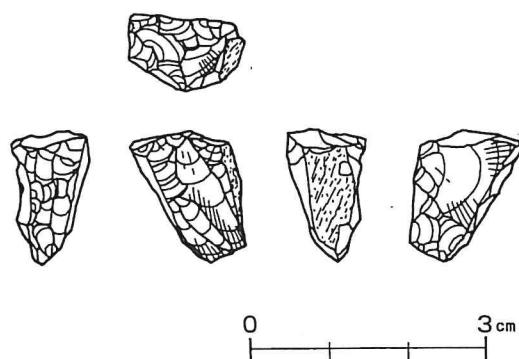
境目の小さな沖積地をみおろす、東側の台地上にある。付近は海拔が10～20mの緩やかなスロープをなしていて、段々畑の一部に新しい道路がつけられている。ここで採集されたのは須恵器片で、外面に山型の叩きを施し、内面には横位のナデ痕がみられる。集落址の一部かとも推定されるが、他に関連するものは何も見いだせない。

### 2. 宮田境目古墳（図版28、29）

宮田浜田漁港の西を流れる砥石川岸から西へ60mほど行った道路脇の洪積台地上にあり、南に開口する両袖型の横穴式石室である。石室の下部四周はそれぞれ一枚の大石を据え、四周から割石を持ち送り状にせり出して、一枚の天井石に達している。床面より天井までの高さ1.4m、床面の広さ $1.95 \times 1.92$ m、コの字型死床を配置すると思われるが、床面はすでに荒らされ、奥壁近くには観音様が祀られていて詳しくは知りえない。入口は0.95m離れて2枚の板石が1.3mほど南に開き、羨道をなしている。坂本経堯氏は径約25m、高さ4.5mの円墳で、幅約6mの濠をめぐらしたものと想定されている（坂本経堯氏の『天草の古代』）。

### 3. 棚底下塔尾遺跡（図版30－上）

倉岳高校がある塔尾の台地上の末端部で、海拔が10mほどの小さな平坦地にある。現在付近はみかん園とイモ畑となっている。従来から黒曜石製の石鏸や黒曜石片が採集されていた。今回の踏査ではチャート製石鏸、黒曜石片、龍泉窯青磁碗とともに、黒曜石製の細石刃核が1点採集された（第14図）。原材の自然面から打撃を与え、厚く残った面に調整剝離を施して打面を形成している。細石刃の剝離は打面周囲のうち約半分を使用し、剝離痕は6面認められる。他の残りの面は自然面と原石核調整段階の大きな剝離痕をそのまま残している。全体的にこれ以上の使用は無理



第14図 下塔尾遺跡採集石器実測図

といえるほど小さくなっており、打面及び側面ともに乱れがみられる（以上網田龍生氏教示）。

こうした細石刃核は九州では最古の土器と併出するか、あるいはこれよりも少し溯上する時期のものと考えられる。

#### 4. 棚底塔尾遺跡（図版30－下）

先述した下塔尾遺跡の北側、海拔が約40mほどの台地のほぼ中央部にあり、かなり広範囲にわたって黒曜石破片や石鏃が採集しうる。この台地の東と西は割合と深い谷となり、南は緩やかにスロープを描きながら下塔尾遺跡や小崎遺跡へと続いている。土器片は一片もこれまで採集されていない。

#### 5. 小崎遺跡（図版31－上）

塔尾台地の南端諏訪宮の境内を中心とした地域一帯である。表土の流出が激しく、今日赤色粘土が至る所むきだしになっているが、黒曜石破片及び石鏃は赤色土上面にある褐色の漸移層中より発見することができる。平岡氏はここでサヌカイト製の石鏃を表採している。

#### 6. 棚底曙遺跡（図版31－下）

小崎遺跡の谷をへだてた対岸の台地縁辺部とそれに続く海岸一帯から多くの遺物が採集されている。これまで採集された遺物をみると、台地上では石鏃が多く、海岸では縄文時代中期・後期の土器片とともに多数の磨製石斧がみられる（図版31－下）。海岸にみられる遺物は今日の潮干帯にあり、カミノハナ海岸遺跡や前島貝塚などと同様の立地である。

#### 7. 棚底浦川遺跡（図版32－上）

前述した塔尾遺跡の東側、谷一つをへだてた対岸に位置し、観音寺の西側、台地の中央から縁辺部にかけての畑の中より遺物が採集できる。畑では一部赤色の粘土もみられるが、褐色土壤も残り、縁辺部の黒色土壤の分布する範囲内で多くの黒曜石片と

とともに磨製石斧が表面採集されている。

#### 8. 棚底毛首遺跡

浦川遺跡と道1つへだてた同じ台地上にあり、本来は浦川遺跡とともに一つの大規模な集落址であった可能性が高い。浦川遺跡と同様に黒曜石製の石鏃と破片がこれまでに多く採集されており、この他平安時代の土師壺片もみられる。

#### 9. 棚底山仁田遺跡

苓陽幼稚園の北側、棚底川の扇状地上の約100mほどの広範囲から須恵器片や黒曜石石鏃などが採集されている。棚底川の氾濫による二次的移動も考えられなくもないが、古代の集落立地としては格好の場所にある。

#### 10. 棚底八龍遺跡

棚底港の東北側、埋めたて地の背後にある低地にあり、高さが最も低い水田中にのみ遺物が採集できる。黒曜石の石鏃が中心で、他に石匙もみることができるが、土器片は採集されていない。

#### 11. 棚底宮崎遺跡

宮崎石棺墓群のある小丘の南側、倉岳町中央公民館の北西側で、ちょうど棚底川が形成する扇状台地の末端近くに位置している。黒曜石の破片が多くみられるが、他に古代の須恵器片も少なからず出土している。

#### 12. 名桐石棺群

浦川が形成する沖積平野に岬のようにつき出た小丘陵の尾根上にあり、小谷家の墓地の南側、雑木林の中に3基の箱式石棺が殆んど破壊された形態で残っている。坂本経堯氏によると昭和37年頃には6基の箱式石棺が尾根上に東西に並んでいて、うち1基の石棺の一側は自然の岩盤をくりぬいて側壁にしたものもみられたという（坂本経堯・坂本経昌『天草の古代』）。

### 13. 名桐遺跡

名桐石棺墓群から名桐川をはさんだ対岸の低い洪積台地上にあり、道路工事に際して古式土師器の台付壺の一部が出土している。他に土師器片も少量採集できる。今日みかん園となっている部分だけ旧地形を留めるのみで、ほ場整備のために殆ど地形は改変して遺跡の範囲を把むことはできない。

### 14. 名桐七曲遺跡

名桐川上流左岸、海拔が140mほどのあたりの小さな平坦地に存在した遺跡で、かつてサヌカイト製の石匙が採集されている。しかしこの付近一帯は天草大水害の折に大規模な山崩れをおこし、その後整地されたために、旧地形は殆ど残っていない。

以上先土器時代から平安時代にかけての遺跡の他、倉岳町には浦城の下に浦城跡、棚底尾崎城平には棚底城跡が、宮田城山には宮田城跡の中世山城址がある。また倉岳の頂上は特別な信仰の対象となっており、江戸時代以来石製舟型模造品を献納したものがみられる。

(甲元)

## 付篇2 支石墓分布一覧表

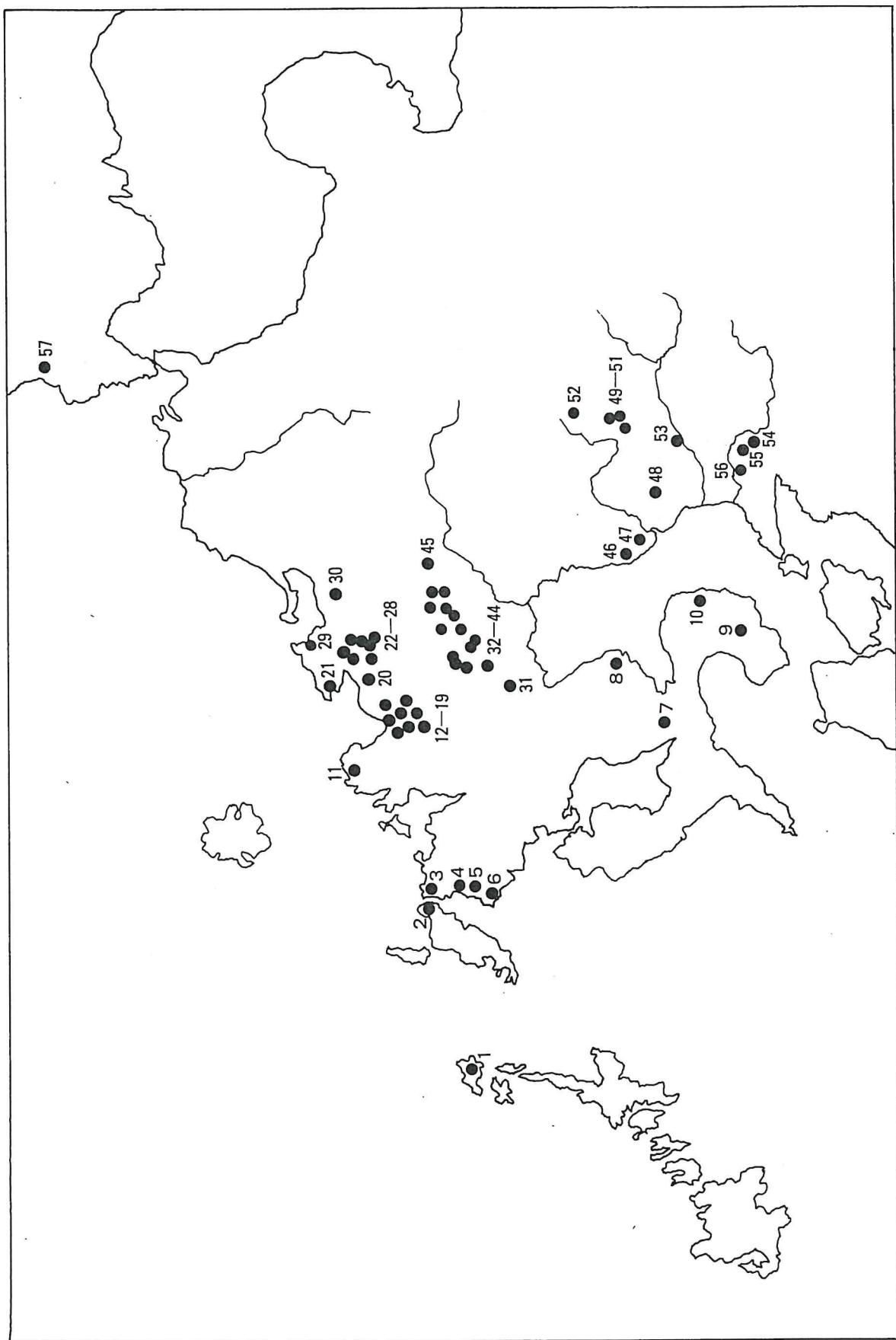
西北九州を中心として日本に分布する支石墓は、今日57遺跡を数える。これらのうち、分布の集中するのは佐賀県唐津から福岡県糸島にかけての地域と、佐賀平野の東部で、その他の支石墓は点在するあり方を示す。一遺跡あたりの支石墓の基数の多いのは長崎県原山支石墓群、佐賀県丸山支石墓群の100基以上で、福岡県新町支石墓の57基、長崎県風観岳支石墓群の20基以上がこれに次ぎ、これらは支石墓だけで共同墓地をつくる。他の多くの支石墓関係の遺跡では10基以下のものが、木棺墓や甕棺墓と一まとめりに共同墓地を形成することが多く、中には1基のみ存在するのも珍らしくはない。一般に支石墓だけで共同墓地を形成するものは構築年代が古く、他の墓制と混在するものは年代が新しくなる。

支石墓の下部構造をみると、箱式石棺を内部主体とするものが古く、甕棺をもつものは新しい。また木棺墓もしくは土壙墓を内部主体とするものは弥生時代前期から中期にかけてみられ、配石土壙をもつものは支石墓の終末期にあたる。

今日最も古い支石墓としてみられるものは、長崎県狸山、大野台、原山、風観岳、佐賀県丸山、福岡県新町などであり、弥生時代早期に溯る。熊本県下にみられる支石墓の多くは支石墓の下部構造として甕棺を伴ったり、土壙墓であったりして、箱式石棺をもつものはない。この点でも支石墓分布の周辺部であることを示している。

(甲元)

第15図 支石墓分布図



支石墓一覧表（第15図番号と一致）

番号	遺跡名	所 在 地	墓数	内 部 主 体	副葬品他	文献
1	松 原	長崎県北松浦郡宇久町平郷	2		弥生前期、貝輪、貝型臼玉	①
2	白 岳	〃 平戸市大久保町大谷				②
3	黒 田 原	〃 北松浦郡田平町黒田原	3+α	箱式石棺		③
4	大 野 台	〃 〃 鹿町町深江	8	箱式石棺	弥生早期～前期土器	④
5	小 川 内	〃 〃 江迎町小川内	10	箱式石棺	弥生早期～前期壺、鉢	D
6	狸 山	〃 〃 佐々町松瀬免	7	箱式石棺	弥生早期～前期大珠	C
7	風 観 岳	〃 諫早市下大渡野町	20+α	箱式石棺、土壙	弥生早期～前期壺、石斧	⑤
8	井 崎	〃 北高来郡小長井町	2+α	箱式石棺	弥生前期	⑥
9	原 山 1 2 3	〃 南高来郡北有馬町屋代 〃 〃 坂上 〃 〃 原	90+α	箱式石棺、壺 箱、土壙	弥生早期～前 期、壺他	D ② ⑦
10	景 華 園	〃 島原市三会町	2	甕棺	弥生中期	D
11	大 友	佐賀県東松浦郡呼子町	1	土壙	弥生前期土器	⑧
12	徳 須 恵	〃 〃 北波多村	10+α	甕棺他		A⑨
13	迫 頭	〃 唐津市鏡字東宇木	13			A
14	瀬 戸 口	〃 〃 宇木瀬戸口	14	箱式石棺、壺棺、 土壙	弥生前期土器	A⑨
15	森 田	〃 〃 〃 井手口	16	土壙、甕棺	弥生前期土器	⑨
16	岸 高	〃 〃 平田	6	不明		A
17	葉 山 尻	〃 〃 葉山尻	5	土壙、甕棺	夜来前期土器	⑨A
18	割 石	〃 〃 鏡	6	土壙		A
19	五 反 田	〃 東松浦郡浜玉町	6	土壙、甕棺	弥生前期	A⑨
20	曲 り 田	福岡県糸島郡二丈町石崎	1			⑩
21	新 町	〃 〃 志免町新町	57	木棺、甕棺	弥生早期～前期土器	⑪
22	支 登	〃 〃 前原町志登	10	土壙	磨製石鏃	B
23	支 登 神 社	〃 〃 〃 〃	2			E
24	千 里	〃 〃 〃 千里				⑫
25	井 田 用 会	〃 〃 〃 井田	1	箱式石棺	管玉	E
26	井 田 御 子 守	〃 〃 〃 〃	1			E
27	加 賀 石	〃 〃 〃 三雲郡里	1	土壙	磨製石鏃	E
28	石 ケ 崎	〃 〃 〃 石ヶ崎	1	箱式石棺	管玉	⑬A
29	東 小 田	〃 福岡市西区小田東小田	1	箱式石棺	小壺	B
30	船 石	〃 〃 〃 四箇	1			⑭
31	佐 識	佐賀県小城郡三日月長神田	1			⑮E
32	南 小 路	〃 佐賀郡大和町尼寺	1	合口甕棺		E
33	礫 石 B	〃 〃 〃 久池井	13	土壙5、壺棺8		⑯⑰
34	黒 工 原	〃 佐賀市金立町黒土原	2	土壙		⑮
35	丸 山	〃 〃 久保泉町川久保	118	土壙、箱式石棺、 壺棺	弥生早期～前期土器	⑮

番号	遺跡名	所 在 地	墓数	内 部 主 体	副葬品他	文献
36	村 徳 永	佐賀県佐賀市久保泉町村徳永	1	合口甕棺		⑯
37	伏 部 大 石	〃 神崎郡神崎町竹				⑯
38	四 本 黒 木	〃 〃 〃 城原	1	甕棺		⑯
39	馬 郡	〃 〃 〃 鶴	1			⑯
40	松 森	〃 〃 東背振村大曲	1			⑯
41	西 石 部	〃 〃 〃 石動	1+α			⑯
42	船 石	〃 三養基郡中原町中原	2			E
43	姫 方	〃 〃 〃 姫方	数基	甕棺		E
44	香 田	〃 〃 〃 菓原	1	土壙		⑯
45	三 沢 神 社	福岡県小郡市大字三沢	2			E
16	羽 山 台	〃 大牟田市草木町羽山台	1	甕棺	弥生中期	⑯
47	年 ノ 神	熊本県玉名郡岱明町	2	配石土壙	ゴホウラ製貝輪	⑯
48	塔 ノ 本	〃 鹿本郡植木町轟	3	土壙		⑯
49	藤 尾	〃 菊池郡旭志村	9+α	〃	弥生中期	⑯
50	古 閑 山	〃 〃 〃	5			⑯ F
51	立 石 原	〃 〃 〃	1			⑯
52	平 良 石	〃 菊池市字平良石	1			⑯
53	梅 の 木	〃 菊池郡菊陽町字梅の木	2	土壙		⑯
54	麻 生 原	〃 上益城郡甲佐町	2			⑯
55	八 ツ 割	〃 〃 〃	12			⑯
56	八 反 田	〃 〃 益城町八反田	1	甕棺	弥生中期	F
57	中 の 浜	山口県豊浦郡豊浦町浜	1	土壙	弥生前期	⑯

## 参考文献

- A 松 尾 稔 作 『北九州支石墓の研究』昭和32年
- B 文化財保護委員会 『支登支石墓群』昭和31年
- C 森 貞次郎 「日本における初期支石墓」(『金載元博士回甲紀念論集』)  
昭和44年
- D 高 野 晋 司 「長崎県の支石墓」(『考古学ジャーナル』161号) 昭和54年
- E 松 岡 史 「佐賀・福岡県の支石墓」(『考古学ジャーナル』161号)  
昭和54年
- F 桑 野 憲 彰 「熊本県の支石墓」(『考古学ジャーナル』161号) 昭和54年
- ① 小 田 富士雄 「五島列島の弥生文化」(『人類学考古学研究報告』2)  
昭和54年
- ② 長崎県教育委員会 『長崎県遺跡地図』昭和62年

- ③ 長崎県教育委員会 『里田原遺跡』 昭和51年
- ④ 大野台遺跡調査団 「大野台遺跡」(『古文化談叢』1) 昭和49年
- ⑤ 諫早市教育委員会 『風観岳支石墓群調査報告』 昭和51年
- ⑥ 正 林 譲 「小長井町の先史・古代」(『小長井町郷土誌』) 昭和51年
- ⑦ 古 田 正 隆 『重要遺跡の発見から崩壊までの記録——縄文晩期原山埋葬遺跡——』 昭和49年
- ⑧ 木 下 元 治 「佐賀県・大友弥生遺跡」(『九州考古学』39・40) 昭和45年  
呼子町郷土史研究会 『大友遺跡』 昭和56年
- ⑨ 唐津湾周辺遺跡調査委員会編 『末盧国』 昭和57年
- ⑩ 福岡県教育委員会 『石崎曲り田』(1) 昭和58年
- ⑪ 志摩町教育委員会 『新町遺跡』 昭和62年
- ⑫ 福岡県教育委員会 『三雲遺跡』(1) 昭和60年
- ⑬ 原 田 大 六 「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」(『考古学雑誌』38—4) 昭和27年
- ⑭ 福岡市教育委員会 『福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書』1 昭和52年
- ⑮ 佐賀県教育委員会 『久保泉丸山遺跡』 昭和61年
- ⑯ 佐賀県教育委員会 『礫石遺跡』 昭和64年
- ⑰ 田 平 徳 栄 「弥生時代開始期と佐賀平野」(『日本史の黎明』) 昭和60年
- ⑱ 大牟田市教育委員会 『羽山台』 昭和50年
- ⑲ 田 添 夏 喜 『年ノ神遺跡調査報告』 昭和44年
- ⑳ 玉名女子高校社会部 『塔ノ本遺跡発掘調査』 昭和47年
- ㉑ 坂 本 経 堯 『藤尾支石墓群』 昭和34年
- ㉒ 『菊池市史』 昭和57年
- ㉓ 熊本県教育委員会 『梅の木遺跡』 昭和58年
- ㉔ 熊本県教育委員会 『沈目立山遺跡』 昭和52年
- ㉕ 国 分 直 一他 『中の浜遺跡発掘調査概報』 昭和45年

### 付論 3 箱式石棺分布一覧表

熊本県下の箱式石棺墓の分布は、阿蘇郡小国町の梅木を北限とし、西は本渡市尾串石棺群、南は水俣市北園石棺を限りとする範囲にみることができる(第16、17図)。この中でも、菊池川流域、白川下流域、緑川流域、阿蘇谷、宇土半島基部から天草上島にかけての地域に分布が集中する。墳丘をもたない箱式石棺墓と、墳丘をもつ石棺墓、もしくは方形周溝墓の内部主体となる箱式石棺の分布を比べてみると、菊池川流域、白川下流域、宇土半島から天草にかけての地域では墳丘をもたない箱式石棺墓が大多数を占めるのに対し、緑川流域や阿蘇谷に於ては、墳丘をもたない箱式石棺墓の遺跡数と墳丘をもったり、方形周溝墓の内部主体となる箱式石棺墓の遺跡数の割合が3対1ほどの割合で、かなり高い類縁性をみせている。また墳丘をもたない箱式石棺が知られていない球磨川下流域に、円墳の内部主体としての箱式石棺がみられるのも、注目すべき点である。また5基以上まとまって石棺墓の共同墓地を形成する遺跡は、ほとんどが沿海部でそれも宇土半島から天草にかけての八代海地域にまとまることは、この種の石棺墓の性格を知る手がかりとなる。

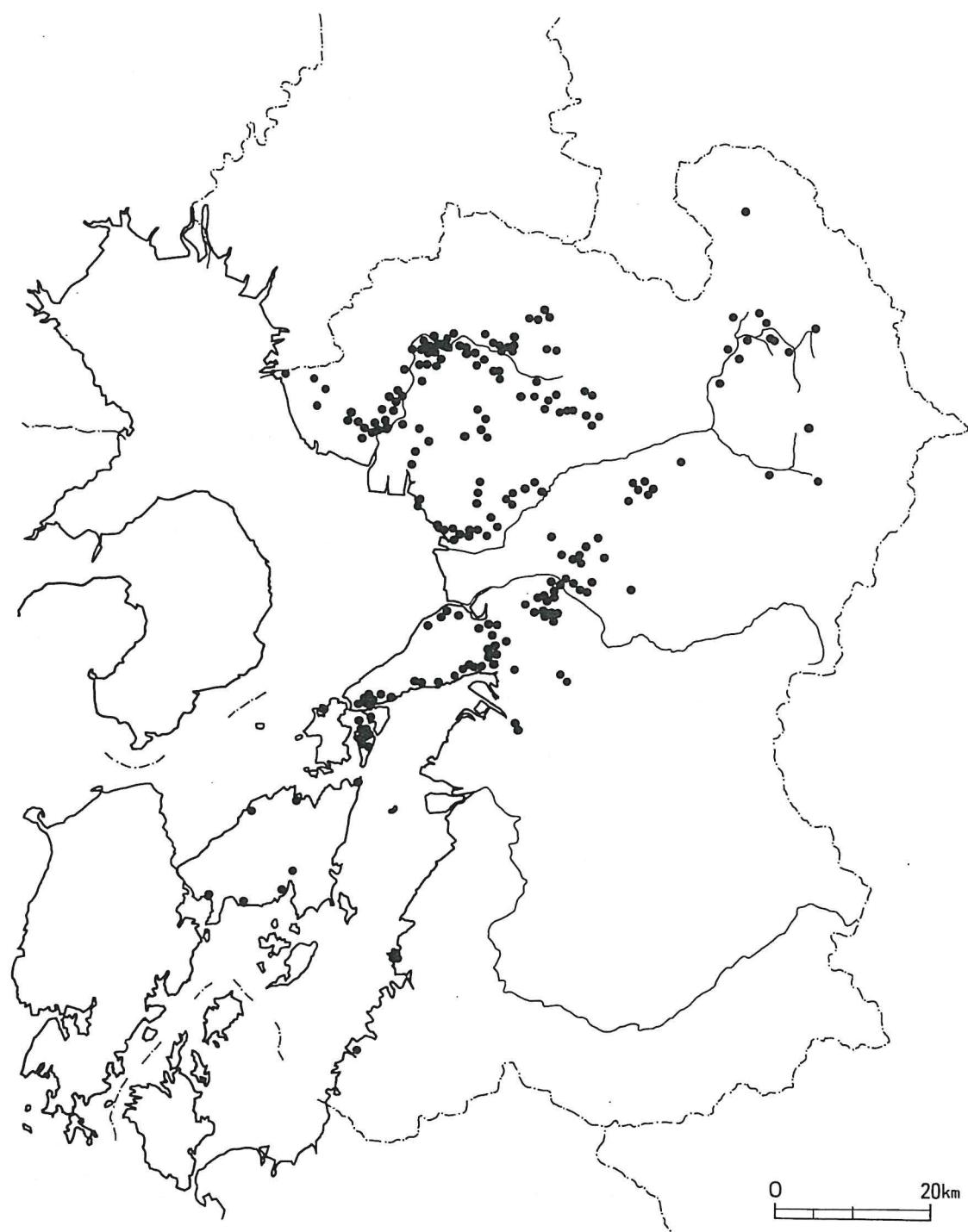
箱式石棺墓の石棺の大きさは、170cm×50cm前後のものが最も多い、小さなものは、60cm×30cm、大きいものでは300cm×60cmに達するものがあるが、同一遺跡中の石棺の規模には極端な違いは見られない。

石棺に使用される石材は、宇土半島から天草地域にかけては砂岩が利用されることが多く、他の地域では安山岩が最も一般的であり、菊池川流域では、凝灰岩がそれに次いで使用されることが多い。

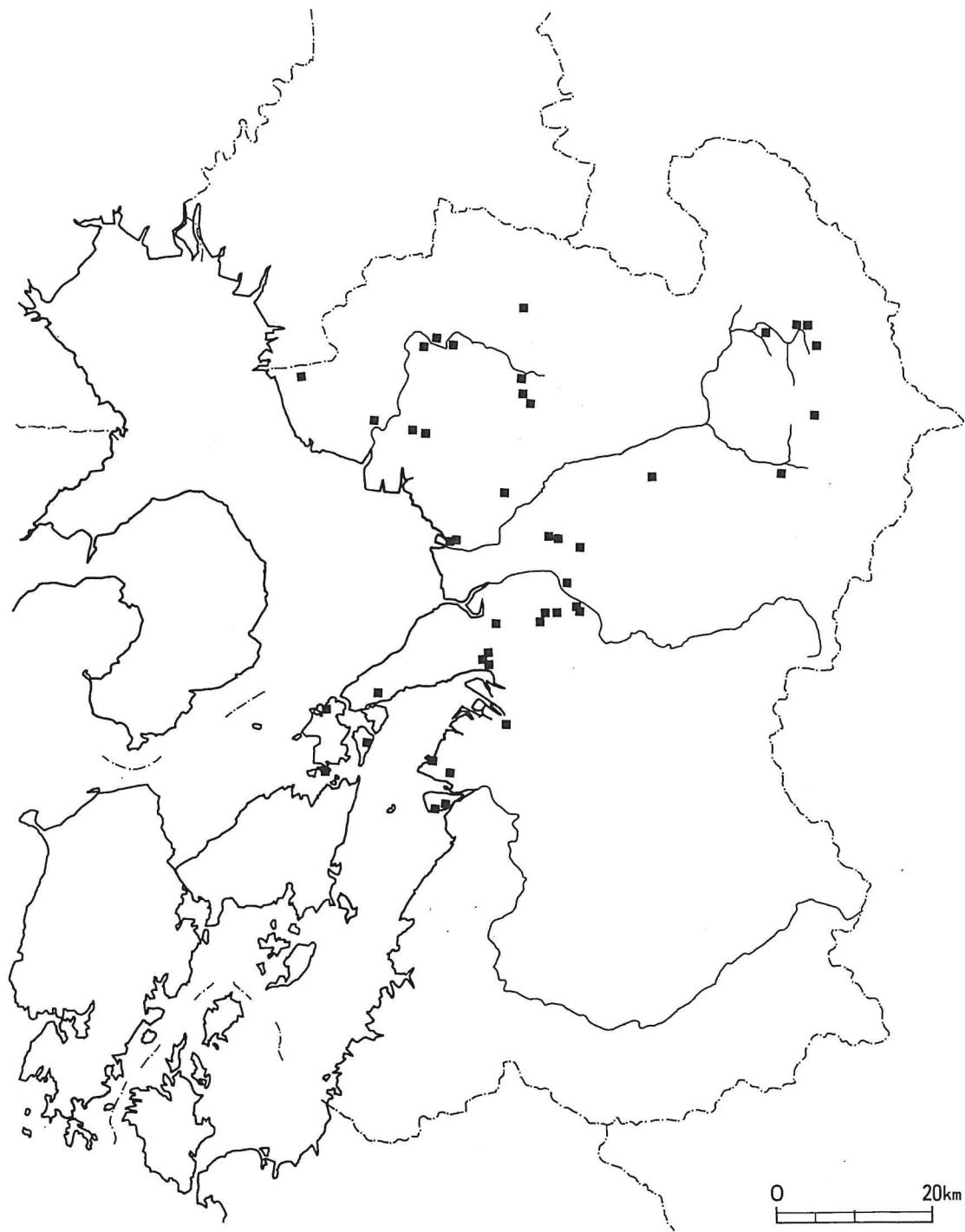
副葬品をもつ箱式石棺は多くはない。副葬品としてあげられるものはまず土器で、鉄製品としては、剣、刀子、鎌が多く、他に鉋、斧、鑓などがみられる。装飾品としては、勾玉、管玉、貝輪、冠、櫛などがあり、また鏡には方格規矩鏡や内行花文鏡などがある。

箱式石棺の築造年代については、古墳時代前期のものが大部分で、確実に弥生時代の後期以前に遡るものはほとんどなく、最も古いものでも弥生時代の最終末期であるとみられる。

(新谷)



第16図 箱式石棺分布図1 (墳丘をもたないもの)



第17図 箱式石棺分布図2 (古墳及び方形周溝墓)

熊本県箱式石棺一覧表

No.	石棺名	所在地	数	石材	副葬品	文献	備考
1	四つ山古墳	荒尾市大島四つ山	6			1, 2	移転
2	亀原古墳	平井・下井手山の上	1	安山岩		1	墳丘○, 主軸N -14° 6' -E
3	孤塚古墳	平井	1		土師器	1	
4	野原古墳	野原・野原八幡境内			鉈	1, 33	
5	高浜古墳	清里・高浜	1(?)			1	
6	金山古墳	上金山				1	
7	山上古墳	山の神	2(?)			1	
8	今泉古墳	玉名郡岱明町上今泉				74	消滅
9	塚原古墳	野原塚原	1(?)			74	
10	大原遺跡	大原	10	安山岩	鉄鎌, 勾玉, 管玉刀子	1, 5, 6	移転されたもの あり
11	南大門石棺	玉名市築地南大門	2(?)			1	1基は小型
12	西の山石棺	西の山	3(?)			1	
13	高岡いっちょ畠 古墳	山田・高岡	1(?)			1	
14	糖峯古墳	糖峯				1	
15	大の島古墳	中・大の島				1, 7	墳丘□
16	繁根木石棺	玉名市繁根木	1(?)		方格規矩鏡 (仿製)	1, 8	
17	岩崎石棺	岩崎・池田				1	
18	岡石棺群	玉名・岡	4	安山岩		1, 9	2基は妙修寺内 で保存
19	馬出古墳	玉名・馬出	1	凝灰岩		1	移転
20	田代阿弥蛇塚 古墳	溝上・田代				74	
21	田代中の塚古墳	溝上・田代				74	
22	赤禿古墳	溝上・赤禿			鉄劍	1	
23	高田古墳	伊倉北方・中北高田				74	
24	城ヶ辻1号古墳	向津留城・城ヶ辻	1(?)		鉈	1	
25	寺田3号古墳	寺田・樋元				74	
26	白骨どん古墳	北坂門田・井戸	(?)			74	墳丘○
27	京塚石棺	中坂門田・京塚				74	
28	江田土喰石棺	玉名郡菊水町江田・土喰	2	凝灰岩 (粘板岩)	鉈, 鉄鎌	10	他に石棺2基
29	江田穴観音石棺	江田・中小路	2			11	
30	竈門寺原石棺	竈門				74	
31	天御子石棺	竈門・天御子				74	
32	高野古閑石棺	高野・古閑				74	墳丘○
33	西葉山塚石棺群	下津原・ 西葉山塚				74	
34	下津原上西原石 棺群	下津原・ 上西原				12	
35	上原石棺	下津原・上原				74	
36	下強当石棺	斎藤				74	

No.	石棺名	所在地	数	石材	副葬品	文献	備考
37	大塚石棺群	玉名郡菊水町米山	4(?)		内行花文鏡	1	
38	呑崎石棺	天水町小天・呑崎				1	
39	箱井古墳	玉東町白木・箱井				1	墳丘○
40	御園石棺	椿井・東屋敷				13, 14	
41	御園古墳	〃 〃				74	周囲に10数基の石棺
42	椿井石棺	椿井	2		小刀	74	
43	藤井石棺	山鹿市藤井・西原				74	
44	城山石棺	保多田・城山	3(?)		直刀	15	墳丘○
45	西牧石棺	西牧・上の山			鉄劍	16	竜王山中に移転, 他に舟形石棺1基
46	鍋田東石棺	鍋田			鉄劍	16	竜王山中に移転
47	八の峰古墳	八の峰				74	
48	白石石棺群	白石	2以上		内行花文鏡 (仿製), 土師器片	17	
49	一本杉石棺	方保田・日置				18	
50	辻古墳4号墳	方保田・辻	1		鉄劍, 蕎手 刀子	19, 20	他に舟形石棺1基, 家形石棺2基
51	方保田石棺	方保田				21, 22	
52	塚の本石棺	方保田				74	
53	小原大塚古墳	小原・大塚	1(?)			74	墳丘○
54	中尾石棺	小原・中尾	5(?)			23	
55	竜宮石棺	小原・竜宮	10余基	凝灰岩		23, 24	
56	坂東石棺	鹿本郡鹿本町			鉄器, 高坏	25	
57	小町塚東側石棺	高橋・内原				25	
58	五社宮下石棺	津袋・本村				25	
59	長谷古墳群	菊鹿町長・長谷	6(?)			26	
60	今山石棺	下永野・今山				25, 26	墳丘○ 他に家形石棺
61	塚さん古墳	鹿央町春間・桜の上				74	
62	久保原石棺	岩原・久保原	1		珠文鏡 鉈, 刀子, 鍔先, 直刀	27	
63	郷原石棺	岩原・郷原				74	
64	寺の上石棺	広・寺の上				74	
65	原部石棺	原部				74	
66	浦大間遺跡	千田・浦大間	4(?)	凝灰岩	竹櫛 土師器	74	方形周溝墓
67	山ノ上石棺	植木町宮原・山ノ上	2			28, 29, 30	
68	正清橋石棺	宮原・正清橋			鉄劍 (鉈?)	31	
69	八久保石棺	宮原・八久保				74	
70	諏訪原石棺	諏訪原				74	
71	粕道石棺	粕道				11	他に石墓土壙, 家形石棺
72	山崎古墳	菊池郡七城町山崎	3(?)			32	

No.	石棺名	所在地	数	石材	副葬品	文献	備考
73	水次遺跡	菊池郡七城町水次	2			74	他に舟形石棺
74	蛇塚古墳	蛇塚				33	墳丘□，前方部に石棺
75	上原石棺	西合志町上原				74	
76	永田石棺	永田				74	
77	若原石棺	合生・若原				74	
78	生坪古墳	合生・生坪				74	墳丘○
79	迫原ハヤマ・塚古墳	合生・迫原	2		内行花文鏡 (仿製)	23, 24	
80	迫原長塚古墳	合生・迫原				74	
81	富出分古墳	泗水町吉富・富出分				18	
82	村吉古墳	吉富・村吉				18	
83	陳塚古墳	田島・陳塚			直刀	18	墳丘○
84	北原古墳	南田島・北原				18	
85	南原古墳	南原				18	周辺から野辺田式土器，土師器
86	平山古墳	旭志村高柳・高柳				74	
87	北受遺跡	高柳・北受				2	
88	五十町遺跡	高柳・五十町				74	周辺から野辺田式土器
89	横道石棺	麓・横道			劍，鉄鎌， 刀子，鉈， ガラス小玉 滑石小玉	35, 36	
90	南様ヶ水遺跡	南様ヶ水			勾玉	74	
91	キツネ塚石棺群	阿蘇郡西原村小森	数10基 (?)		直刀，鉄鎌	37	
92	仲鶴石棺	小森				74	
93	あかどう石棺	小森				37	
94	にれやま石棺	宮山	10数基 (?)			37	
95	宮山神社石棺	宮山	数基 (?)			37	
96	将軍塚古墳	宮山				37	墳丘○
97	秋田石棺	宮山			鉄刀	38	
98	宮山石棺	阿蘇町の石・檜山				74	
99	古園石棺	狩尾・古園	3(?)			38	
100	二本松石棺	西湯浦・二本松	5以上 (?)			10, 38, 39	
101	番出石棺	内牧・番出		安山岩		38, 39	
102	源太ヶ塚石棺	南宮原・村上		安山岩		38, 39	他に2基
103	山田1号古墳	山田・今古閑			土師器	74	
104	平原1号墳	山田・平原		安山岩	劍・堅櫛	72	墳丘○
105	本村石棺	小野田・村下		安山岩	土師器	38	石棺付近から完形土師器2コ (4C末)
106	村下石棺群	小野田・村下		安山岩		74	棺外から土師器
107	下山西遺跡	乙姫・下山西	4	安山岩	ガラス小玉 短剣，劍	70	棺外から長頸壺，高坏

No.	石棺名	所在地	数	石材	副葬品	文献	備考
108	手野石棺群	阿蘇郡一の宮町手野				39, 40	墳丘○?
109	丸山石棺	手野				39, 40	墳丘○?
110	秋葉権現塚石棺	手野				40	墳丘○?
111	観音堂前石棺	手野				40	
112	鞍掛塚石棺	中通・勝負塚			変形文鏡 珠文鏡 四獸鏡	40, 41, 42	
113	番出遺跡一号墳	中坂梨・番出		安山岩 (?)	内行花文鏡 (仿製) 直刀, 剣, 堅櫛	38, 39, 40	墳丘○, 他に4基
114	梅木古墳	小国町宮原・梅木	2			43	
115	上園古墳群	高森町高森・上の園		安山岩	馬具, 須恵器, 直刀, 鉄鎌, 刀子	2	
116	中大村古墳 二号墳	色見・中村	6以上	安山岩	堅櫛5, 剣1	72	方形周溝墓
117	上色見石棺	上色見	2(?)			74	
118	六の子石一号墳	久木野村久石・六の子石				72	
119	柚ノ木石棺	飽託郡北部町視川・柚の木	数基 (?)		須恵器	74	
120	八幡名石棺	和泉川 東八幡名			銅戈(中広)	74	
121	釜尾堂出石棺	釜尾・堂出	10以上			44, 32	
122	長崎鼻古墳	河内町船津・長崎鼻				45	
123	夢の殿石棺	船津・笛山				74	
124	名義尾塚古墳	熊本市清水町高平 打出屋敷				74	墳丘○
125	電通学園内古墳	津浦 電通学園内			珠文鏡 鉄劍	45	
126	白川学園石棺	打越・永浦				74	消滅
127	中山石棺	小山町中山	4	安山岩		46	
128	本妙寺石棺	花園町	2		刀子	45	
129	花崗山石棺	花岡山・仏舎利塔	2以上			45	周辺から土師器, 匂玉, 管玉, 小玉
130	中牧鶴・石棺	竜田町・中牧鶴				45	
131	若殿塚遺跡	弓削				45	
132	二本松石棺	上高橋		安山岩		45	
133	城山古墳群	高橋町				45	
134	高橋稻荷山古墳	高橋町			内行花文鏡 滑石製勾玉	74	古墳3基
135	高城山古墳	高橋町				45	墳丘○
136	高城山4号古墳	高橋町				45	
137	松尾島石棺群	上松尾	2(?)			45	
138	要江石棺群	上松尾・湯ノ谷	数基 (?)			74	
139	西竹洞石棺	上松尾・西竹洞			直刀(?)	45	
140	小林石棺	松尾・梅洞			鉄劍, 刀子	45	

No.	石棺名	所在地	数	石材	副葬品	文献	備考
141	檜崎山石棺	熊本市小島町権現平 檜崎山			直刀, 剣, 刀子	45	
142	檜崎山4号古墳	権現平 檜崎山			須恵器	45	墳丘○
143	広木周溝墓	健軍町広木	1	安山岩		45, 47	周溝より土師器
144	水源(地点)石棺	水源町				47	方形周溝墓 周溝より土師器
145	水源D地点石棺	水源町				47	円形周溝墓
146	小松山2号石棺	池上町				74	
147	木原石棺	下益城郡富合町木原	数基 (?)			48	
148	城の鼻古墳	城南町隈庄・古城	数基 (?)			48	
149	上の山石棺	隈庄・上の山	3		土師器片	74	
150	構口石棺	宮地・構口				48	
151	影熊石棺	阿高・影熊	2(?)			48	墳丘○
152	岸甲古墳	東阿高・岸			剣・貝輪	48	墳丘○
153	岸乙古墳	東阿高・岸				48	
154	塚原方形周溝墓	塚原		安山岩 凝灰岩		47	
155	塚原石棺	塚原		凝灰岩	鉄鋌, 鉄刀 鉄鎌, 鉄劍	47	蓋が一枚石
156	丸山古墳	塚原・丸山		阿蘇凝灰岩		47	
157	丸尾古墳	塚原・丸尾			鉄劍, 堅櫛	47	
158	北原甲古墳	北原				48	墳丘○
159	北原乙古墳	北原				48	
160	寺の上古墳	坂野・ 迫吉野			土師器片	48	周辺から須恵器
161	山畑古墳	坂野・山畑				48	
162	大塚山西古墳	坂野・ 東天神原			直刀, 刀子 鉄鎌 須恵器	48	墳丘○
163	迫甲古墳	坂野・迫	2(?)			48	
164	迫乙古墳	坂野・迫				48	
165	東天神原乙古墳	坂野・ 東天神原			土製管玉, 土錐, 赤貝	48	墳丘○ 径4m, 高さ2m
166	東天神原丙古墳	坂野・ 東天神原				48	
167	久具石棺	松橋町久具				11	
168	豊原石棺	豊野村				49	周辺より土師器 完形品
169	北の原石棺	豊野村				47	
170	上陳遺跡	上益城郡益城町上陳				47	
171	秋永遺跡	小池・秋永		安山岩	刀子, 剣, 鉄鎌片	47	方形周溝墓あり 周溝より土師器 周辺より鉄鎌
172	飯田溝石棺	北甘木・ 飯田溝				74	
173	上官塚遺跡	嘉島町井手・ 上官塚				74	

No.	石棺名	所在地	数	石材	副葬品	文献	備考
174	宮の本遺跡	上益城郡嘉島町下六嘉・宮の本				74	
175	剣原遺跡	北甘木・剣原	2		鉄劍, 刀子 鎌	50	
176	塔ノ木石棺	塔ノ木・豆坂	2			74	付近に石蓋土壙
177	豊秋石棺群	御船町豊秋	1		捩文鏡	43	
178	城塚石棺	豊秋・東原	4		刀子	51	
179	久保遺跡	秋只・久保	11	安山岩	劍, 刀子, 勾玉, 管玉, 臼玉, 貝輪	52	墳丘(?)
180	秋只石棺	木暮・秋只				74	
181	木暮西原石棺	木暮・西原	8			74	
182	峯石棺群	矢部町島木・ 上日栗	4(?)			74	
183	梅崎石棺群	宇土市笹原町梅崎		安山岩		74	
184	長浜石棺群	長浜・井崎			須恵器片, 鉄鎌片	74	
185	マブシ石棺(5)	下網田町塩屋			刀子, 鉄鎌	53	
186	檜崎古墳	花園町檜崎			直刀	54	墳丘□, 他に 家形石棺2基, 舟形石棺1基
187	古保里石棺	古保里	5	安山岩	鹿角製刀子 木櫛, 短劍 仿製鏡 勾玉, 小玉 鉄鎌, 鍔	54, 55	
188	平原石棺	境目・平原				74	
189	境目石棺	境目・西原	3		鉄鎌, 小玉	55	土壙中から土師 器
190	上松山石棺	松山町東原		安山岩	鍔		
191	南山内石棺	東山町南山内	1	安山岩	刀子	56	
192	小部田石棺	住吉町堤上			阿蘇凝灰岩	69	
193	西岡台石棺	神馬町千畠敷		安山岩		69	
194	久保2号墳	井無田・北請	1	安山岩		69	墳丘○
195	西潤野古墳	立岡町西潤野			凝灰岩	69	
196	矢苔石棺	宇土郡三角町太田尾・矢答				74	
197	磯山古墳群	波多・ 際崎・磯山	10以上		直刀, 内行 花文鏡, 筒 形銅器, 銅 鎌, 鑑	57, 58, 73	
198	際崎石棺	波多・ 際崎・磯山				57, 73	
199	重盛山石棺	波多・重盛山	2	砂岩		2, 73	
200	平松古墳	波多・平松	4		鉄片 土師片	2, 71	墳丘○
201	平松石棺	波多・平松	13		劍, 刀子, 鉄片, 小玉, 管玉, 貝輪	2, 71	墳丘○, 周辺よ り土師器片
202	越路古墳	波多・越路	3以上			2, 73	
203	金桁古墳	中村・前田	2	砂岩	劍, 直刀, 勾玉	2, 73, 59	

No.	石棺名	所在地	数	石材	副葬品	文献	備考
204	小鹿里石棺	新地・小鹿里				73	
205	要石棺群	大口・要	2	砂岩		2, 73	
206	大見觀音崎石棺群	三角町大口 不知町大見	11	砂岩 安山岩		73	
207	寺島古墳	三角町戸馳・寺島	5	砂岩	鉄劍	2, 73	
208	大崎古墳	戸馳・島	3	安山岩		2, 73	
209	西木浦古墳群	前越・ 西木の浦	3			73	
210	御船石棺群	里の浦・御船	2			73	
211	底江崎石棺	里の浦・底江	3	砂岩		73	移転
212	御領石棺	不知火町御領・ 御手洗			鹿角製刀子, 勾玉	60, 61	
213	十五社石棺	十五社				60	
214	弁天山石棺	御領出町 長崎弁天山	2			60	
215	八久保古墳	御領・ 八久保		板状砂岩	直刀	60	墳丘○
216	二本松石棺	御領・ 二本松				60	
217	東塩屋浦石棺	東塩屋浦		砂岩		60	墳丘○
218	於呂口東石棺	永尾・ 於呂口				60	
219	於呂口西石棺	永尾・ 於呂口				60	
220	キツネ塚古墳	永尾・ 西於呂口				60	
221	飛山石棺	八代郡宮原町		砂岩板石片			
222	室の山古墳	今・南		砂岩	鉄斧, 鎌, 錐, 銛, 劍, 刀子, 鉄鎌	67	墳丘○
223	産島石棺	八代市古閑浜町産島	2		冠, 劍, 鏡	62	
224	大島古墳	大島町前鼻			直刀	62	墳丘○
225	高島古墳	高島町・大島				62	墳丘○
226	用七古墳	長田町用七			刀子, 土師 培片	63	墳丘○
227	小鼠藏山石棺群	鼠藏町彌次			土師培	62, 63	墳丘○堅穴式石 室内
228	大鼠藏北東石棺	鼠藏町彌次				62, 64	
229	大鼠藏北西石棺	鼠藏町彌次			土師片	62, 64	墳丘○
230	大鼠藏南東石棺	鼠藏町彌次	8		刀子, 銅鈴, 櫛, 貝輪	74	
231	塩釜石棺	日奈久大坪町塩釜山				74	
232	太田古墳	芦北郡田浦町太田・太田	2			74	
233	セベット古墳	海浦・堂元	2(?)			74	
234	鬼塚古墳	海浦・堂元	2(?)			74	

Nd	古 墳 名	所 在 地	数	石 材	副 著 品	文 献	備 考
235	北園石棺	水俣市陳内町北園			剣, 鉄鎌, 刀子	74	
236	成合津古墳	天草郡大矢野町登立・ 成合津				74	墳丘○, 堅穴式 石室内
237	成合津石棺	登立・ 女鹿串				74	
238	千崎古墳群	維和・千崎	5		小玉, 刀子	2, 65, 66	棺外から剣
239	千崎住吉祠古墳	維和・千崎				65	
240	桐ノ木古墳	維和・ 桐の木				65	
241	浮牟田南古墳	維和・ 浮牟田				65	
242	仙十長瀬2号 古 墳	維和・仙十				65	
243	越路古墳	維和・東岸				2, 65	墳丘○
244	広浦古墳	天草郡大矢野町維和・ 広浦				67	
245	大鷺浦古墳	維和・ 北ヶ島				74	
246	モヘ山古墳	松島町永浦島				65	墳丘○
247	大戸鼻南石棺	阿村・ 大戸鼻岬				65	
248	大戸鼻南古墳	阿村・ 大戸鼻岬				2, 68	
249	新地石棺	有明町				65	
250	権六古墳	下津浦・権六				74	
251	宮崎石棺群	倉岳町棚底・宮崎	22	砂岩	鉄劍, 鉄 鎌, 土師器	74	棺外から鉄製釣 針
252	名桐石棺群	浦・名桐				65	
253	沖の瀬古墳群	栖本町児崎・沖の瀬				74	
254	尾串石棺群	本渡市下浦竹島	9(?)			74	
255	三角船員保険保 養所内石棺	宇土郡三角町際崎	1			73	
256	丸子島石棺群	片島	3		土師器	73	
257	大口地神社石棺	大口	1			73	
258	塚神社石棺	大田尾	1			73	
259	三角小学校石棺	本町	3以上			73	

## 箱式石棺参考文献

- 1 熊本県荒尾市教育委員会 『亀原古墳』 昭和54年
- 2 坂 本 經 堯 『肥後上代文化の研究』 昭和54年
- 3 坂 本 經 堯 『荒尾市野原古墳調査報告』 昭和28年
- 4 三 島 格 「荒尾市野原古墳群調査雑記」『熊本史学』38号 昭和27年
- 5 門 岡 久 「第3節 弥生文化の時代」『岱明地方史』 昭和44年
- 6 装飾古墳を守る会 『装飾古墳白書』 昭和53年
- 7 玉名高校考古学部 「台の島古墳調査記」『玉名高校考古学部報』8号 昭和39年
- 8 梅原末治・古賀徳義・下林繁夫 『熊本県史跡名勝天然記念物調査報告』第二冊 大正14年
- 9 玉名高校考古学部 「岡の箱式石棺」『玉名高校考古学部報』2号 昭和38年
- 10 原 口 長 之 「江田土喰箱式石棺調査報告」『石人』創刊号 昭和35年
- 11 乙 益 重 隆 「八代市大鼠藏山古墳 — 肥後に於ける箱式石棺内合葬の例について」『考古学雑誌』41巻4号 昭和31年
- 12 松 本 健 郎 「菊池川流域の考古学(1) — 玉名郡菊水町下津原上西原石棺」『熊本史学』第51号 昭和51年
- 13 隈 昭志・立山広吉 「熊本県山鹿市御園箱式石棺調査報告」『石人』6巻11号 昭和40年
- 14 山鹿高校社会部報 「御園石棺」『チブサン』No.2 昭和40年
- 15 松 本 健 郎 「城山の石棺群」『石人』No.139 昭和46年
- 16 鹿本高校社会部報 「西牧西棺」『チブサン』No.25 昭和47年
- 17 鹿本高校社会部報 「白石石棺群」『チブサン』No.13 昭和43年
- 18 徳 永 高 志編 『泗水町誌』昭和40年
- 19 国分直一・三島 格 「熊本県における考古学調査の概要」『九州考古学』25・26号 昭和40年
- 20 鹿本高校社会部報 「辻古墳発掘手記」『チブサン』No.3 昭和40年
- 21 鹿本高校社会部報 「方保田石棺調査報告」『チブサン』No.24 昭和47年
- 22 鹿本高校社会部報 「方保田2号石棺」『チブサン』No.27 昭和48年

- 23 隅 昭志・杉村彰一 「熊本県山鹿市小原竜宮遺跡調査報告」『九州考古学』28号  
昭和41年
- 24 鹿本高校社会部報 「小原竜宮遺跡」『チブサン』No.6 昭和41年
- 25 『鹿本町誌』
- 26 『菊鹿町文化財誌』
- 27 原 口 長 之 「珠文鏡を出した久保原石棺」『石人』1巻9号 昭和35年
- 28 鹿本高校社会部報 「チブサン口絵写真」『チブサン』No.14 昭和44年
- 29 鹿本高校社会部報 「宮原山ノ上石棺調査」『チブサン』No.12 昭和43年
- 30 鹿本高校社会部報 「山の上2号石棺」『チブサン』No.14 昭和44年
- 31 高 宮 衛 司 「田底の箱式石棺」『石人』1巻8号 昭和35年
- 32 熊本県『熊本県史』総説編 昭和40年
- 33 北條暉幸・松田愛人 「熊本県菊池郡西合志町迫原“ハヤマ塚石棺”出土の人骨について」『熊本医学会雑誌』44巻7号 昭和45年
- 34 鹿本高校社会部報 「高江石棺群」『チブサン』No.12 昭和43年
- 35 隅 昭志・杉村彰一 「破壊された横道石棺群」『熊本史学』38号 昭和46年
- 36 鹿本高校社会部報 「横道石棺」『チブサン』No.16 昭和44年
- 37 山西村郷土誌編纂委員会 『山西村記』昭和34年
- 38 阿蘇町教育委員会 『史料・阿蘇』昭和53年
- 39 熊本県教育委員会 『熊本県文化財調査報告』第46集 昭和52年
- 40 熊本県教育委員会 「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告書』第3集 昭和  
37年
- 41 後 藤 守 一 『漢式鏡』大正15年
- 42 中 村 徳五郎 「阿蘇中部旧跡及び古墳に就いて」『歴史地理』43巻6号 大  
正12年
- 43 清 野 謙 次 『日本旧石器時代人の研究』昭和3年
- 44 乙 益 重 隆 「広形銅戈を副葬した箱式石棺の例」『上代文化』35輯 昭和  
40年
- 45 熊本市教育委員会 『熊本市西部地区文化財調査報告書』昭和44年

- 46 熊本市教育委員会 『熊本市東部地区文化財調査報告書』昭和46年
- 47 熊本県教育委員会 「塚原（本文編・付論）」『熊本県文化財調査報告』第16集 昭和50年
- 48 松 本 雅 明編 『城南町史』昭和40年
- 49 鹿本高校社会部報 「山鹿市西牧石棺群」『チブサン』No.25 昭和47年
- 50 緒 方 勉 「熊本県嘉島村剣原出土箱式石棺——粘土枕二体合葬の例——」『熊本史学』35・36号 昭和50年
- 51 松本雅明・緒方 勉・佐藤伸二 「御船町城塚遺跡の調査」『熊本県文化財調査報告』第18集 昭和50年
- 52 高 木 正 文 「久保遺跡」『熊本県文化財調査報告』第18集 昭和50年
- 53 宇土半島研究会 『宇土半島の自然と文化』昭和50年
- 54 宇土市教育委員会 「宇土城跡」（西岡台）『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集 昭和52年
- 55 宇土高校社会部報 No.1 昭和42年
- 56 宇土市教育委員会 『宇土市史研究』昭和55年
- 57 坂 本 経 堯 「三角および周辺の古代文化」『三角町公民館報——龍灯——』創刊号～第3号 昭和30年
- 58 角 田 政 治 「三角町の古墳」『熊本県史蹟調査報告』第1回 大正7年
- 59 隈 昭志・松本健郎 「山鹿市方保田石棺調査報告」『チブサン』No.24 昭和47年
- 60 不知火町教育委員会 『不知火町史』昭和47年
- 61 吉 田 一 英 「御領、出町出土の弥生遺跡と箱式石棺」『熊本史学』26号 昭和38年
- 62 江 上 敏 勝 「熊本県八代地方に分布する古墳時代箱式石棺集成地名表」『夜豆志呂』27・28合併号 昭和47年
- 63 萩 田 田鶴男 『金剛の歴史』昭和34年
- 64 江 上 敏 勝 「古代芦北の国造と遺跡について」『夜豆志呂』4号 昭和42年
- 65 坂本経堯・坂本経昌 『天草の古代』昭和46年

- 66 玉名高校考古学部 「天草大矢野維和古墳群調査概要」『玉名高校考古学部報』
- 67 浜田耕作 「肥後国天草郡維和村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊 大正7年
- 68 浜田耕作 「天草郡阿村の古墳」『京都帝国大学文学部研究報告』第1冊 大正5年
- 69 宇土市教育委員会 「宇土半島基部古墳群」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第15集 昭和62年
- 70 熊本県教育委員会 「下山西遺跡」『熊本県埋蔵文化財調査報告』第88集 昭和62年
- 71 三角町教育委員会 「平松箱式石棺群」『三角町文化財調査報告』第3集 昭和59年
- 72 島津義昭 「阿蘇の古墳」『えとのす19』昭和57年
- 73 三角町教育委員会 「宇土半島古墳群分布調査報告II(郡浦・戸馳・三角・大岳地区)」『三角町文化財調査報告』第6集 昭和61年
- 74 文化庁 『全国遺跡地図 熊本県』昭和56年

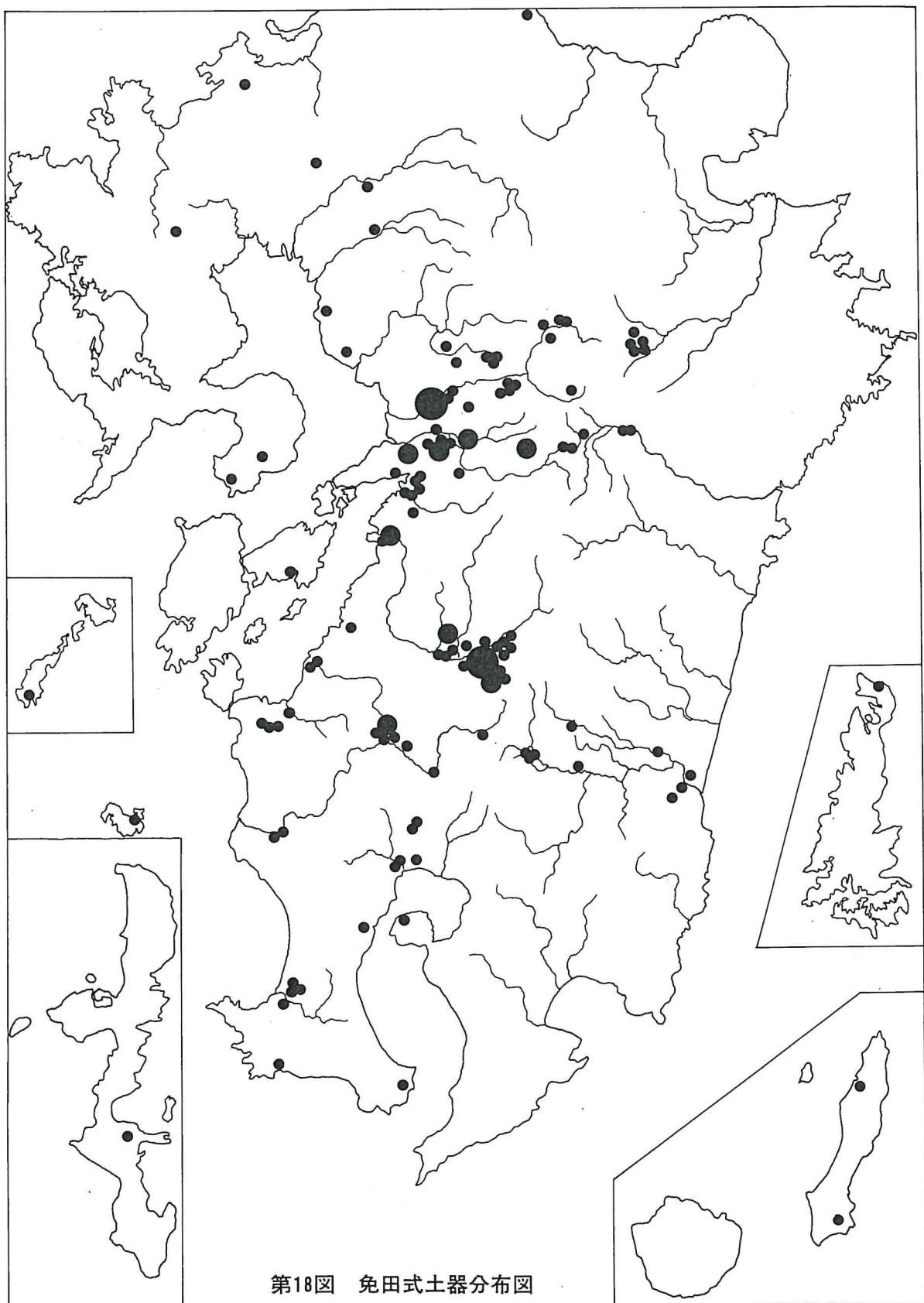
## 付論 4 免田式土器分布一覧表

免田式土器は九州内で広い分布を見せており、伴出する甕から弥生時代後期から古墳時代初期にかけて存続したと考えられる。

現在、この土器は168遺跡から発見されている。分布の北限は福岡県の下稗田遺跡、三雲遺跡で、南限は沖縄県の宇堅貝塚であり、この土器はほぼ九州全域に広がっている。免田式土器を出土する遺跡の分布は熊本県から鹿児島県南部にかけて特に目立ち、東九州ではほとんど発見されていない。熊本県と鹿児島県にみられる分布の中心は熊本市とその南の緑川流域、球磨川上流域の人吉盆地及び川内川中流域の大口盆地である。河川に沿って遺跡が分布し、あるいは集中している傾向が見られる。この傾向は沿岸部よりも内陸部、特に山岳部で顕著である。おそらく河川が交通の手段として利用されていた結果であると思われる。一方、分布が沿岸部に点在し、海を隔てた島でも発見されているのは、海上交通によるものと思われる。

また、この土器は主に住居址と埋葬址から出土しており、特に住居址からの出土が目立つ。埋葬址については南に下ると板石積石室墓からの出土が見られる点に注目される。これらは、免田式土器の性格を検討する材料になると思われる。

最後に、免田式土器分布一覧表作成に協力して下さった西住欣一郎、網田龍生両氏に感謝いたします。(村上)



第18図 免田式土器分布図

免田式土器分布一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別・その他	文献番号
福岡県				
1	三雲	糸島郡前原町三雲番上地区	住居址	1
2	下稗田	行橋市下稗田	住居址床面	2
3	安国寺	久留米市山川町池廻	住居址	3
4	亀ノ甲	八女市亀甲	集落跡	6
5	甘木山	大牟田市甘木甘木山		4
佐賀県				
6	二塚山	三養基郡上峰村堤五本谷	祭祀遺構	5
7	みやこ	武雄市橋町綿の木		6
長崎県				
8	今福	南高来郡北有馬町今福		7
9	永瀬貝塚	〃 加津佐町水月永瀬		8
熊本県				
10	今泉西	玉名郡岱明町上今泉	散布地	6
11	木瀬	菊池郡合志町豊岡	集落跡	9、10
12	福本	〃 泗水町福本八幡北側	散布地	9、10
13	日向	〃 大津町矢護川日向	住居址	11
14	西弥護免	〃 〃 西弥護免	住居址	12
15	宝満鶴	〃 〃 岩坂宝満鶴	散布地	6
16	大野	阿蘇郡蘇陽町大野	〃	13
17	下鶴	〃 白水村吉田下鶴	〃	13
18	田迎	〃 西原村小森田迎	〃	13
19	がくが峰	〃 〃 〃 がくが峰	〃	13
20	ならぎ	〃 〃 宮山ならぎ	〃	13
21	大切畠	〃 〃 大切畠	〃	14
22	田子山	〃 阿蘇町西湯浦北田子山	散布地	13、15
23	向ノ平	〃 〃 小園向ノ平	〃	13
24	宮山	〃 〃 的石	住居址	13、16
25	下山西	〃 〃 乙姫	住居址、石棺周辺	69
26	石原亀甲	熊本市石原町亀甲	住居址	13
27	平田	〃 平田町	散布地	17
28	日向崎	〃 島崎町石神原	集落跡	9、18
29	千原台	〃 〃 千原台		70
30	二本木湯原	〃 二本木町湯原	散布地	10
31	二本木石塘	〃 〃		70
32	戸坂	〃 戸坂	住居址	70
33	弓削中原	〃 弓削町中原	生活跡	70
34	長嶺	〃 長嶺町	住居址	70
35	下南部	〃 下南部	生活跡	70
36	馬ノ水	〃 花園町馬ノ水		70
37	神水	〃 神水	住居址	70
38	二子塚	上益城郡嘉島町北甘木二子塚	溝、住居址	13

番号	遺跡名	所在地	種別・その他	文献番号
39	十三本松	上益城郡矢部町大野十三本松	散布地	13
40	上原	〃 〃 蘆田上原	〃	13
41	男成	〃 〃 男成		13、19、20
42	稻生原	〃 〃 稲生原	土壤	19、20
43	長田	〃 〃 長田	散布地	13
44	市ノ原	〃 清和村市ノ原		13
45	朝日小	〃 〃 法華寺		13
46	秋永	〃 益城町秋永	住居跡	19
47	麻生原	〃 甲佐町麻生原		19、21
48	下山神	〃 御船町御船下山神	墓地	17
49	山林神	〃 〃 山林神		18
50	南下原	〃 〃 南下原		22
51	上山神	〃 〃 御船上山神	集落跡	13、23、24
52	南原	〃 〃 南原	墳墓	17
53	安幕	下益城郡城南町隈庄下宮地安幕		9、10、18、25
54	東天神原	〃 〃 天神原	住居跡	25
55	西天神原	〃 〃 板野西天神原	散布地	26
56	新御堂	〃 〃 宮地新御堂	〃	25
57	一丁畠	〃 〃 一丁畠	〃	18、25
58	前無田	〃 〃 前無田	〃	27
59	赤見前田	〃 〃 赤見前田		27
60	迎原	〃 〃 迎原	散布地	18
61	高倉	〃 小川町小野部田高倉	生活跡	24
62	立田	〃 〃 〃 立田		24
63	大坪貝塚	〃 〃 南小野大坪	人骨共伴	71
64	宇土城三ノ丸	宇土市神馬町古城	集落跡	67
65	城山	〃 古麓町城山		28
66	下松山	〃 下松山町		28、29
67	田平	〃 上網田町田平		4
68	境目	宇土市	包含層	29
69	出町	宇土郡不知火町御領出町	貝塚	30
70	大野貝塚	八代郡竜北町大野砦原	〃	6
71	法導寺	〃 〃 法導寺	包含層	31
72	小越堤	〃 宮原町小越堤		6
73	境	八代市岡町小路境	散布地	32
74	境古墳	〃 〃 〃 〃	古墳	32
75	小路	〃 〃 〃	散布地	6
76	谷川	〃 〃 谷川	〃	6
77	産島貝塚	〃 古閑浜町産島	貝塚	33
78	鐘樓堂貝塚	〃 井上町鐘樓堂	〃	33、34
79	宮浦	芦北郡芦北町宮浦横手	地下式板石積石室墓	6
80	初野	水俣市初野川内貝塚	貝塚	35
81	北園	〃 上野	地下式板石積石室墓	71

番号	遺跡名	所在地	種別・その他	文献番号
82	小園	人吉市下原田町小園	地下式板石積石室墓	36、37
83	荒毛	〃 〃 荒毛	〃	36、37
84	鼓ヶ峰	〃 頤成寺町鼓ヶ峰	包含層	68
85	農芸学院	球磨郡錦町木上	地下式板石積石室墓	38
86	夏女	〃 〃 〃	住居址	71
87	立野	〃 〃 〃 雀迫	散布地	38
88	松木園	〃 〃 〃 松木園	〃	38
89	四ツ塚	〃 〃 〃 四ツ塚	〃	38
90	亀塚	〃 〃 西亀塚	〃	38
91	無田原	〃 〃 〃 無田原	〃	38
92	三石	〃 〃 柳瀬三石	〃	38
93	覚井	〃 〃 一武覚井	〃	38
94	下原	〃 〃 〃 下原	〃	38
95	才柿	〃 〃 〃 才柿	〃	38
96	本目	〃 免田町下乙本目	地下式板石積石室墓	9、18、38
97	市房隠	〃 〃 吉井市房隠	箱式石棺	18、38
98	才園	〃 〃 才園	散布地	38
99	上築地	〃 〃 築地観権	〃	38
100	塚脇	〃 上村上塚脇	〃	38
101	国貞	〃 〃 〃 国貞		38
102	永山	〃 〃 〃 永山	〃	38
103	桜木	〃 〃 〃 桜木	〃	38
104	上秋時	〃 〃 〃 上秋時	〃	38
105	脇山道	〃 〃 〃 脇山道	〃	38
106	金山	〃 〃 皆越金山	〃	38
107	大久保	〃 多良木町黒肥地大久保 槍掛松	地下式板石積石室墓	38
108	新深田	〃 深田村新深田	〃 箱式石棺	71
109	合戦峰	〃 山江村合戦峰	散布地	38
110	大丸・藤ノ迫	〃 〃 山田藤ノ迫	住居址・土坑	66
111	高城跡	〃 〃 〃 城・本城	攢乱層	71
112	城・馬場	〃 〃 〃 〃	〃	71
113	小園	〃 相良村深水小園	住居址	71
114	吉の尾	〃		71
115	宮崎	天草郡倉岳町棚底	石棺墓	本文参照
大分県				
116	政所西	直入郡萩町政所	住居址	13
117	古賀	〃 〃 藤渡古賀	〃	39
118	蜘蛛手	〃 〃 桑木蜘蛛手		6
119	谷尻原	〃 〃 馬場谷尻原		6
120	石井入口	竹田市管生石井入口	住居址	13
宮崎県				
121	薄糸平	西臼杵郡高千穂町田原薄糸平		15
122	柚木野	〃 〃 上野柚木野		40

番号	遺跡名	所在地	種別・その他	文献番号
123	黒迫	宮崎市黒迫		40
124	中岡	〃 北川内町中岡	土器焼成坑	41
125	加納	宮崎郡清武町加納		40
126	六野原	東諸県郡国富町八代北俣	住居址	40
127	須木	西諸県郡須木村		40
128	大萩	〃 野尻町三ヶ野山	土壙墓	42
129	細野	小林市細野刈目		40
130	永田平	〃 永田平		40
131	正覚原	〃 真方正覚原		40
132	灰塚	えびの市西長江灰塚		43

鹿児島

133	武	鹿児島郡桜島町武榎川		35
134	不動寺	鹿児島市下福元町不動寺	集落跡	44
135	成川	揖宿郡山川町成川	墓地	45
136	松ノ尾	枕崎市汐見町松ノ尾	〃	46
137	上加世田	加世田市川畠	散布地	6
138	天神原	日置郡金峰町宮崎天神原	集落跡	6
139	松木薗	〃 〃 尾下松木薗	〃	6
140	新山	〃 〃 阿多新山		6
141	七ツ迫	川内市小倉町七ツ迫		35
142	外川江	〃 上川内町	散布地	47
143	大原宮園	薩摩郡下甑村手打大原宮薗	集落跡	48
144	里	〃 里村里	墓地	49
145	中町馬場	〃 〃 村西中町馬場	包含層	65
146	木牟礼域	出水郡高尾野町木牟礼		50
147	堂前	〃 〃 柴引	墓地	51
148	高松	〃 〃 下高尾野高松		52
149	溝下	出水市溝下	墓地	53
150	里町	大口市里町	集落跡	54
151	忠元神社付近	〃 原田忠元丘	墓地	55. 56
152	諏訪野	〃 〃 二ノ山	〃	35
153	手向山	〃 鳥巣手向山		35
154	大住	〃 宮人大住	墓地	57
155	浜場	〃 下殿高津原浜場		54. 55
156	ヒヨク田ノ上	〃 〃 〃 ヒヨク田ノ上		54
157	焼山	〃 〃 焼山	墓地	57
158	前畑	伊佐郡菱刈町田中前畑	〃	58
159	北方	姶良郡栗野町北方		35
160	石峰	〃 溝辺町麓石峰	集落跡	59
161	十三塚原	〃 〃 空港敷地内	〃	60
162	萩原	〃 姶良町平松萩原	〃	61
163	保養院	〃 〃 〃 堅野	〃	35

番号	遺跡名	所在地	種別・その他	文献番号
164	黒川鼻	姶良郡加治木町黒川鼻		35
165	長谷	熊毛郡南種子町長谷		62
166	納曾	西之表市西之表納曾		72
167	第2アヤマル	大島郡笠利町須野	散布地	63
沖縄県				
168	宇堅貝塚	具志川市宇堅岩地原	貝塚	64

### 参考文献

- 1 福岡県教育委員会 『三雲遺跡』 昭和55年
- 2 行橋市教育委員会 『下稗田遺跡』 昭和60年
- 3 福岡県教育委員会 『福岡県八女市室岡所在遺跡群の調査』 昭和52年
- 4 宇土市教育委員会 『田平遺跡』 昭和56年
- 5 佐賀県教育委員会 『二塚山』 昭和54年
- 6 高千穂シンポジウム実行委員会 『海と里と山の考古学』 昭和58年
- 7 長崎県教育委員会 『今福遺跡』 昭和59年
- 8 百人委員会 『口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告』 昭和50年
- 9 坂本経堯・小林行雄 「九州弥生式土器の一様式」(『考古学』3巻2号) 昭和7年
- 10 小林久雄 「肥後下益城郡隈庄出土弥生式土器」(『考古学』3巻1号) 昭和7年
- 11 九州電力株式会社日向遺跡調査団 『矢護川日向遺跡調査報告』 昭和55年
- 12 阿蘇実験考古学研究所 『西弥護免遺跡調査概報』 昭和55年
- 13 島津義昭 「山の考古学」(『国分直一博士古稀記念論集 日本民族文化とその周辺 考古編』) 昭和55年
- 14 熊本大学考古学研究室 『桑鶴土橋遺跡(2)』 昭和54年
- 15 高千穂町教育委員会 『薄糸平遺跡』 昭和53年
- 16 湯山シンポジウム実行委員会 『阿蘇山の考古学』 昭和57年
- 17 緒方勉 「中九州に於ける弥生後期土器について」(『熊本史学』35・36号) 昭和45年
- 18 乙益重隆 『肥後上代文化史』 昭和29年

- 19 熊本日日新聞社 『熊本の上代遺跡、熊本の風土とこころ』第二集 昭和55年
- 20 坂 本 常 人 『矢部の郷』昭和55年
- 21 佐 藤 伸 二 「誇り高き古墳文化」(『新熊本の歴史古代(下)』) 昭和54年
- 22 熊本市立熊本博物館 『九州古代のまつり——出土品にみる人びとのいのり——』  
昭和57年
- 23 緒 方 勉 「熊本県上益城郡御船町大字御船原における遺跡と出土遺物」  
(『熊本史学』24号) 昭和37年
- 24 佐 藤 伸 二 「中九州に於ける弥生終末期土器の諸問題」(『熊本史学』35・  
36号) 昭和45年
- 25 松 本 雅 明 『城南町史』昭和40年
- 26 熊本県教育委員会 『益城郡衙—推定地の発掘調査』昭和56年
- 27 熊本県教育委員会 『赤見・前田遺跡』昭和56年
- 28 富 横 卯三郎 「周辺遺跡からみた西岡台」(『宇土城跡(西岡台)』)昭和52年
- 29 宇土市教育委員会 『宇土市の文化財』III 昭和52年
- 30 古 田 一 英 「熊本県不知火町出町の弥生遺跡及び箱式石棺」(『熊本史学』  
26号) 昭和38年
- 31 藤 坂 正 人 「八代郡竜北町法導寺から出た弥生式土器について」(『夜豆志  
呂』49号) 昭和53年
- 32 熊本県教育委員会 『境古墳群・境遺跡』昭和55年
- 33 江 上 敏 勝 「熊本県八代地方に分布する貝塚地名表(2)」(『夜豆志呂』19・  
20号) 昭和46年
- 34 江 上 敏 勝 「熊本県八代市井上町鐘楼堂貝塚調査概報」(『夜豆志呂』34号)  
昭和49年
- 35 寺 師 見 国 「水俣市初野貝塚、附九州における重弧文土器の波及につい  
て」(『鹿児島県考古学会紀要』第3号) 昭和28年
- 36 笠 置 英 行 『人吉市荒毛遺跡調査報告』昭和41年
- 37 人吉市教育委員会 『人吉市史』第1巻 昭和46年
- 38 高 田 素 次 『球磨上代文化資料集成』昭和13年

- 39 萩町教育委員会 『萩台地の遺跡』 昭和55年
- 40 橋渡正男・瀬之口傳九郎 「日向の重弧文土器」(『古代文化』14巻10号) 昭和18年
- 41 宮崎市教育委員会 『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書 I [江南・大淀川西部地区]』 昭和59年
- 42 宮崎市教育委員会 『大萩遺跡(1)』 昭和49年
- 43 宮崎市教育委員会 『灰塚遺跡』 昭和48年
- 44 山 崎 五十磨 「弥生式土器遺跡と墳墓との関係」(『考古学雑誌』10巻1号) 大正8年
- 45 文化庁 『成川遺跡』 昭和48年
- 46 枕崎市教育委員会 『松之尾遺跡』 昭和56年
- 47 鹿児島県教育委員会 『外川江遺跡』 昭和58年
- 48 下甑村教育委員会 『大原・宮園遺跡』 昭和49年
- 49 上 村 俊 雄他 「上甑島里村の考古学的調査」(『鹿児島考古』17号) 昭和58年
- 50 吉 留 秀 敏 「木牟礼城遺跡」(『もぐら』10号) 昭和50年
- 51 池 水 寛 治 『鹿児島県堂前遺跡の調査概要』 昭和48年
- 52 鹿児島県教育委員会 『放光寺遺跡』 昭和51年
- 53 池水寛治・牛ノ浜修・長野真一 「鹿児島出水市溝下古墳群」(『鹿児島考古』第5号) 昭和46年
- 54 木 村 幹 夫 「南九州に於ける有文弥生式土器の一形式」(『史觀』第7冊) 昭和9年
- 55 木 村 幹 夫 「鹿児島県大口盆地の遺跡」(『考古学雑誌』第22巻10号) 昭和7年
- 56 大 脇 直 泰 「薩摩国大口市忠元神社裏遺跡」(『若木考古』42号) 昭和31年
- 57 寺 師 見 国 『鹿児島県大口市大住焼山石室古墳群』 昭和34年
- 58 菱刈町教育委員会 『前畠遺跡』 昭和59年
- 59 鹿児島県教育委員会 『石峰遺跡』 昭和55年
- 60 林 敬二郎 『姶良郡溝辺町大型空港建設地内における埋蔵文化財発掘調査報告書』 昭和46年

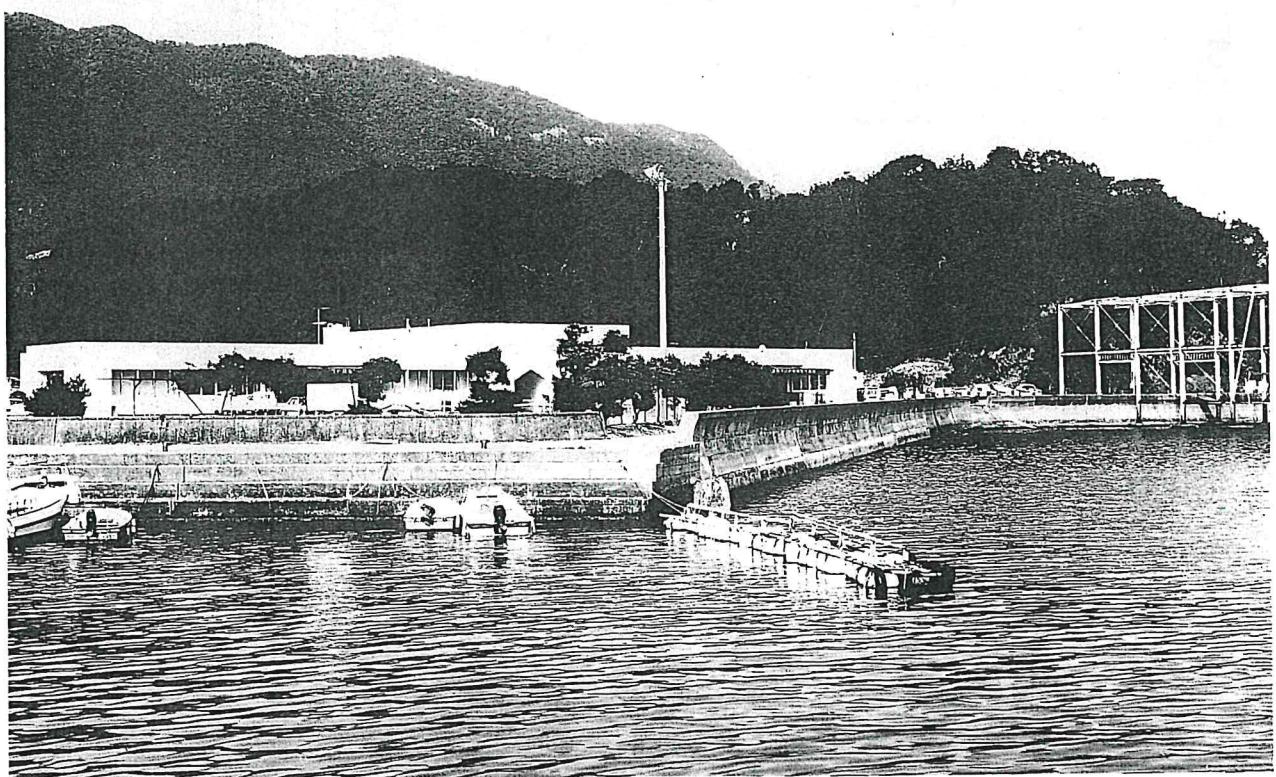
- 61 姶良町教育委員会 『萩原遺跡』 昭和53年
- 62 旭 慶 男 「種子島における弥生式土器」(鹿児島大学考古学研究紀要)  
第1号) 昭和50年
- 63 笠利町教育委員会 『第2アヤマル遺跡』 昭和58年
- 64 沖縄県具志川市教育委員会 『宇堅貝塚群・アカジャンガ貝塚発掘調査報告』 昭和55年
- 65 里村教育委員会 『中町馬場遺跡』 昭和60年
- 66 熊本県教育委員会 『大丸・藤ノ迫遺跡』 昭和61年
- 67 宇土城三ノ丸跡復活調査団 『宇土城三ノ丸跡』 昭和57年
- 68 熊本県教育委員会 『鼓ヶ峰遺跡』 昭和63年
- 69 熊本県教育委員会 『下山西遺跡』 昭和62年
- 70 細田龍生氏教示
- 71 西住欣一郎氏教示
- 72 西之表市教育委員会にて実見



図 版

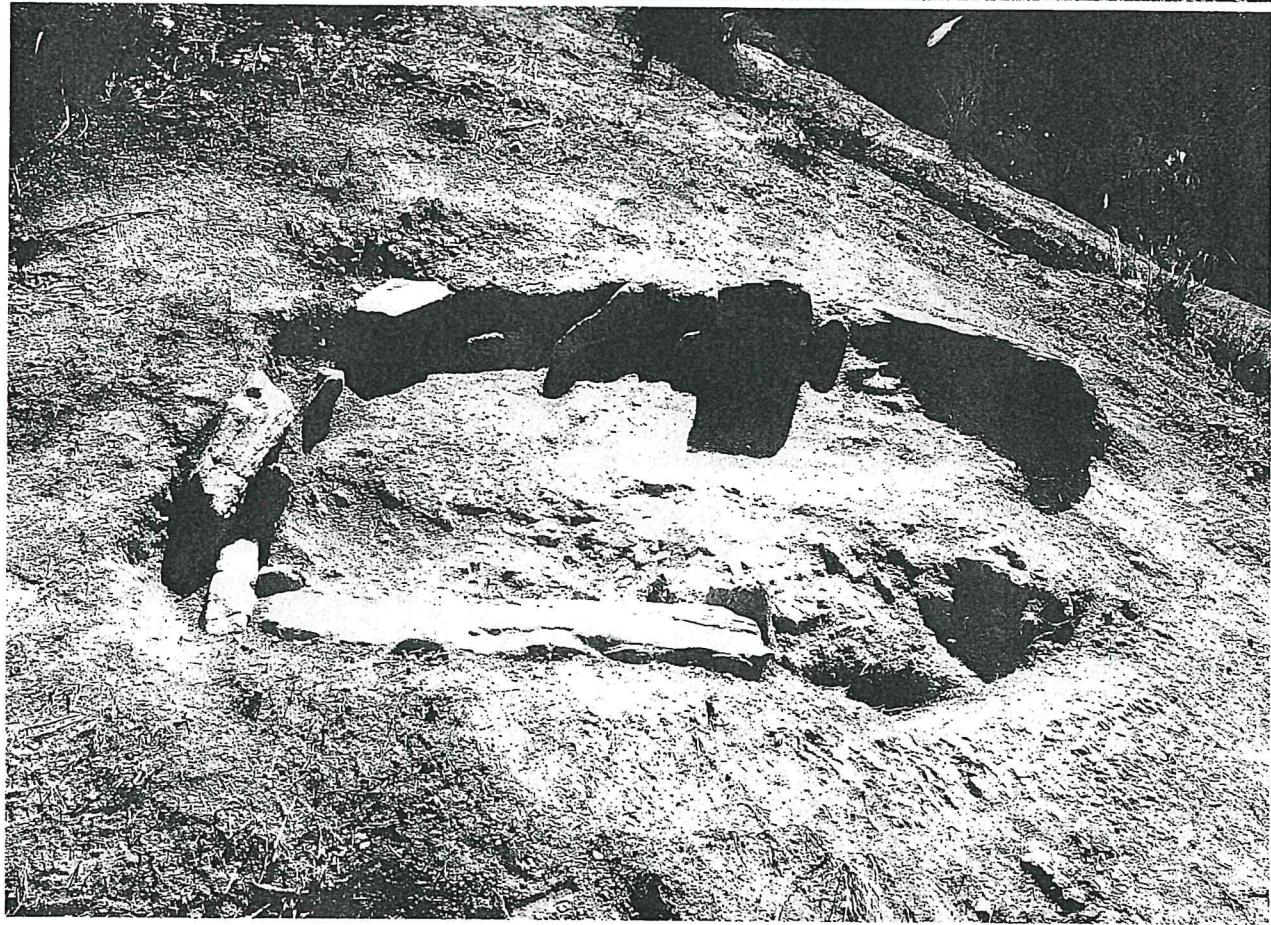
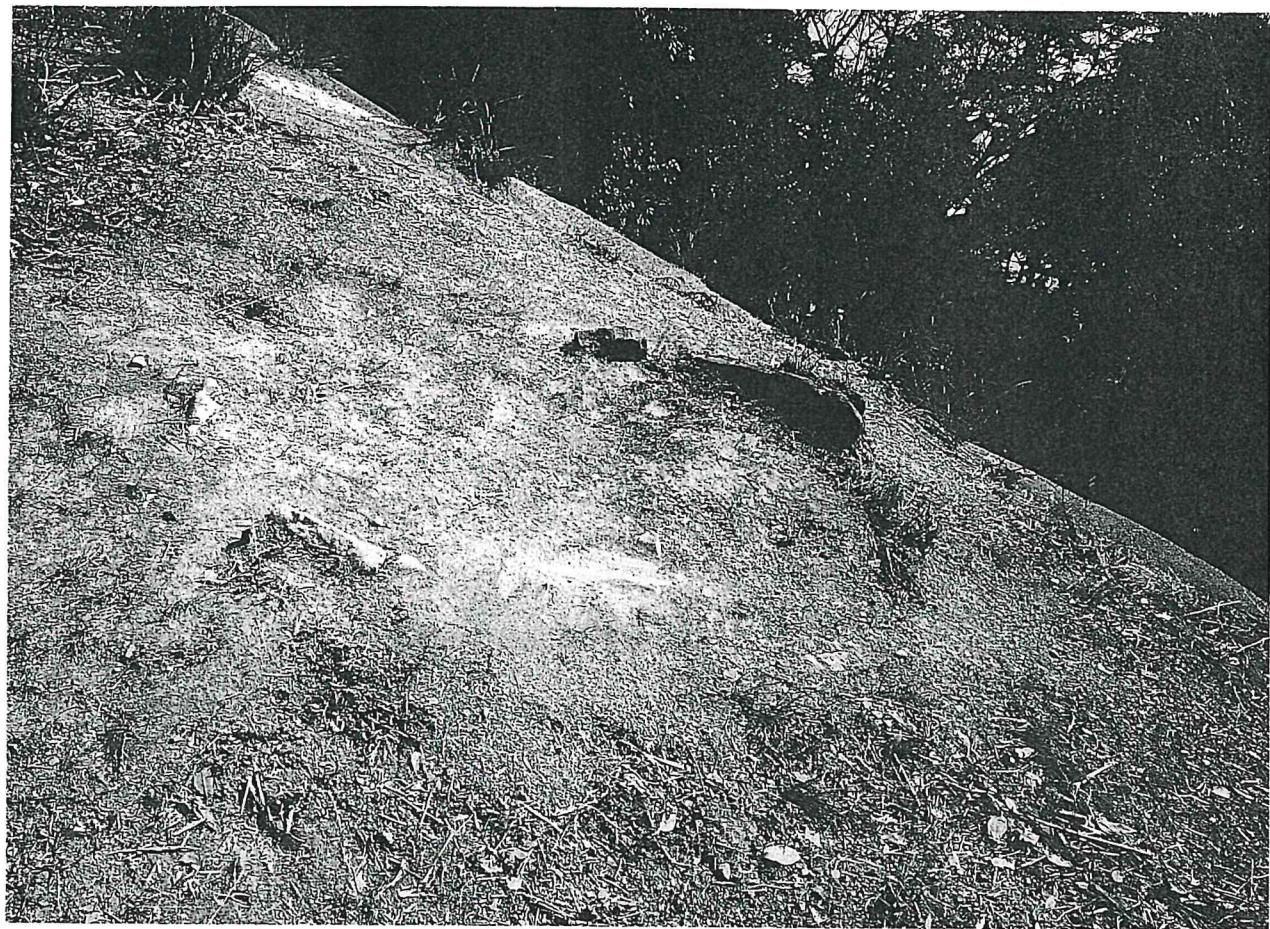
PLATES





上：宮崎石棺墓群遠景（北西より） 下：同近景（南より）

図版2



上：1号石棺現状（北西より） 下：同 挖り上げ後（北西より）



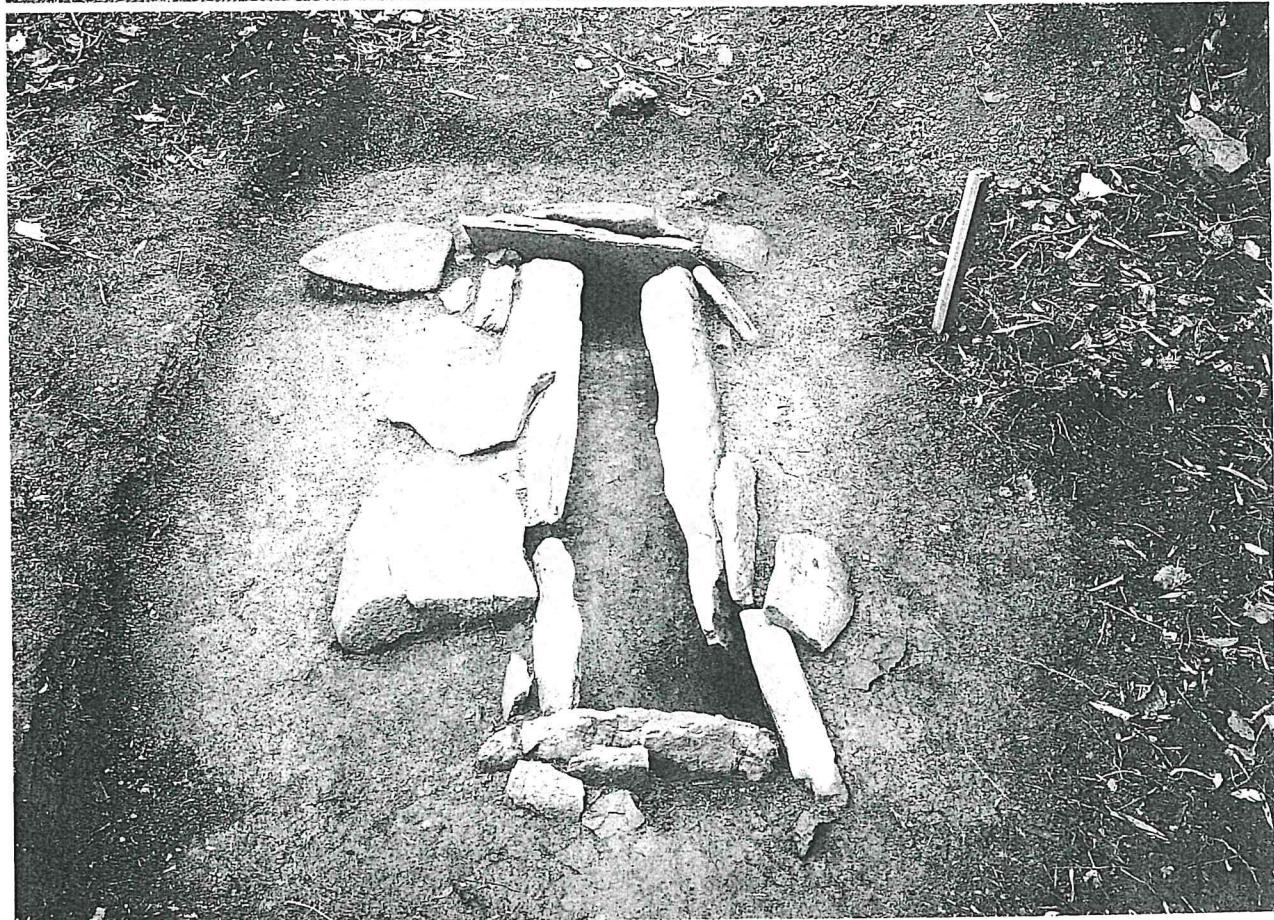
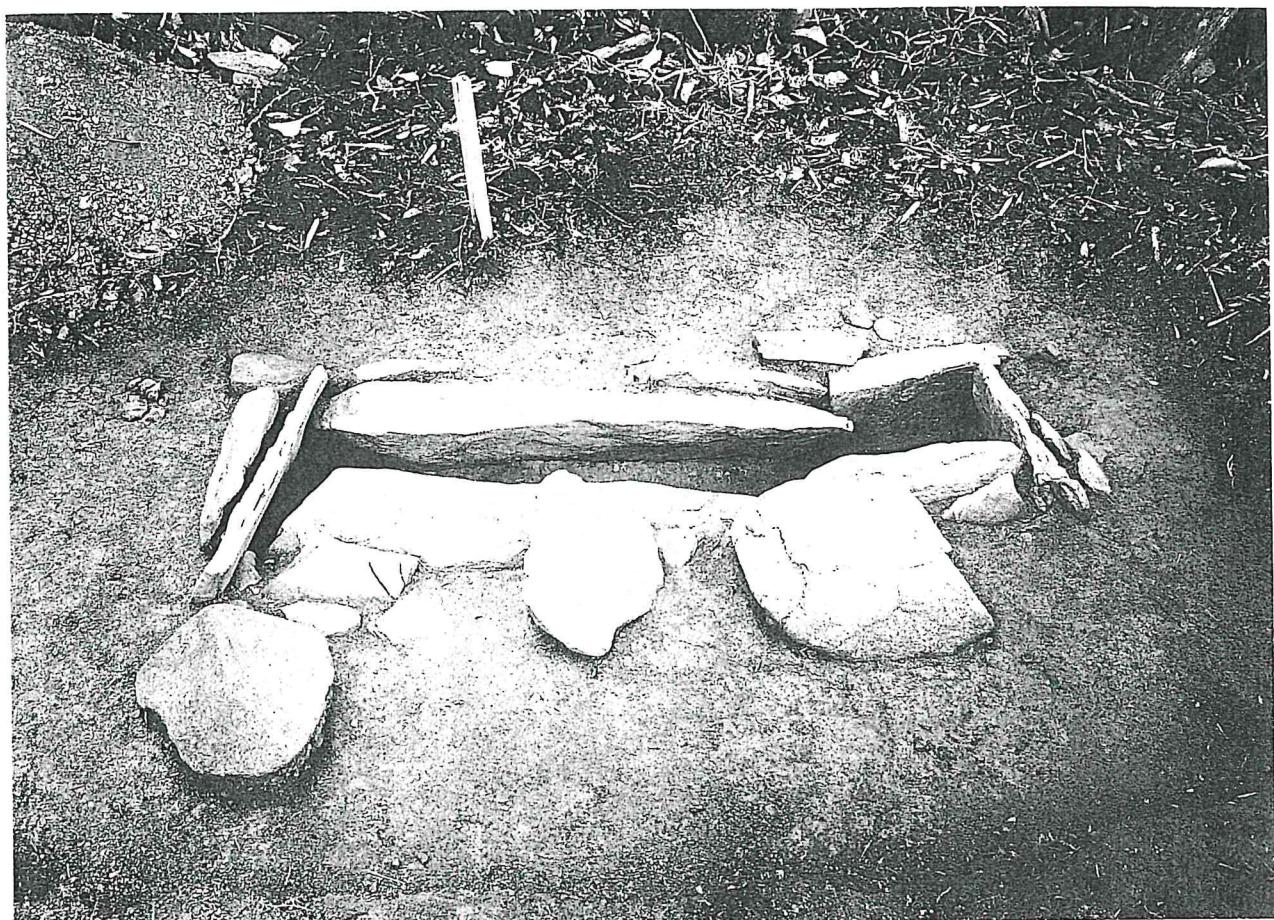
上：7号石棺蓋石現状（南より） 下：同 撤去後

図版4



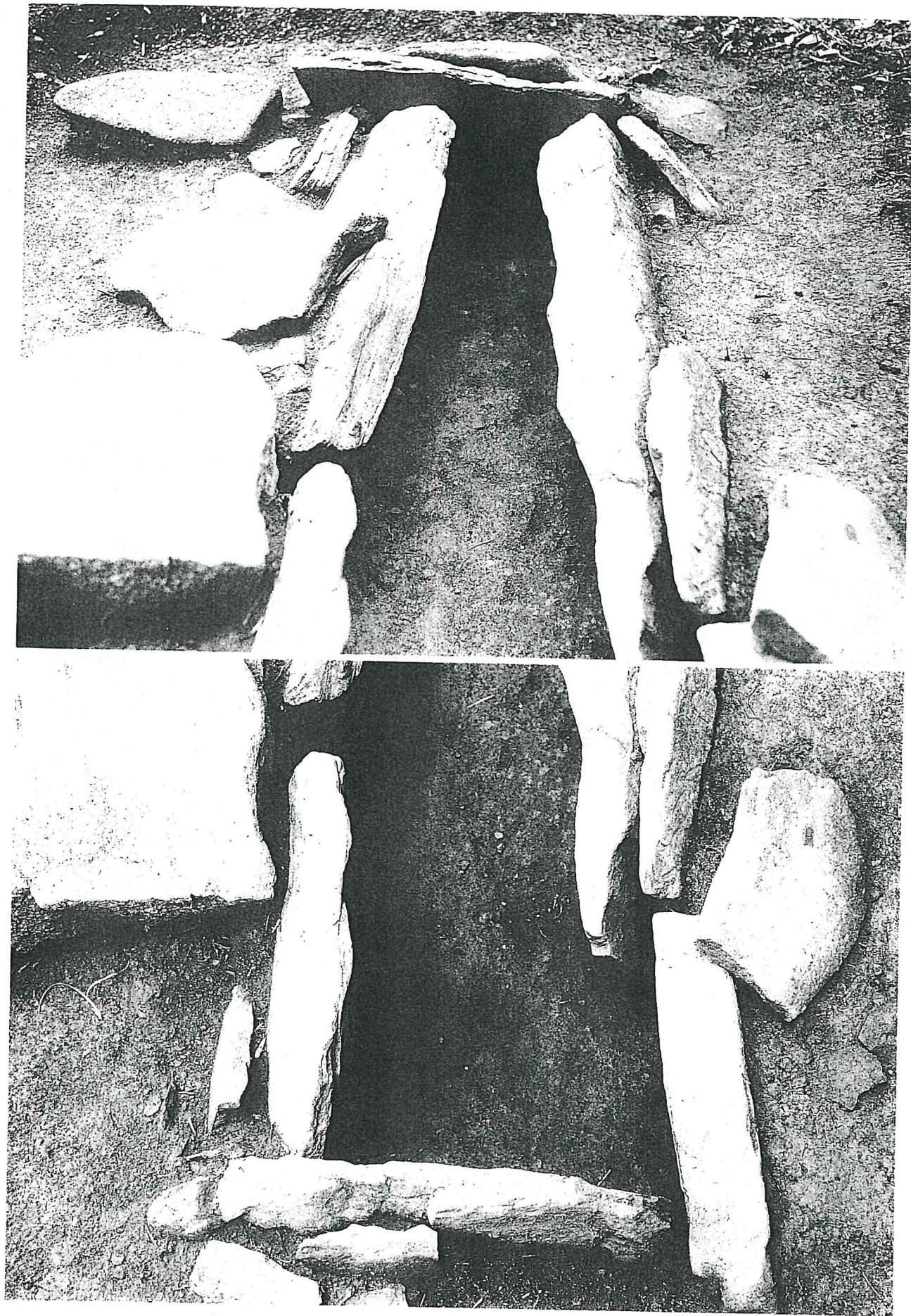
上：7号石棺現状（南より） 下：同 鉄製釣針出土状況

図版5



上：7号石棺 掘り上げ後（南より） 下：同（東より）

図版6



上：7号石棺 掘り上げ後（東より） 下：同（東より）

図版7



上：11号石棺 現状（東より） 下：同 遺物出土状況（東より）

図版8

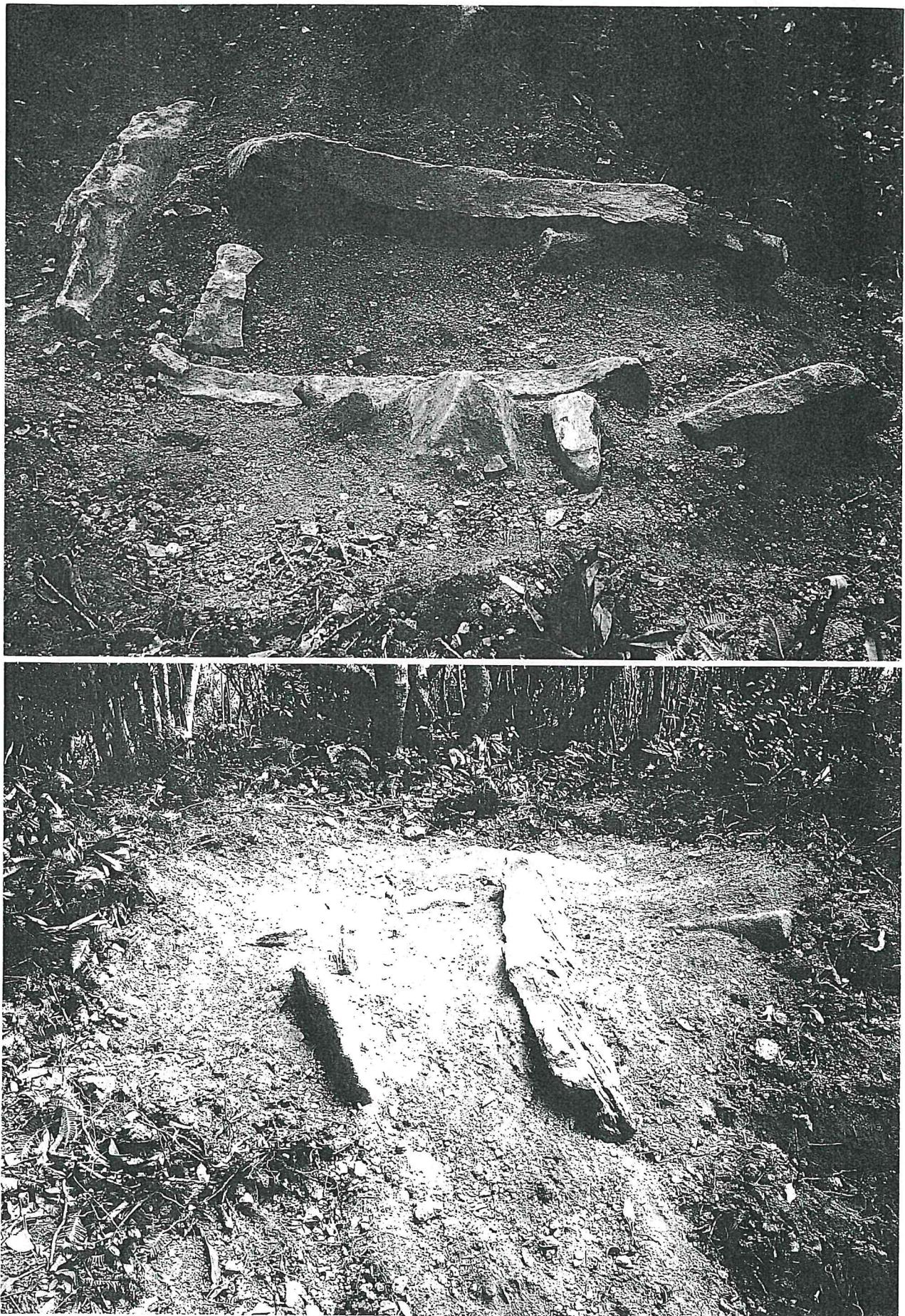


上：11号石棺 遺物出土状況 下：同



上：11号石棺 掘り上げ後（東より） 下：同（北より）

図版10

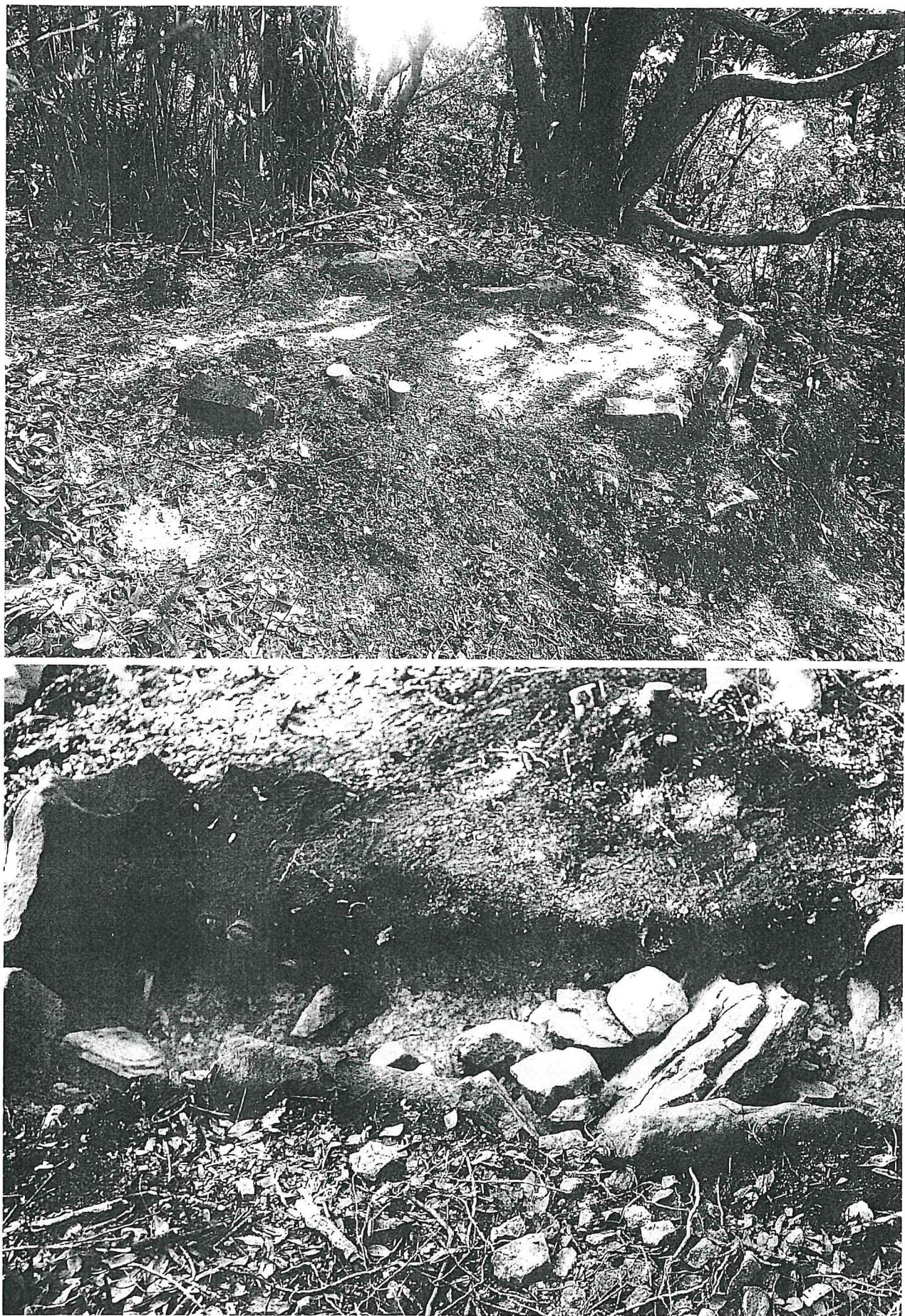


上：16号石棺 現状（北より） 下：同（西より）

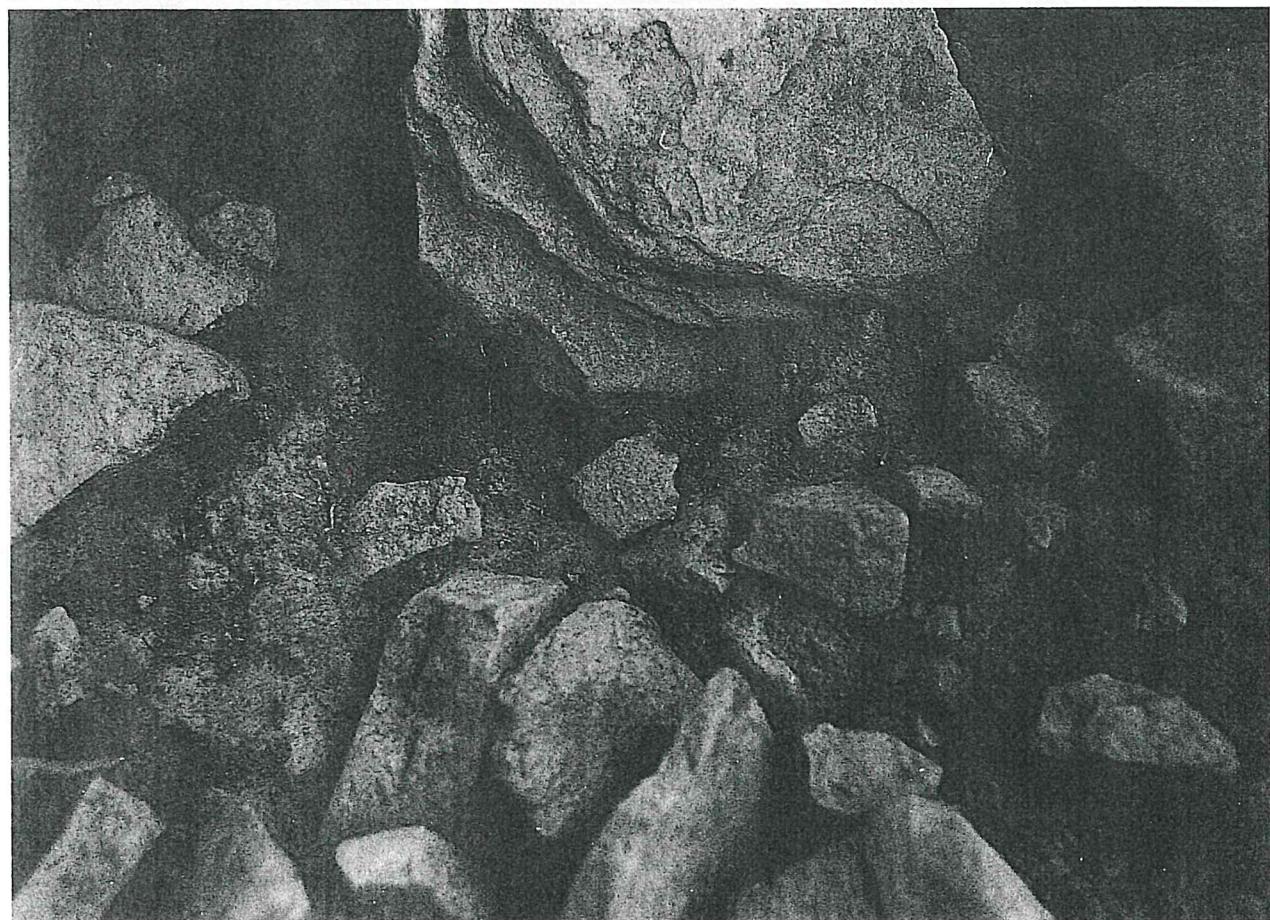
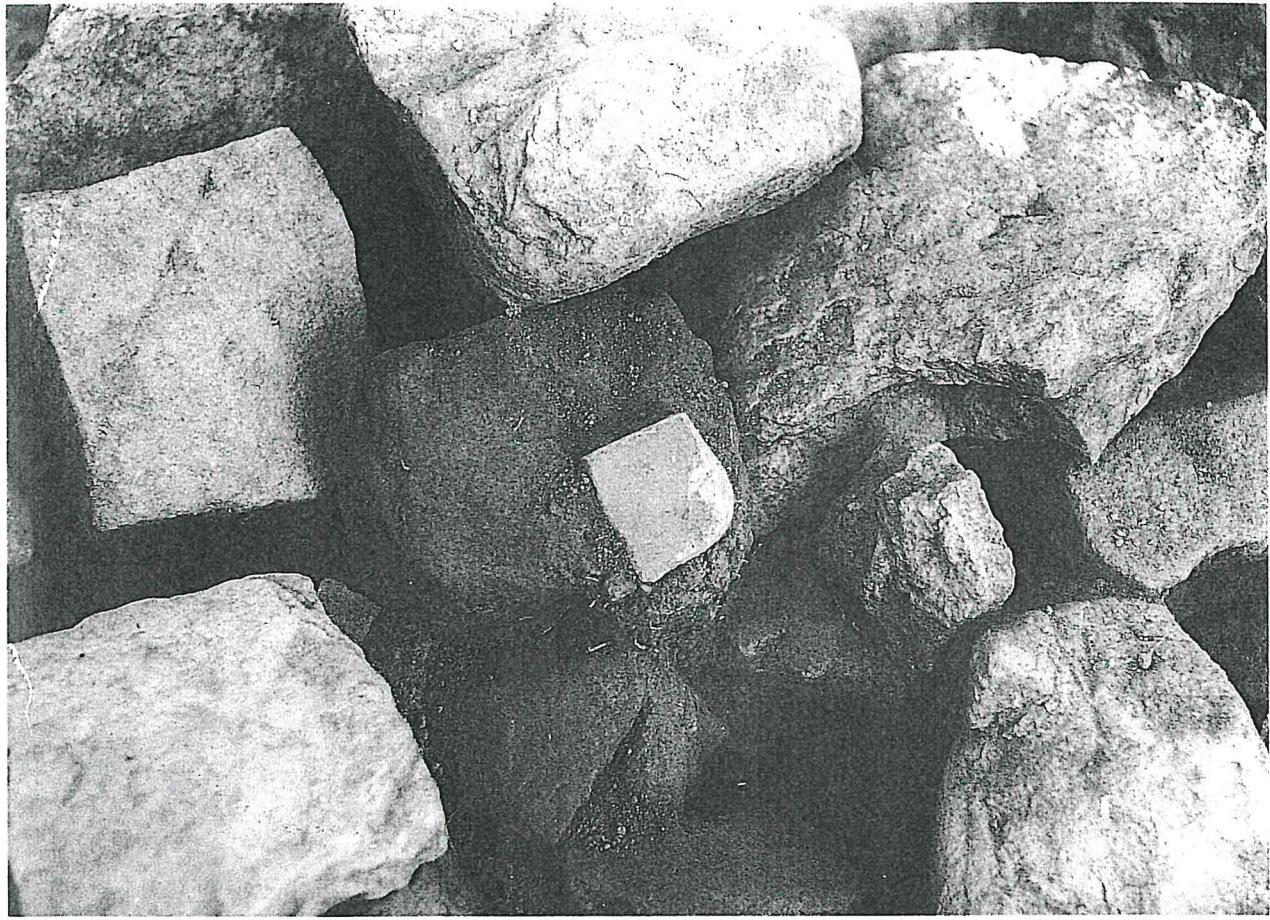


上：16号石棺 排土後（北より） 下：同（西より）

図版12



上：20号石棺 現状（北より） 下：同 半截状況（南より）



上：20号石棺 遺物出土状況 下：同

図版14

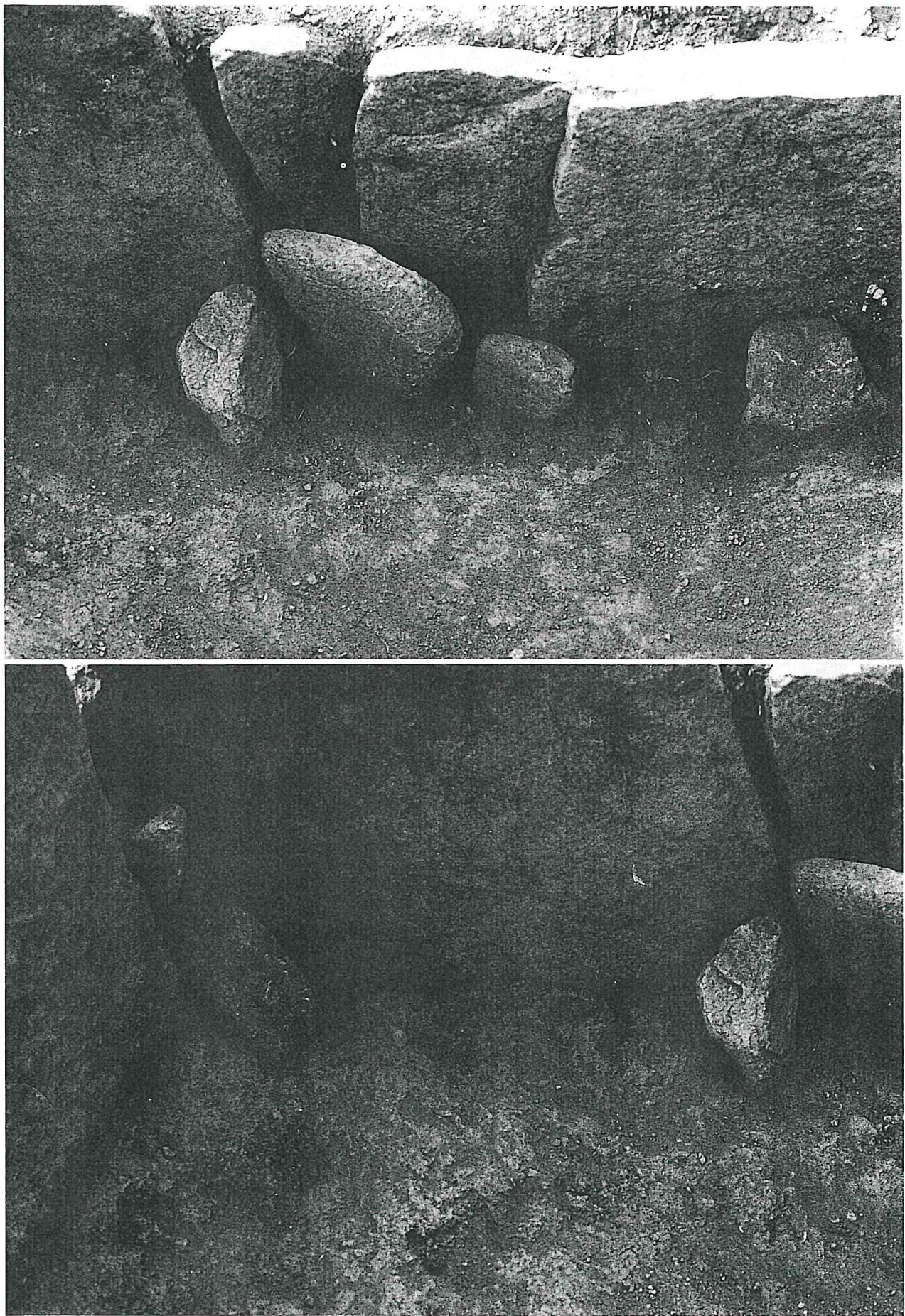


上：20号石棺 排土後（北より） 下：同（東より）

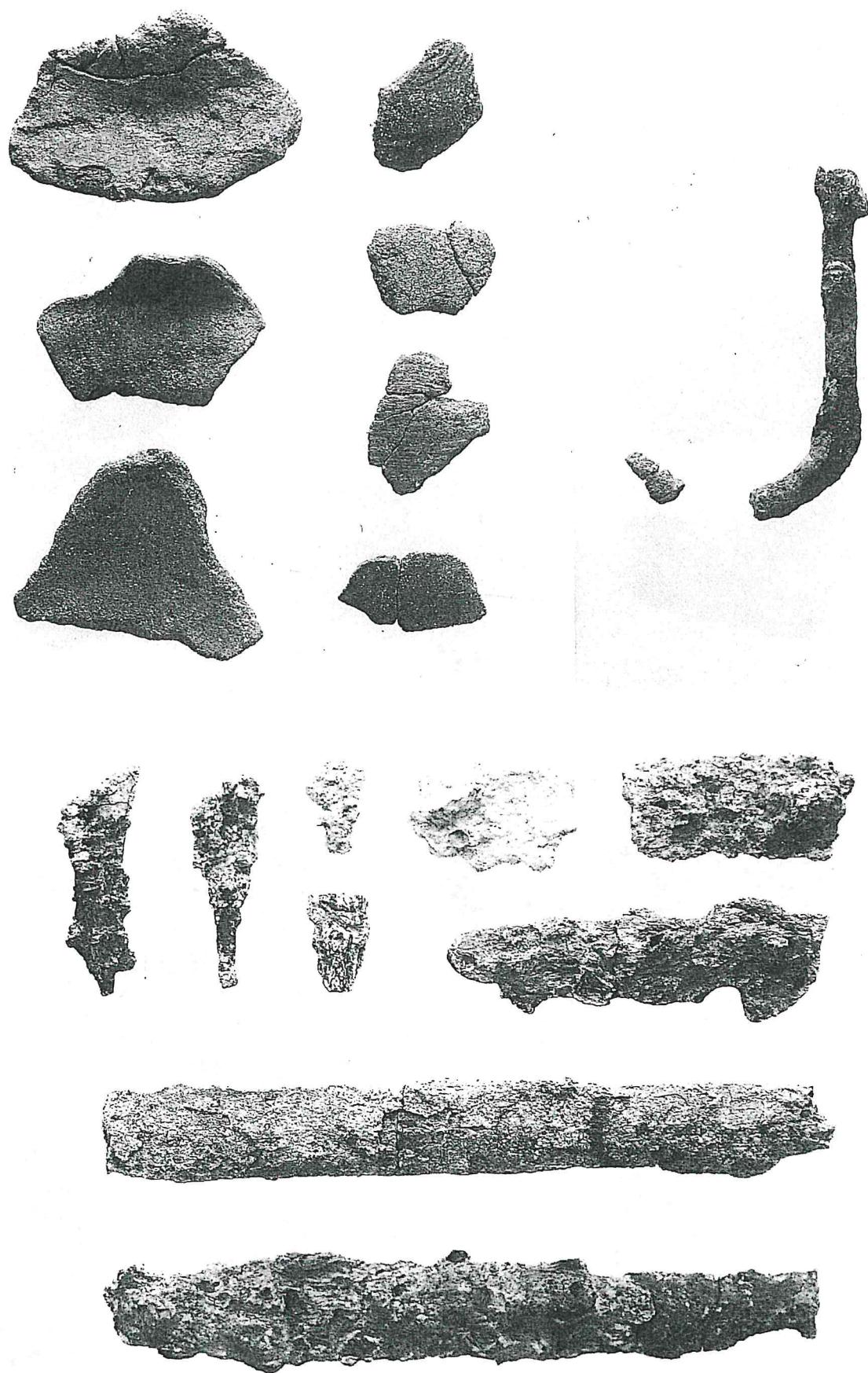


上：20号石棺 掘り上げ後（北より） 下：同（東より）

図版16



上：20号石棺 基部の状況 下：同



上・左：7・11号石棺出土土器(1/2) 上・右：7号石棺出土鉄製釣針（夷犬）  
下：11号石棺出土鉄器 (1/2)

図版18

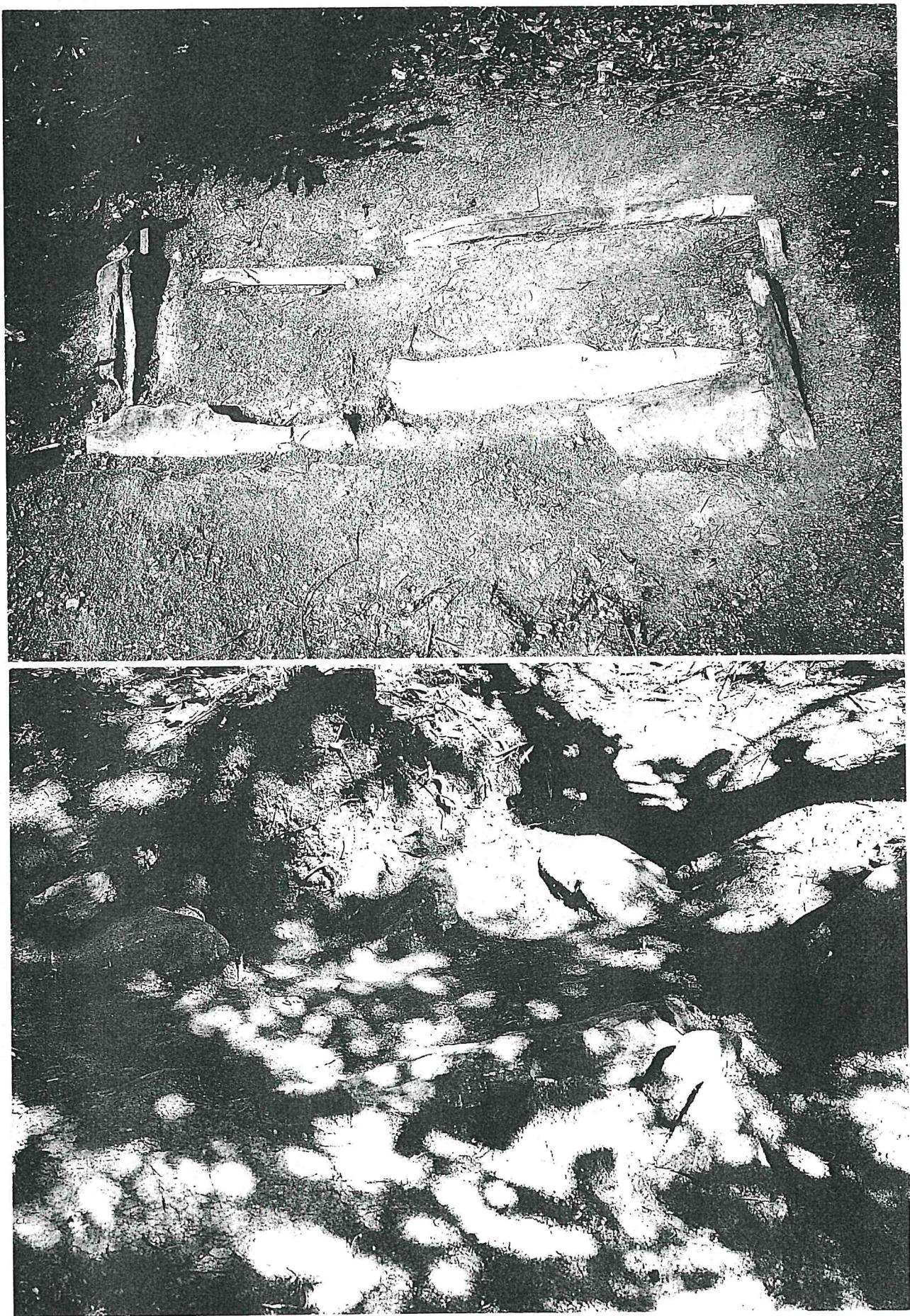


上: 11号石棺出土土器 (1/2) 下: 20号石棺出土土器・鉄器 (1/2)

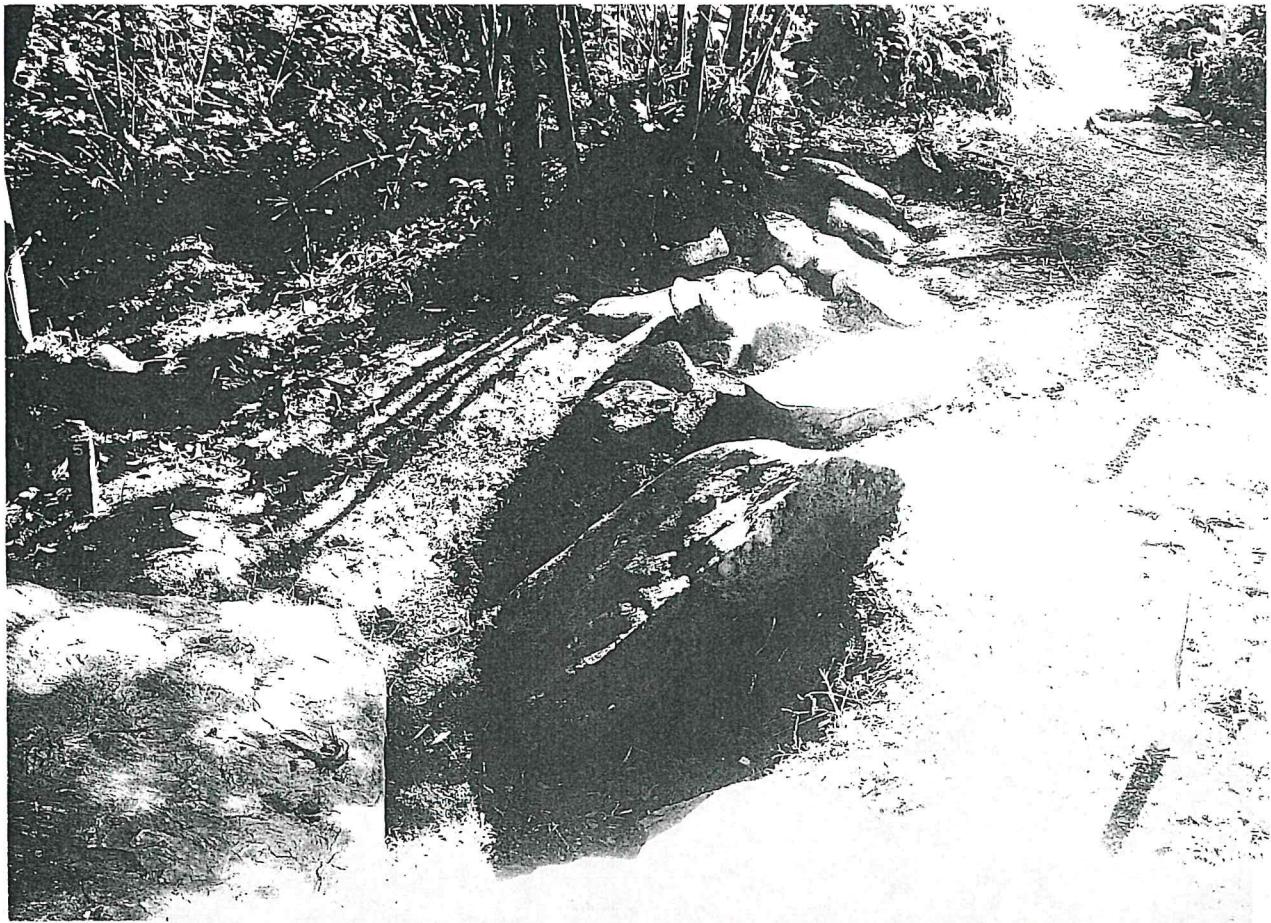


上：2号石棺現状（北より） 下：3号石棺現状（西より）

図版20

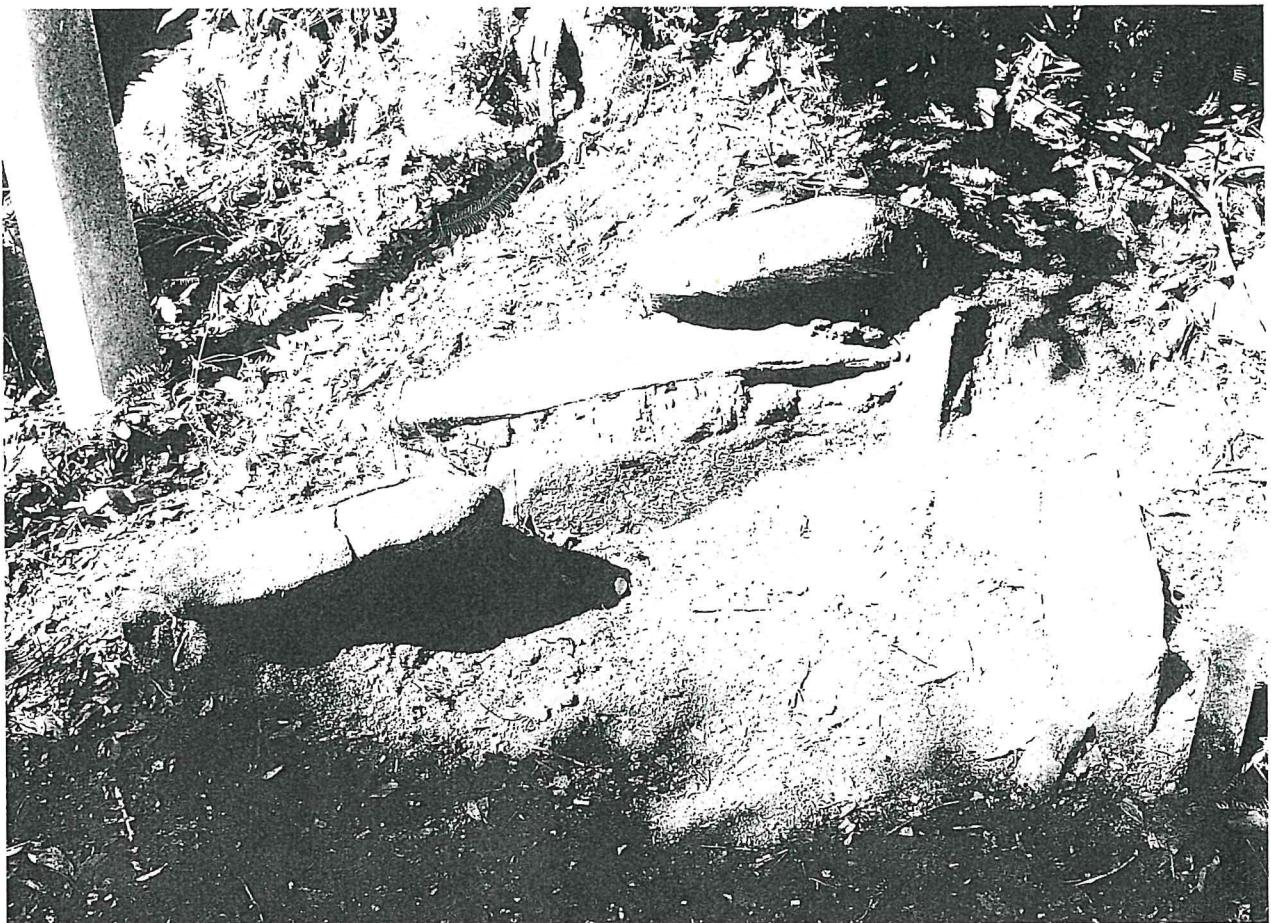


上：4号石棺現状（北西より） 下：6号石棺現状（南より）

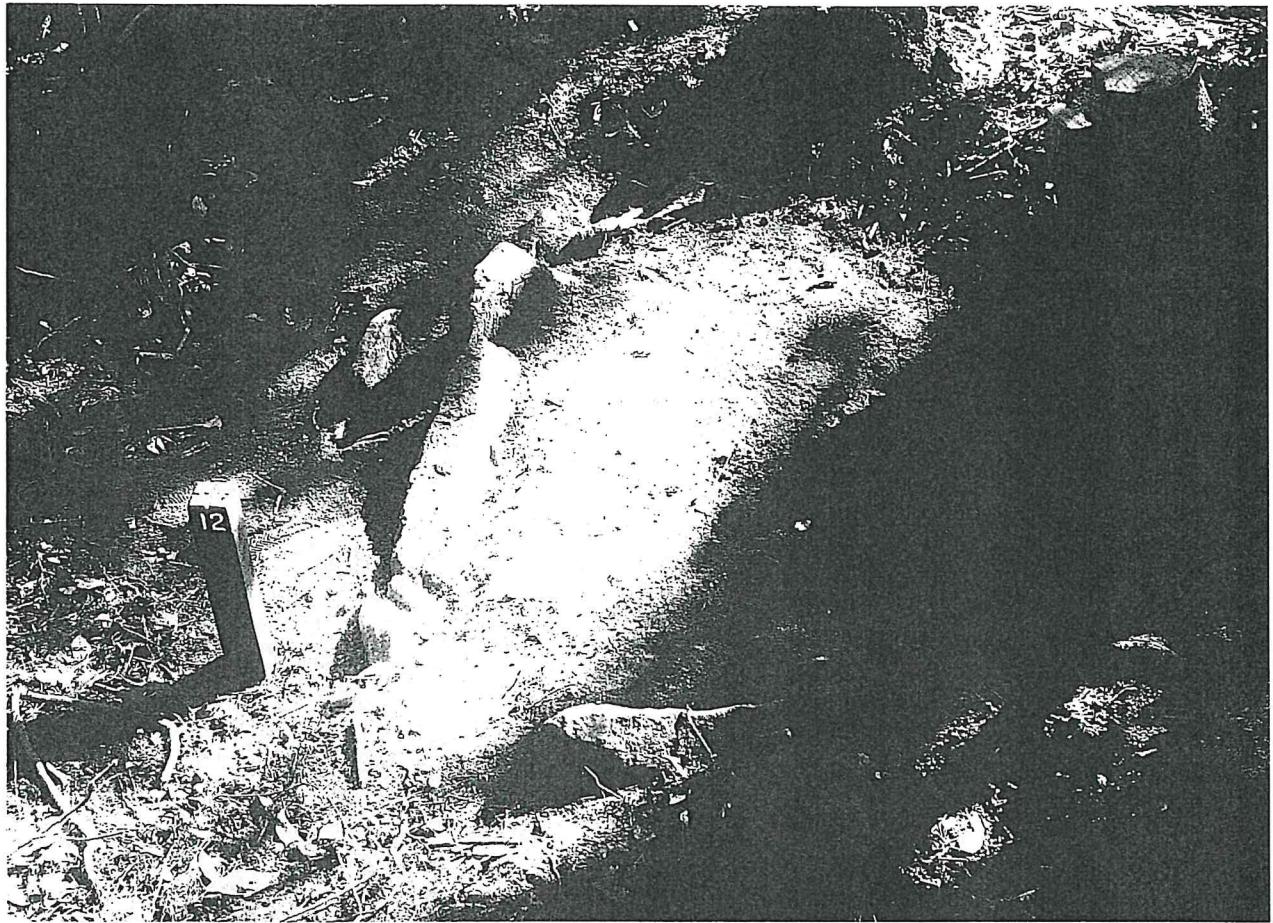


上：5号石棺現状（西より） 下：同 石棺材（南より）

図版22

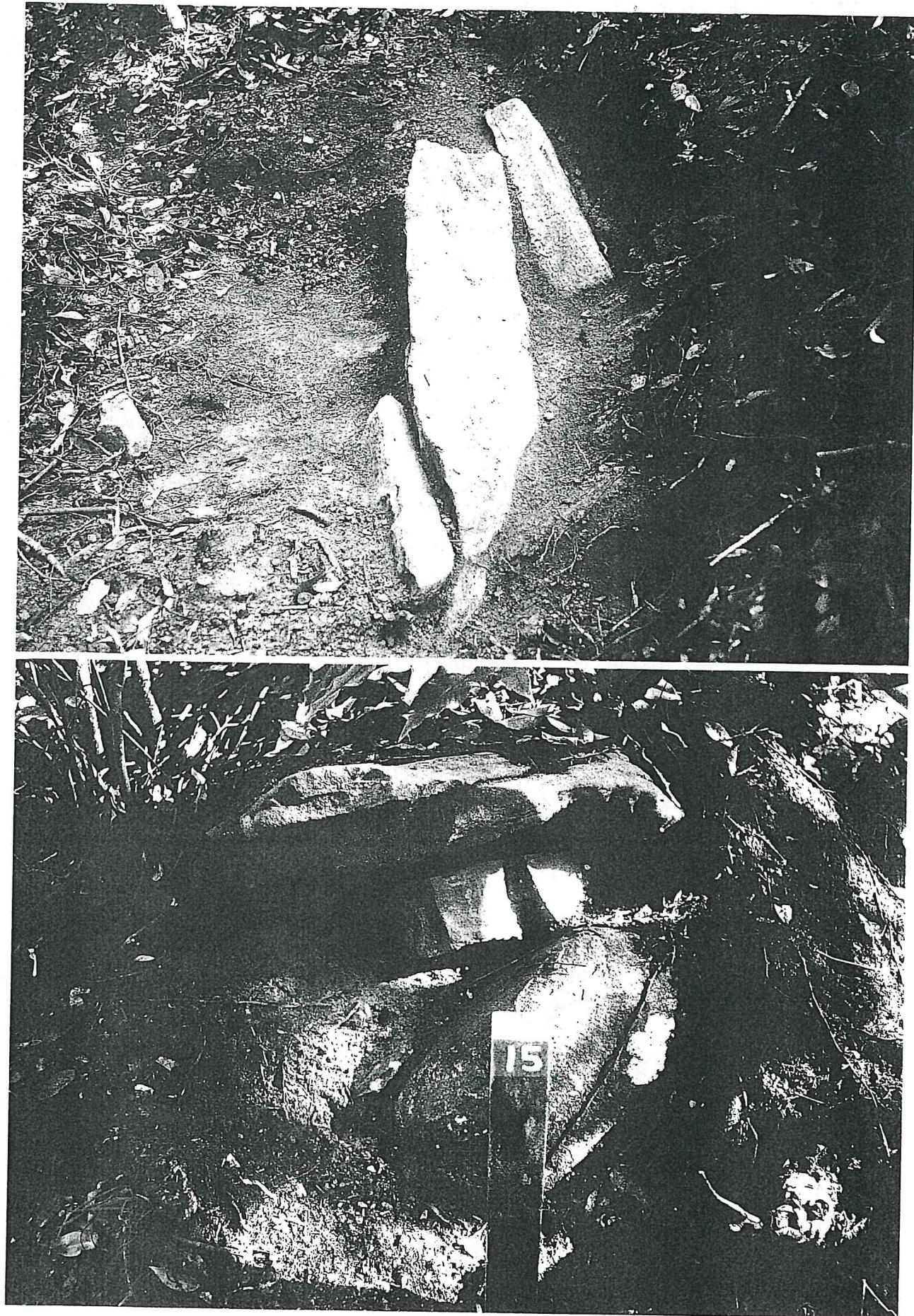


上：8号石棺現状（東より） 下：9・10号石棺現状（南東より）



上：12号石棺現状（西より） 下：13号石棺現状（南より）

図版24

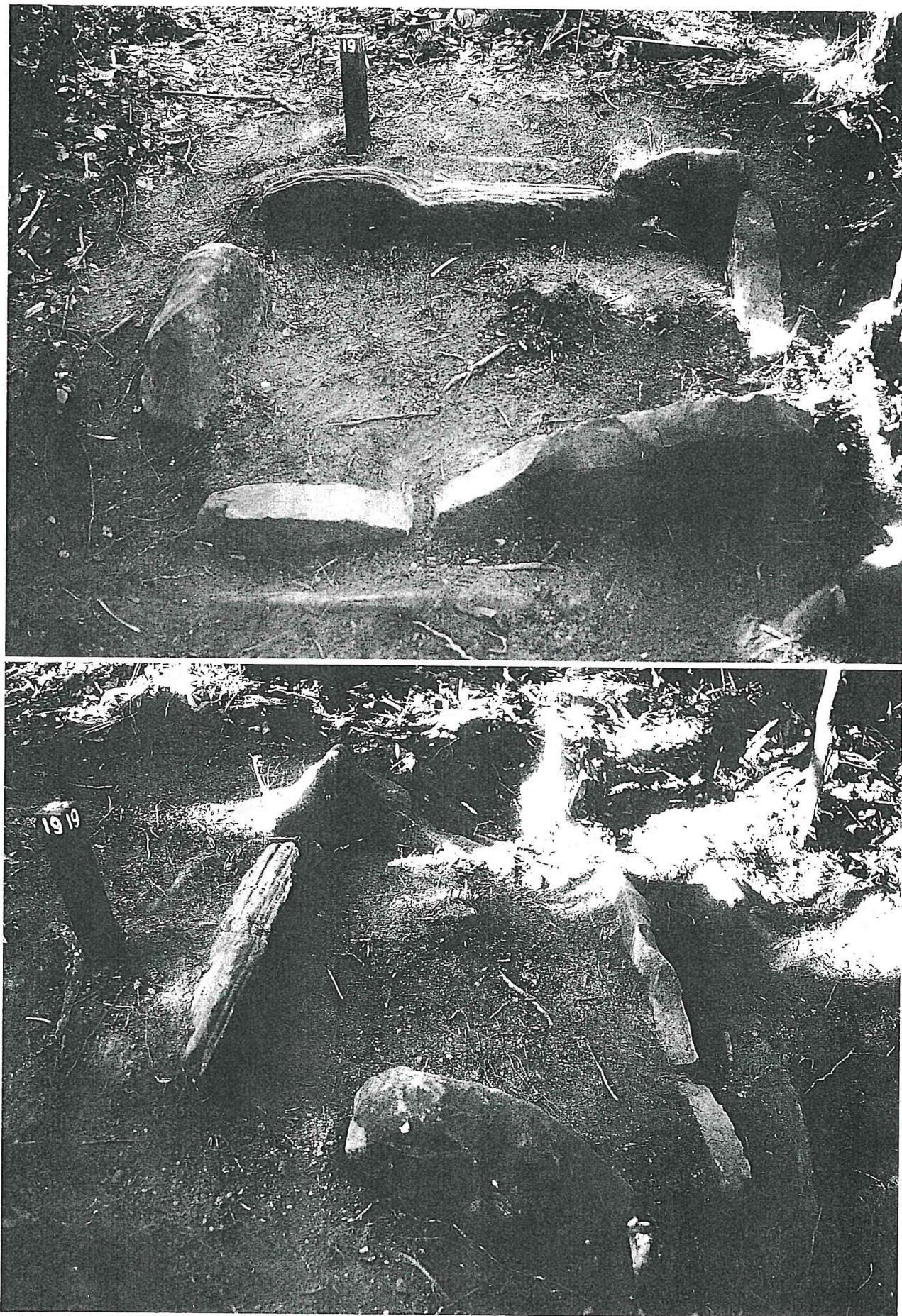


上：14号石棺現状（東より） 下：15号石棺現状（南より）



上：17号石棺現状（東より） 下：18号石棺現状（南より）

図版26

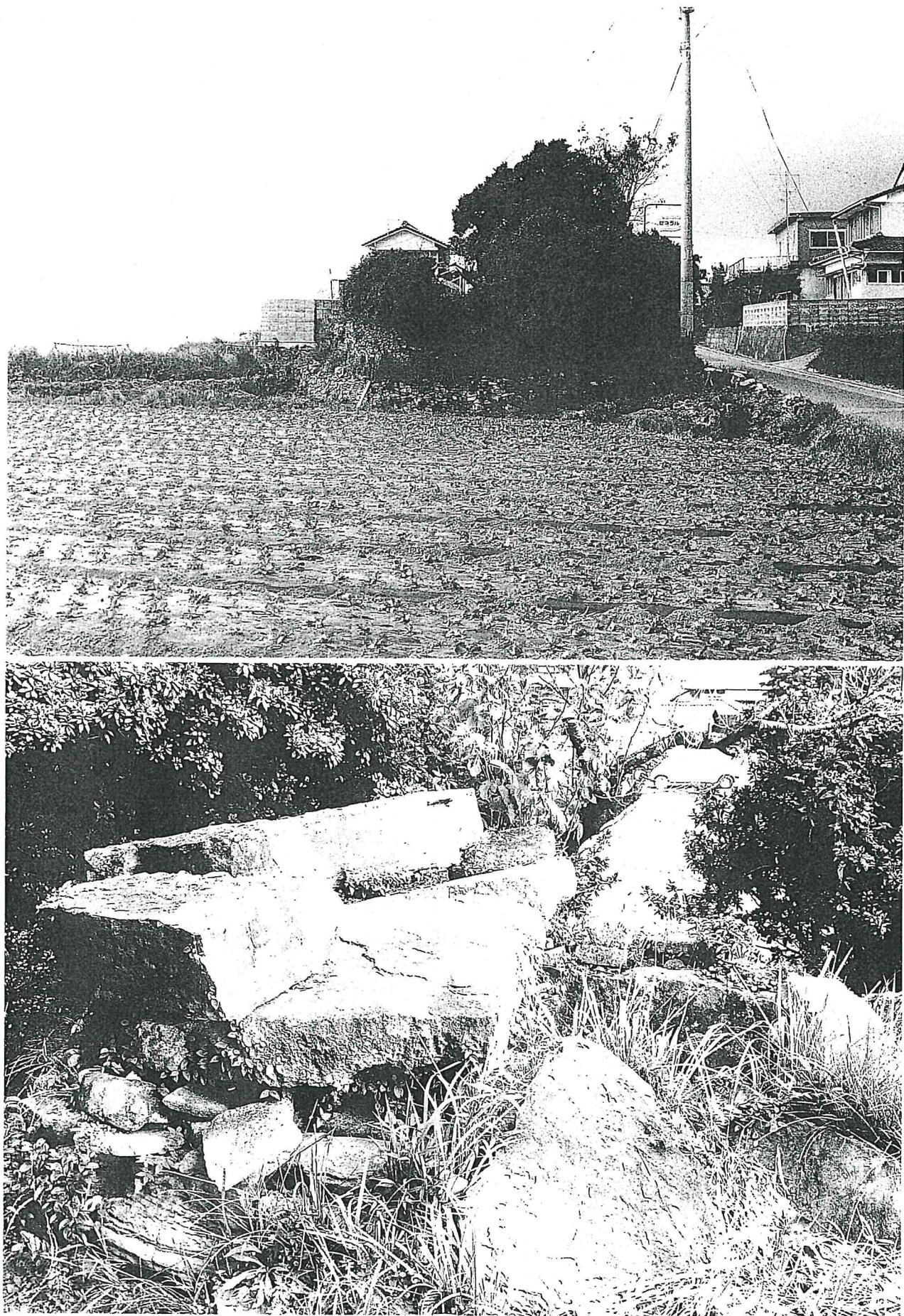


上：19号石棺現状（北より） 下：同（東より）

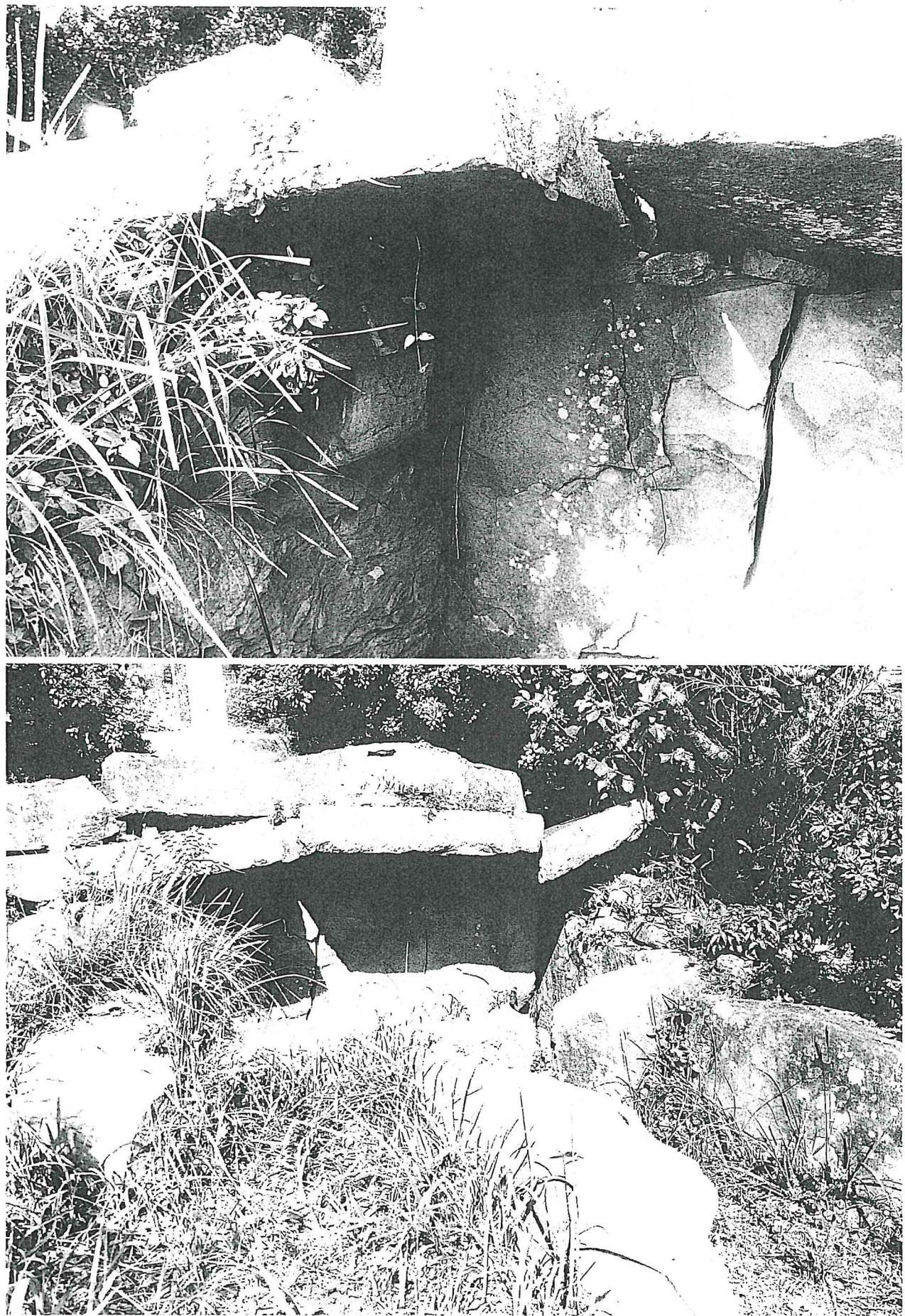


上：21号石棺現状（西より） 下：22号石棺現状（西より）

図版28

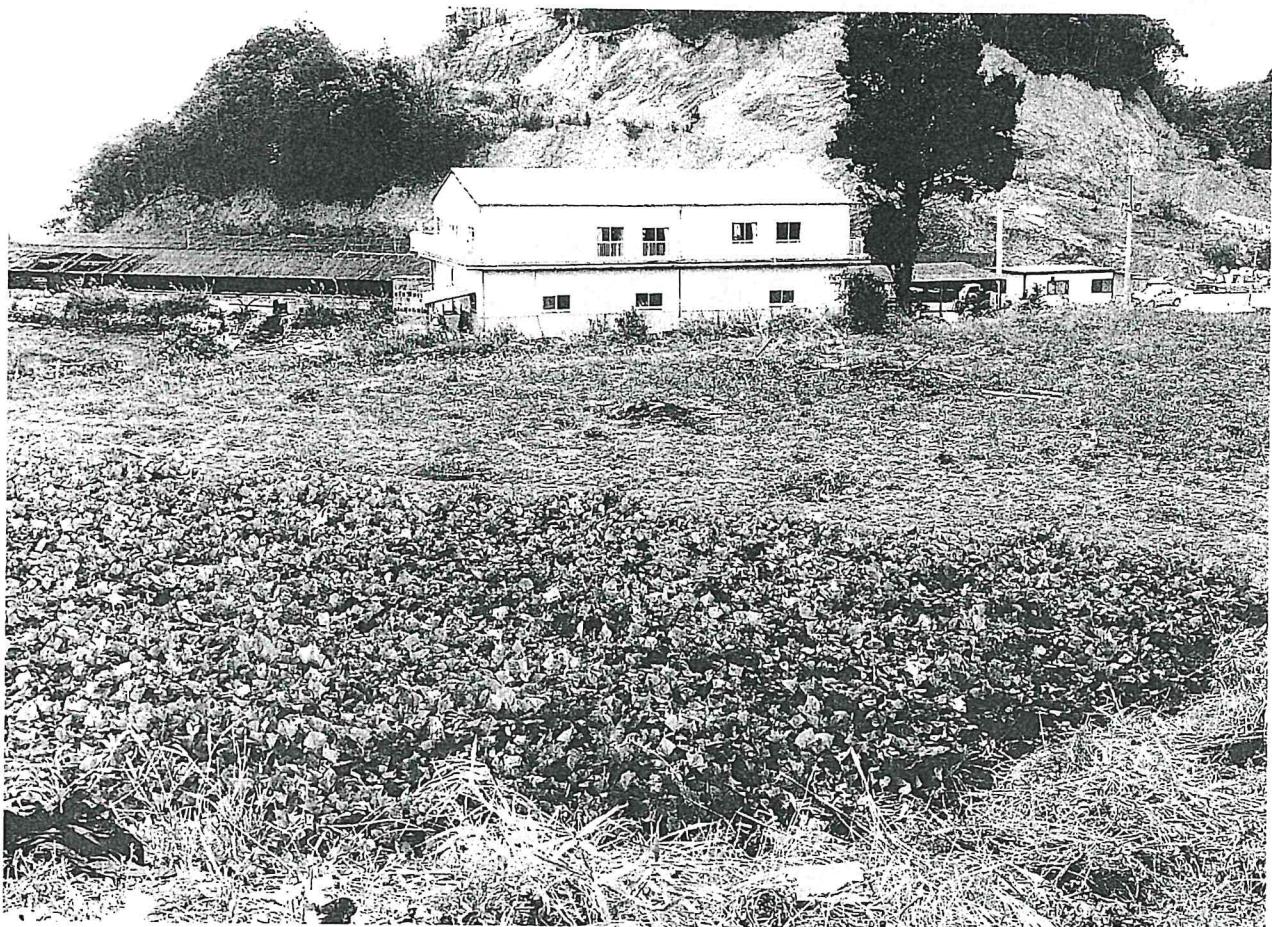


上：境目古墳近景 下：同 現状

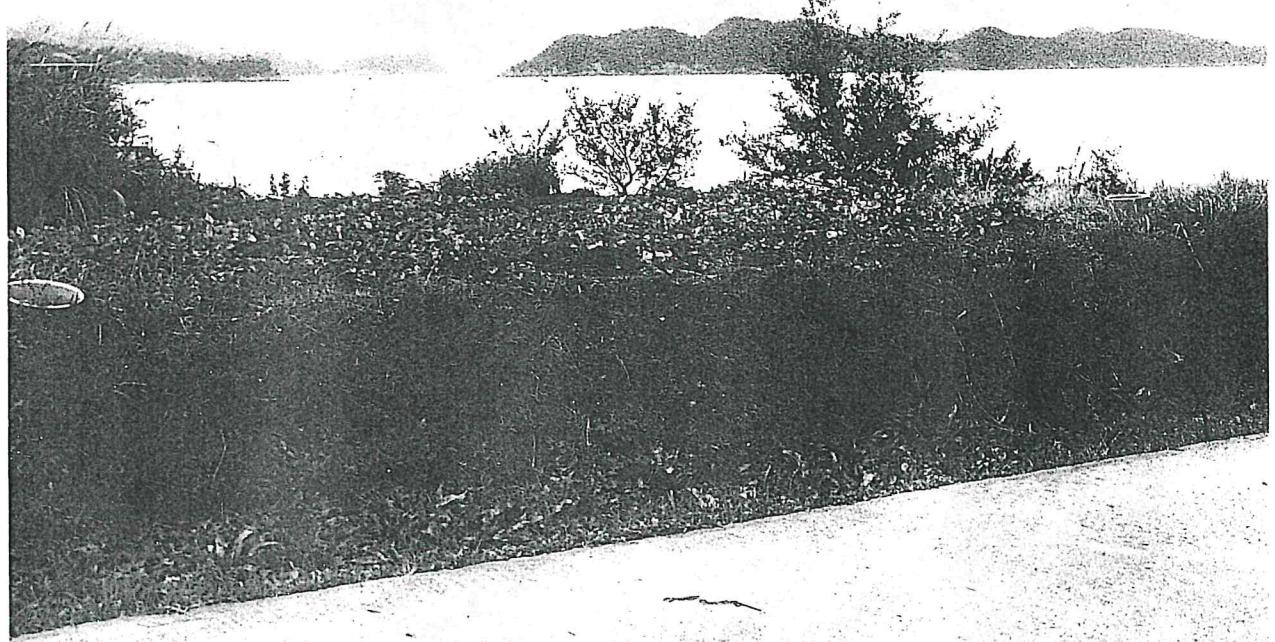
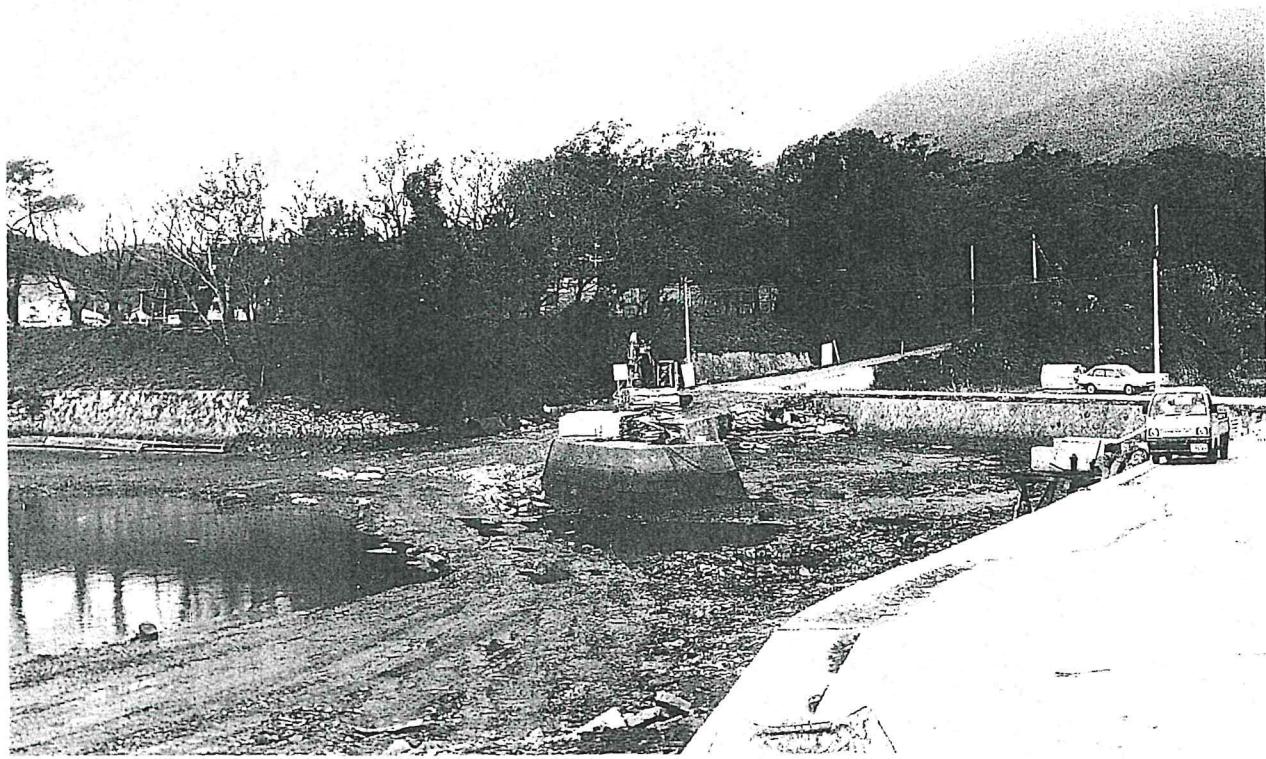


上：境目古墳現状 下：同

図版30

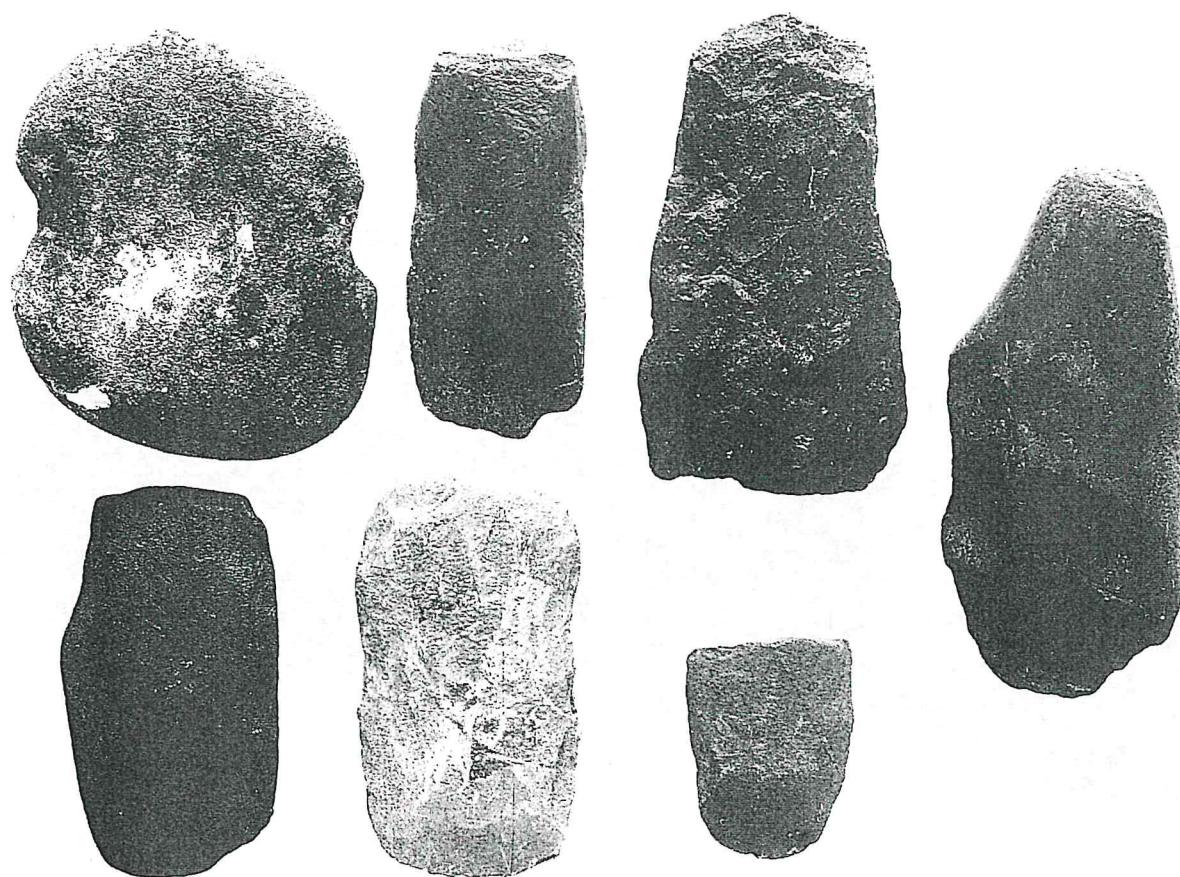


上：下塔尾遺跡近景 下：塔尾遺跡近景



上：小崎遺跡近景 下：曙遺跡近景

図版32



上：浦川遺跡近景 下：曙遺跡出土石器

# 宮崎石棺墓群

— 確認調査報告書 —

平成 2 年 3 月 4 日 発行

編集発行 宮崎石棺墓群調査団

代表 甲 元 真 之

印 刷 所 (資)下田印 刷

